

秋田県文化財調査報告書第183集

西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V

—— 太田谷地館跡第2次調査 ——

1989・3

秋田県教育委員会

西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V

— 太田谷地館跡第2次調査 —

1989・3

秋田県教育委員会

## 序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これら過去の文化財遺産は現在に生きる県民の責任で保護し、未来に継承していくことがより良き社会の形成に大事なことと考えます。

このほど農業用基幹道路として西山地区農免農道整備事業が着手され、路線の一部が太田谷地館跡を通過することになりました。このため、昨年度は第1次調査、本年度は第2次調査を実施いたしました。

その結果、平安時代の竪穴住居跡5軒、土坑8基などが検出され、土師器・須恵器などが出土しました。特に竪穴住居跡からは能代以北に分布する白頭山火山灰が検出され、年代を特定できる貴重な資料を得る事ができました。

本書は調査成果をまとめたものであり、郷土の歴史研究と埋蔵文化財の保護に広く活用していただければ幸いです。

最後に、この調査にご協力いただきました秋田県農政部鹿角農林事務所、鹿角市教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

平成元年3月25日

秋田県教育委員会

教育長 斎藤 長

## 例　　言

- 1 本報告書は、鹿角市・西山地区農免農道整備事業に係る太田谷地館跡第2次発掘調査報告書である。調査は昭和63年8月29日～同年11月12日にわたって実施した。
- 2 本報告書の執筆は、第4章第1節3の(1)を和泉昭一、それ以外を柴田陽一郎が行った。
- 3 第5章「自然科学的分析 「太田谷地館跡出土火山灰の蛍光X線分析」は、奈良教育大学教授 三辻利一氏の玉稿であり、心から感謝申し上げる。
- 4 土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』に掲った。
- 5 遺跡の発掘調査にあたり、秋田県立十和田高等学校教諭 鎌田健一氏、鹿角市教育委員会社会教育課主任 秋元信夫氏からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

## 凡　　例

- 1 壁穴住居跡の柱穴に付した数値は、床面からの深さである。(単位cm)
- 2 各遺構・遺物に付している略記号は以下の通りである。

S I	……壁穴住居跡	S D	……空堀	S K	……土坑	S N	……焼土遺構
S X	……性格不明の遺構	M	……鉄製品	S	……石		

遺物出土状況図で使用した番号は、現場で遺構毎に採り上げた番号である。
- 3 遺構はその性格に関係なく全て通し番号とし、第1次調査に引き続き150から付した。
- 4 掘図中の遺物実測図と拓本は全て通し番号とし、図版中の遺物もそれにしたがった。
- 5 觀察表中の法量の推定値は( )で表示した。
- 6 須恵器は土師器と区別するため、掘図中の実測図断面を黒く塗りつぶしている。
- 7 掘図中のスクリーントーン・シンボルマーク・土器の調整技法は以下のようにした。



# 目 次

## 序

### 例 言・凡 例

### 目 次

第1章 はじめに	1	(4) 空洞跡	44
第1節 実地調査に至るまで	1	(5) 柱穴様ピット	50
第2節 調査の組織と構成	1	(6) その他の遺構	51
第2章 遺跡の立地と環境	3	4. その他の遺構と遺物	51
第1節 遺跡の位置と立地	3	(1) 土坑	51
第2節 歴史的環境	5	(2) 燃土遺構	51
第3章 調査の概要	8	(3) 柱穴様ピット	57
第1節 遺跡の観察	8	第2節 遺構出土の遺物	57
第2節 調査の方法	13	1. 綱文時代の遺物	57
第3節 調査の経過	13	(1) 土器	57
第4章 調査の記録	15	(2) 石器	58
第1節 遺構と遺物	15	2. 弥生時代の遺物	58
1. 綱文時代	15	(1) 土器	58
(1) 土坑	15	3. 平安時代の遺物	58
2. 弥生時代	16	(1) 土器	58
(1) 土坑	16	(2) 鉄製品	58
(2) 坑上遺構	16	(3) 陶製品	58
(3) 柱穴様ピット	17	第5章 自然科学的分析	80
3. 平安時代	17	第1節 火山灰分析	80
(1) 壁穴住居跡	17	第6章 まとめ	84
(2) 土坑	43	写真図版	
(3) 燃土遺構	44		

### 挿 図 目 次

第1図 太田谷地駆除施設の地形	4	第20図 S I 150壁穴住居跡カマド	42
第2図 太田谷地駆除の位置と周辺の遺跡	6	第21図 S D102空洞跡	45・46
第3図 工事作業場と発掘調査区	9・10	第22図 S K土坑	52
第4図 遺構配置図	11・12	第23図 S K土坑・S N坑土遺構	53
第5図 遺跡基本十周図	14	第24図 S K土坑・S N横土遺構・柱穴様ピット・S X性格不明の遺構	54
第6図 S I 150壁穴住居跡	19・20	第25図 柱穴様ピット分布図	55・56
第7図 S I 150壁穴住居跡 カマド	21・22	第26図 弥生時代の遺構内出土遺物	59
第8図 S I 150壁穴住居跡カマド遺物出土状況	23・24	第27図 S I 150壁穴住居跡出土遺物1	60
第9図 S I 151壁穴住居跡	27・28	第28図 S I 150壁穴住居跡出土遺物2	61
第10図 S I 151壁穴住居跡カマド平面図 遺物出土状況	29・30	第29図 S I 150壁穴住居跡出土遺物3	62
第11図 S I 152壁穴住居跡平面図・遺物出土状況	31・32	第30図 S I 151壁穴住居跡出土遺物	63
第12図 S I 157壁穴住居跡	33	第31図 S I 152壁穴住居跡出土遺物	64
第13図 S I 157壁穴住居跡火山灰検出状況	34	第32図 S I 157壁穴住居跡出土遺物	65
第14図 S I 157壁穴住居跡遺物出土状況	35	第33図 S I 158壁穴住居跡出土遺物	66
第15図 S I 157壁穴住居跡カマド	36	第34図 S D102空洞跡出土遺物	66
第16図 S I 157壁穴住居跡カマド遺物出土状況	37	第35図 平安時代の遺構内出土遺物	68
第17図 S I 158壁穴住居跡	39	第36図 遺構外出土遺物1(縄文上器)	69
第18図 S I 158壁穴住居跡火山灰検出状況	40	第37図 遺構外出土遺物2(平安上器)	70
第19図 S I 158壁穴住居跡遺物出土状況	41	第38図 遺構外出土遺物3(弥生土器・石器)	71

第39図	遺構外出土遺物(4)土師器	72	第44図	太田谷地跡山上火山灰のK-Ca分布図	82
第40図	遺構外出土遺物(5)土師器・須直器・ 輪羽口	73	第45図	太田谷地跡山上火山灰のFe量	82
第41図	土師器把手付土器	74	第46図	火山灰の蛍光X線スペクトル	83
第42図	鉄製品・鉄斧・輪羽口	75	第47図	時代別遺構・遺物分布図1	86
第43図	太田谷地跡山上火山灰のNb-S分布図	82	第48図	時代別遺構・遺物分布図2	87

## 表 目 次

第1表	太田谷地跡跡と周辺の遺跡一覧表	7	第8表	S 1158出土土器統計表	77
第2表	S D102出土器統計表(A~B)	47	第9表	S D102出土土器統計表	78
第3表	S D102出土器統計表(C~D)	48	第10表	平安時代の遺構内出土土器統計表	78
第4表	S I150出土土器統計表	76	第11表	遺構外出土土器統計表	78
第5表	S I151出土土器統計表	77	第12表	土師器把手付土器統計表	79
第6表	S I152出土土器統計表	77	第13表	火山灰の分析結果	83
第7表	S I157出土土器統計表	77			

## 図 版 目 次

図版1	太田谷地跡跡航空写真(北東)		3. SI157壁穴住居跡灰化材出土状況(東)	
図版2	1. 調査前(北東)		図版9 1. SI158壁穴住居跡出土状況(南東)	
	2. 調査後(南西)		2. SI158壁穴住居跡火山灰検出状況(南西)	
図版3	1. 道跡基本図位 MDT61グリッド東壁(北東)		図版10 1. SI158壁穴住居跡上層断面 -A~B-(南西)	
	2. 道跡基本位置 MDT71グリッド東壁(北西)		2. SI150+157+158壁穴住居跡光盤後(南)	
	3. 北東部大場厚石(第II層)検出状況(西)		図版11 1. SK174上坑検出状況(北西)	
図版4	1. SI150壁穴住居跡検出状況(北東)		2. SK174上坑検査状況(南西)	
	2. SI150壁穴住居跡完掘後(北西)		3. SK174上坑上層断面(北東)	
図版5	SI150壁穴住居跡カマド検出及び遺物出土状況 など		4. SX176その他の道構検出状況(北)	
	1. 壁穴住居跡上層断面-C~D-(北東)		5. SX176その他の道構上層断面(南)	
	2. カマド検出状況(北西)		6. SX176その他の道構遺物出土状況(南)	
	3. カマド上層断面-C~D-(北東)		7. 柱穴様ピット5把手付土器出土状況(北東)	
	4. カマド遺物出土状況(北西)		8. 柱穴様ピット5把手付土器出土状況(北東)	
	5. カマド上層断面-C~D-(北東)		図版12 1. SD102空洞跡LRライン上層断面 -C~D-(北東)	
	6. カマド完掘後(北西)		2. SD102空洞跡Mライン完掘後(南東)	
	7. カマド上層断面-C~D-(南西)		3. SD102空洞跡調査後(南西)	
	8. カマド内上蓋土脚引抜状況(北東)		図版13 SI150壁穴住居跡出土遺物(1)	
図版6	1. SI151壁穴住居跡完掘後(西)		図版14 SI150壁穴住居跡出土遺物(2)	
	2. SI152壁穴住居跡完掘後(北西)		図版15 SI157壁穴住居跡山上遺物	
図版7	1. SI157壁穴住居跡完掘後(東)		図版16 SI157壁穴住居跡柱跡・柱穴様ピット3+5 山上遺物	
	2. SI157壁穴住居跡柱跡山上遺物			
図版8	1. SI157壁穴住居跡火山灰検出状況(東)			
	2. SI157壁穴住居跡火山灰検出状況(東)			

## 第1章 はじめに

### 第1節 発掘調査に至るまで

鹿角市の西山地区は、丘陵地や山地斜面を切り開いて作られている果樹園・畠地などが多く、そこに至る道路は勢い狭く急勾配が多かった。このため、果物や野菜などの農産物の搬出路の整備が望まれていた。これを受け秋田県農政部は、昭和57年に西山地区農免農道整備事業計画を策定し、昭和65年度の工事終了・開通をめざして、昭和58年に一部工事を着工した。この農道の全長は6.51kmで、鹿角市尾去沢の北約1kmの久保田橋を起点として、北は鹿角市十和田の神田に至り、米代川西岸に沿って北上するものである。

本農道の計画路線周辺には周知の遺跡が存在していたが、一部工事が着工されていたため、路線変更は困難と判断された。そこで県農政部鹿角農林事務所は文化財保護法に基づき秋田県教育委員会に遺跡調査の依頼を行った。秋田県教育委員会ではこれを受けて、計画路線上の遺跡調査の要・不要、遺跡の有無を確定するため、昭和59年の6月26・27日と12月3・4日の2回に分けて遺跡分布調査を実施した。6月は路線上を踏査し、12月は前者の結果をふまえて坪掘りによる補足の試掘調査を行ったもので、その結果8遺跡が存在することがわかった。

昭和60・62年には遺跡分布調査の結果をうけて、路線内の発掘調査面積を決定するため3回に分けて遺跡範囲確認調査を実施した。昭和60年6月10~12日に堪忍沢・高瀬館の各遺跡、同年10月14~19日には中畑・太田谷地館・用野目川向Ⅰ・高屋館の各遺跡、昭和62年には用野目川向Ⅱ・Ⅲ遺跡の範囲確認調査を行ったが、その結果、発掘調査を必要とするのは堪忍沢・高瀬館・太田谷地館・高屋館・用野目川向Ⅲの5遺跡であることを確定した。

この間、発掘調査は昭和61年の堪忍沢遺跡、高瀬館跡から始まり、昭和62年には太田谷地館跡第1次調査が、昭和63年には太田谷地館跡第2次調査、用野目川向Ⅲ遺跡、高屋館跡第1次調査が実施された。

### 第2節 調査の組織と構成

所在地 秋田県鹿角市花輪字中畑27番地外

調査期間 昭和63年8月29日~11月12日

第1章 はじめに

調査対象面積 2,500m<sup>2</sup>

調査面積 2,500m<sup>2</sup>

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 柴田陽一郎(秋田県埋蔵文化財センター文化財主事)  
和泉 昭一(秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

総務担当 加藤 進(秋田県埋蔵文化財センター主査)  
高橋忠太郎(秋田県埋蔵文化財センター主事)

調査協力機関 秋田県農政部鹿角農林事務所  
鹿角市教育委員会  
鹿角市高屋自治会

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置と立地

#### 1. 地理的位置(第1・2図)

本遺跡は鹿角市花輪字中畠に所在し、おおよそ北緯40度13分、東経140度46分の位置にある。遺跡はJR東日本花輪線花輪駅から直線距離にして北へ5kmの地点で、国道282号から西に折れて米代川を渡ると高屋集落があり、この集落から西へ約500mほど登りきった台地上に立地する。

#### 2. 地形・地質概況(第1・2図)

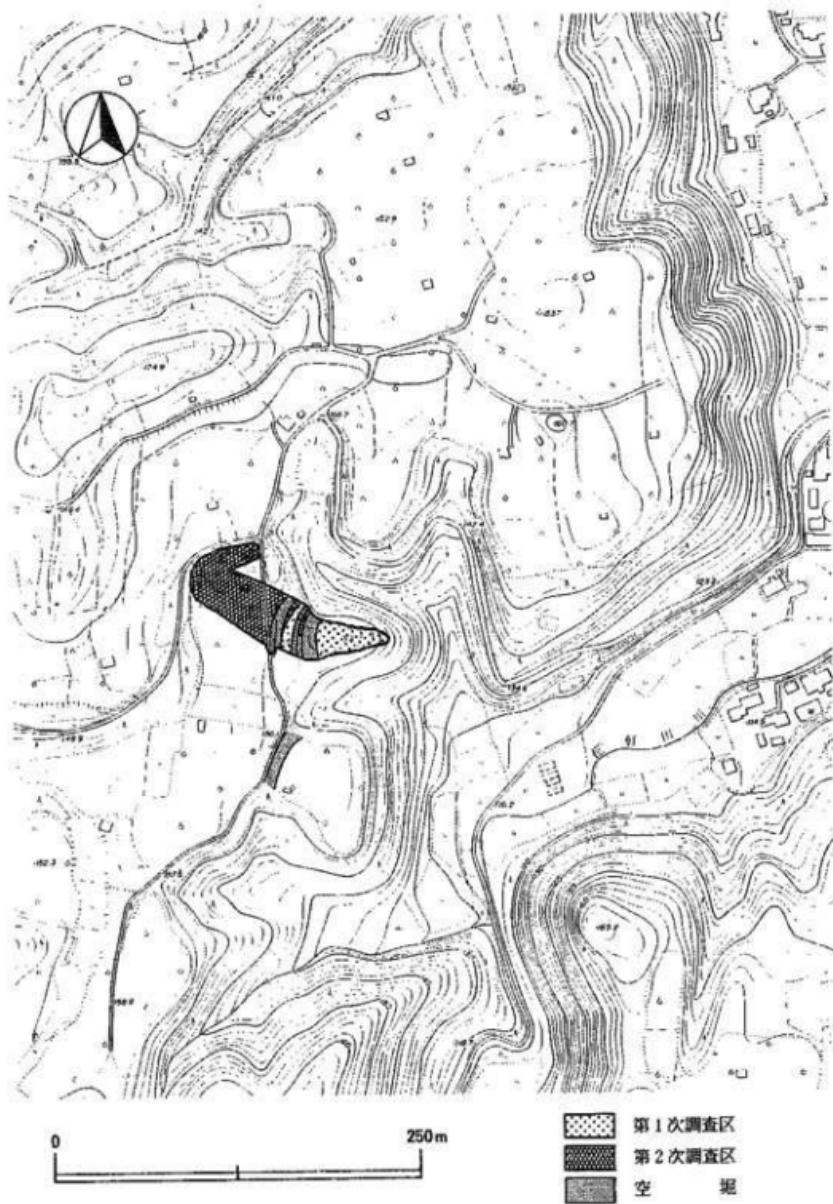
鹿角地方は秋田県の北東部に位置し、北に青森県、東は岩手県に境を接している。本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区別される。

東に標高100~800mの奥羽脊梁山脈、東に標高200~350mの高森山地が真近に臨んでおり、これら山麓線の間には花輪盆地が南北に長く、北に開けた三角形を呈して広がっている。盆地内には、十和田火山起源の火山噴出物とその二次堆積物からなる段丘が広く分布していて、花輪以南ではその発達が良好で、その間には沖積地が広がる。また、東の岩手県に源流をもつ米代川は、はじめ脊梁山脈を西に流下して盆地内にいたってその西端を北流する。

米代川の両岸には6つの段丘面が確認されており、右岸はその発達が顕著で、左岸は少なく、その大部分は山地で、河岸段丘は盆地の西端を米代川に沿うようにわずかに分布する。特に西山付近の尾去沢から高屋の間ではほとんど沖積地は形成されず、目立った段丘もなく、標高180~300mの山地・斜面が連続して米代川に臨む。

高屋集落の西側台地は標高152~175mで、緩斜面となっている所はあるものの比較的平坦部も多く、現在果樹栽培、畑作などが行われている。この台地は幅約1,200m、長さ約1,600mの南北に細長い段丘面で、鳥越段丘に相当する。本段丘は、十和田火山噴出物第1期の軽石流堆積物である鳥越軽石質火山灰層(約12,000年前)が上面で、その下に高市軽石質火山灰層が堆積したものと思われ、最下位の新第三紀・中新世の相内玄武岩部層の上にのる。段丘下の北には花軒田川があり、東流して米代川に注ぐ。

以上のように太田谷地館跡は、米代川左岸の鳥越段丘が米代川の1支流である花軒田川や小さな沢によって開析された舌状台地上に立地しており、昭和62年の第1次調査ではその舌状部分を、本年は第2次としてその付け根部分の北西側を調査したのである。



第1図 太田谷地館跡周辺の地形

## 第2節 歴史的環境

鹿角地方は前述のように、東西の山地間に花輪盆地が開け、そこを北流する米代川の両岸には段丘地形が発達しており、右岸に段丘が多い。その段丘面の標高が150～200m前後の所に遺跡が集中する傾向があり、縄文時代の古い時期から人々の生活の痕跡を辿る事ができる。

古くは、縄文時代草創期の遺物として、中の崎遺跡から爪形文土器が出土している。縄文時代の集落跡としては前期末の清水向遺跡があり、県内で最も早く縄文時代の住居跡が見つかった遺跡として知られる。中期になると遺跡数は増加し、天戸森遺跡のように140軒もの竪穴住居跡を検出した大規模な集落跡を調査した例もある。後期になると、大湯環状列石に代表されるように配石を伴った造構などが検出されるようになり、宗教的意味あいが強くなる遺跡が多く認められるようになる。昭和63年に調査された玉内遺跡からは、後期から晩期前半の土壙墓、土器棺墓が検出されている。弥生時代の遺跡は30数箇所で確認されているが、遺物の出土は散発的でまとまった資料はない。古代・中世の遺跡については秋田県教育委員会、東北縦貫自動車道関係の発掘調査と鹿角市教育委員会の発掘調査によって、平安時代の竪穴住居跡などや館跡における多くの資料が蓄積されてきた。

一方、米代川左岸は山地が多くて、段丘が少なく、右岸に比べかなり遺跡数が少ない。しかし数少ない段丘の平坦面や緩斜面には縄文～中世の遺跡が立地する。太田谷地館跡周辺では、北約1.0～1.5kmの地点に縄文時代を中心とした遺跡群が立地し、その数は13を数える。その中には弥生時代や平安時代と複合している遺跡もある。西山地区農免農道関係遺跡の調査は、第1章で述べたように、太田谷地館跡第1次調査を含めて3遺跡の調査を終了している。塙忍沢遺跡は、平安時代中葉～末葉の遺跡で13基の製鉄炉などが検出され、太田谷地館跡第1次調査では平安時代末葉の竪穴住居跡51軒、空堀3条などが検出された。また、高瀬館跡は13世紀末～14世紀初めの青磁蓮弁文碗が出土し、方形竪穴状造構11基などが検出されている。

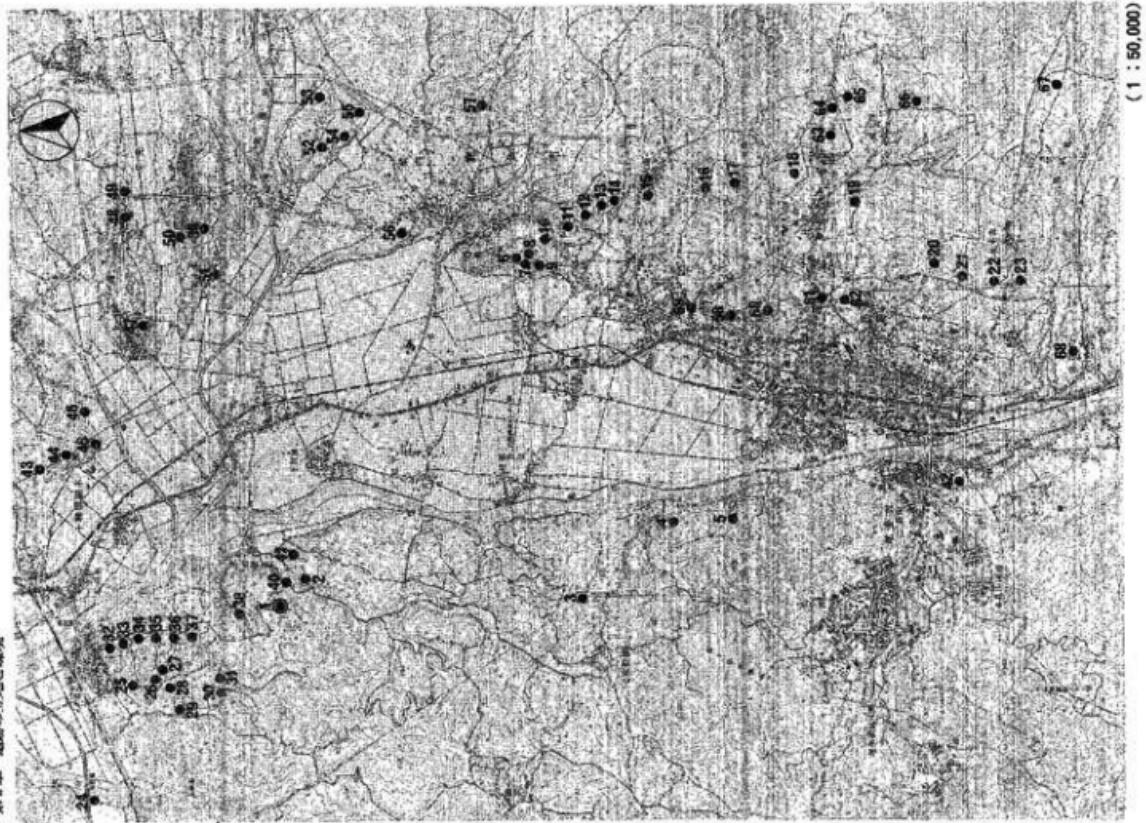
### 参考文献

井上 武・上田良一他 「秋田県総合地質図編『花輪』」 秋田県 1973(昭和48年)

藤本幸雄 「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書1』秋田県教育委員会  
1981(昭和56年)

藤本幸雄 「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII』秋田県教育委員会  
1984(昭和59年)

第2章 沼地の位置と現状



第1表 太田谷地館跡と周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	太田谷地館	縄文・弥生・平安・中世	35	上ノ野 VII	縄文
2	高屋館	縄文(後期)・中世	36	上ノ野 VIII	縄文
3	用野目川向Ⅲ	縄文・弥生・平安	37	上ノ野 IX	縄文
4	高瀬館	中世	38	戸羽の沢	縄文
5	堀忍沢	縄文・平安	39	高市向館	中世
6	西町	縄文	40	花輪 B	縄文(後期)・弥生
7	西町 II	縄文	41	花輪 C	縄文(晚期)
8	西町 I	縄文・弥生	42	下モ平	続縄文
9	乳牛	縄文(晚期)	43	冠田	平安
10	下乳牛	縄文・平安	44	曲谷地 A	古墳
11	乳牛平	縄文・平安・中世	45	曲谷地 B	古墳
12	妻の神 III	縄文・平安・中世	46	枯草板	古墳
13	妻の神 II	縄文・平安	47	小枝指館	
14	妻の神 I	縄文(晚期)・平安・中世	48	平元館 I	縄文(後期)
15	猿ヶ平 II	縄文(早期～晚期)	49	平元館 II	平安
16	猿ヶ平 I	縄文(中期～晚期)	50	小平館	
17	案内 II	縄文	51	新斗米館	
18	案内 I	縄文・平安	52	高市館	
19	孫右衛門館	縄文・平安	53	餅野 II	平安
20	柏木森	縄文・平安	54	餅野 I	続縄文・平安
21	明堂長根	縄文	55	餅野 III	縄文
22	一本杉	縄文・平安・中世	56	万谷野	平安
23	上葛岡 IV	縄文	57	餅野 IV	平安
24	石野	古墳	58	天戸森	縄文(中期)
25	上ノ野 I	弥生	59	陣場	縄文
26	上ノ野 II	縄文	60	御休堂	縄文(前期～後期)・平安
27	上ノ野 X	縄文	61	白山堂	縄文(後期)
28	上ノ野 III	縄文	62	日向屋敷 I	縄文(中期)
29	板橋 I	縄文(晚期)	63	東山 A	縄文・弥生
30	板橋 II	縄文(後期)	64	東山 B	縄文
31	板橋 III	縄文(後期)	65	赤坂 B	弥生
32	上ノ野 IV	縄文(中期)	66	座土神 A・B・C	縄文
33	上ノ野 V	縄文・平安	67	甘露	縄文
34	上ノ野 VI	縄文・平安	68	玉内	縄文(晚期)

## 第3章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

高屋集落の西側には、上面幅約東西1,200m、長さ約南北1,600mに細長い鳥越段丘が花軒田川や小さな沢によって開折され、いくつかの舌状台地を形成している。これら台地は緩斜面かあるいはほぼ平坦で、果樹園や畠地として利用されている。太田谷地館跡はそのような舌状台地の1つに立地する。調査区の標高は約156mで、台地南東側直下の沖積地との比高差は約40mほどある。

昨年実施した太田谷地館跡第1次調査の調査区は、舌状台地の付け根部から南東側の舌端部までで、今回の第2次調査は、付け根部から山寄りの北西側が調査区にあたる。調査区の現地表面はほぼ平坦であるが、北がやや高く他の3方向に緩やかに傾斜し、特に空堀のある南東方向ではその傾向が顕著である（第3・4図）。

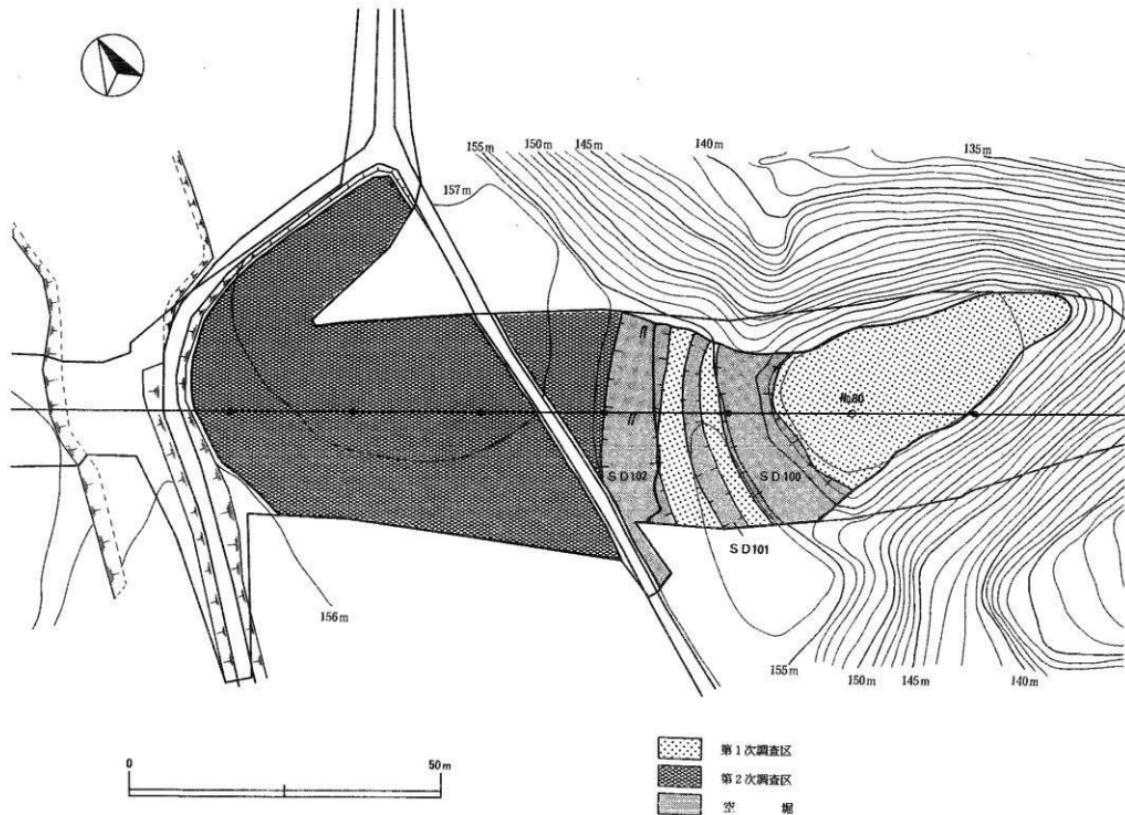
遺跡基本層位の土層断面図（第5図）はMDライン（MD61～MD75グリッド）の北壁に沿って作成した。それによれば、中央部の平坦部は表土から地山まで深さが60～70cmである。MD72グリッドから北西端にかけては50cm前後と層厚は薄くなる。北西端から下の農道にかけての斜面の土層観察によれば、第I層は最も厚いところで100cm、第II層は30～40cmと厚く、ブロック状になっている。これは、MD70グリッド以西の平坦部には第II層・第III層がないことから、小高い場所を削平後、平坦にして斜面に盛土したものと観察される。そのことは、西縁辺部一帯の第I層が薄く、しかも2層目がすぐ地山になるということ、遺構・遺物の密度が極めて希薄であるということからもうかがえる。

第I層 黒褐色土（10YR2/2）。〔表土〕 径1～5ミリの軽石粒が20%混入する。層厚20～25cmである。

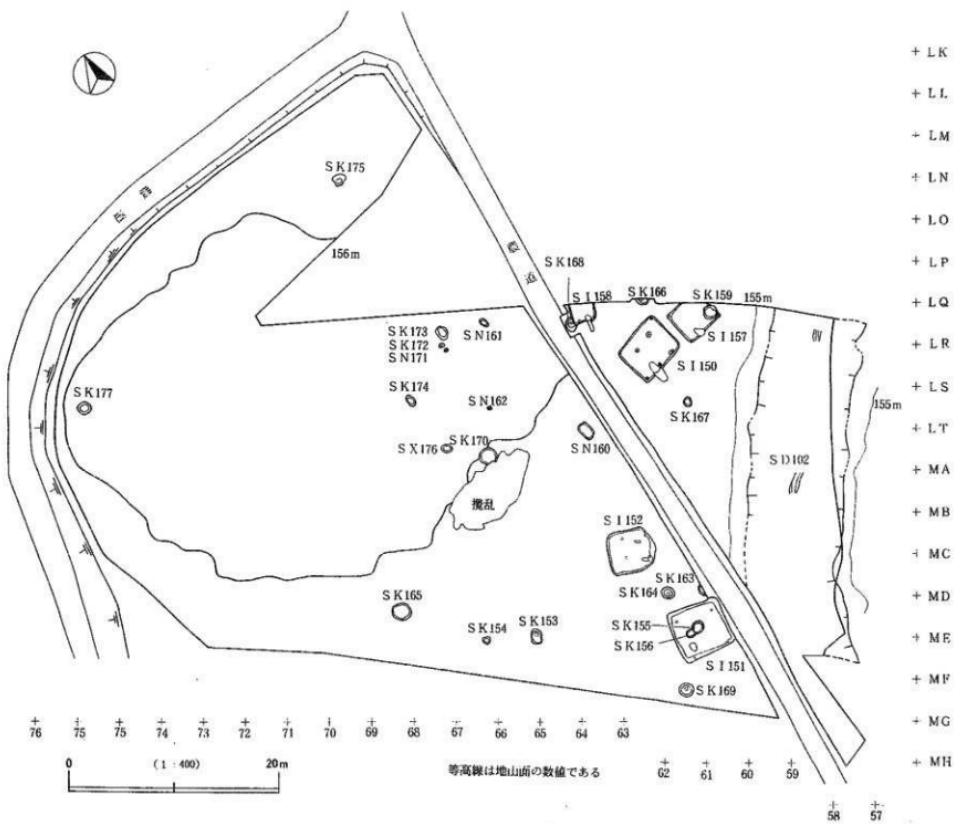
第II層 淡黄色土（10YR8/4）。〔大湯浮石層-十和田a火山灰〕 径1～5ミリの軽石粒が主体であるが黒褐色土（10YR2/2）中に10～30%混入している場合も多い。平面的にはまばらになっている所もあるが、平均5cmの層厚でしRライン以北では15cmほどの層厚がある。堅穴住居跡などはこの層から掘り込まれている。

第III層 黒褐色土（7.5YR2/2）。〔遺物包含層〕 第IV層に比較して茶色味がかっているが、平面的にはかなり見分けが難しい。

第IV層 黒褐色土（10YR2/2）。〔遺物包含層〕 径1～2ミリの地山粒子が1%混入する。



第3図 工事計画図と発掘調査区



第4図 造模配置図

繩文時代のSK164土坑などはこの層から掘り込まれている。

第V層 暗褐色土(10YR3/4)。〔地山漸移層〕 径5~15ミリの地山粒子が30%、径20~50ミリの地山ブロックが混入する。

第VI層 褐色土(10YR4/6)。〔地山一島越輕石質火山灰〕 十和田火山の噴出物である。

鹿角地方には「鹿角四十二館」と総称されるほど中世城館が多い。範囲確認調査によると、太田谷地館跡は舌状台地の舌状部の付け根部分に空堀があること、この台地の沢を隔てた南隣にも平坦な舌状台地があることなどから、両台地は1つの遺跡で、中世の全二郭を有する館跡であるとされていた。だが、昭和62年の第1次調査の結果、舌状台地部分には、堅穴住居跡51軒、土坑73基など遺構が激しく重複して検出され、それらは平安時代末葉に属するものであった。

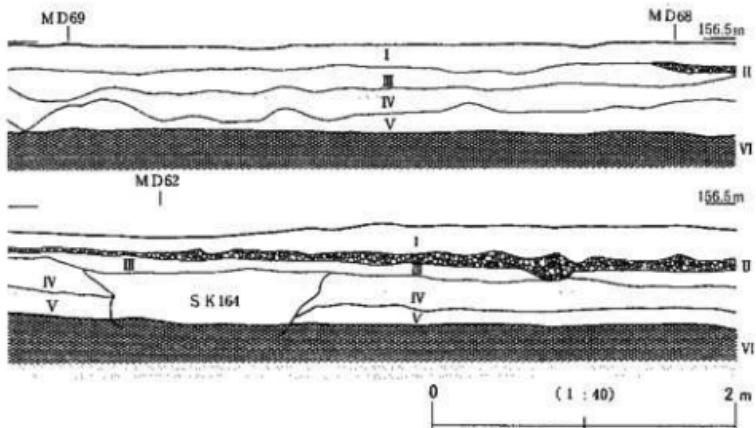
## 第2節 調査の方法

第1次調査のグリッド設定は、調査区中央に打設されている工事用中心杭No81からNo80を見通し、これを基線とした。この基線は、実際には東南東ー西北西を指しているのであるが、仮に南北基線とし、中心杭No80を基準点MA50とした。第2次調査は第1次調査の基線を踏襲し、中心杭No80からMA51・49のグリッド杭を見通し、基線とした。したがってNo75をMA60として、それを中心に東にLT・LS・LR……、西にMB・MC・MD……、南に59・58・57……、北に61・62・63……を振り当て、各グリッドの呼称は、4m×4mの方眼の南東隅の交点座標をそのグリッドの呼称とし、それはアルファベットとアラビア数字の組み合わせによる。基線と真北のずれは基線から63度48分北偏している。遺構番号は、第1次に調査したSD102はそのままとし、その他は150から遺構の性格に関係なく通し番号を付した。遺構の確認は第II層の大湯浮石層と第III層、第VI層地山の上面で行った。

## 第3節 調査の経過

調査は8月29日から開始し、午前中は作業員説明会、午後からは調査地やプレハブ用地・駐車場の草刈りを行った。9月5日にはグリッド杭打設、および今回の調査区にあった第1次調査の排土移動を終了した。9月2日粗掘を南東のSD102空堀から本格的に開始し、9月6日には空堀のLRライン、MAラインの土層断面の観察から2時期あると推定した。9月8日、SD102上部埋土(黒褐色土+地山ブロック)は昭和20年頃、農地造成の折に北西の高い方から重機で上を動かし埋めたものである事が判明。9月12日にはSD102空堀の底面を確認し、

I時期であることが確定した。空堀の規模は、LRラインの上面幅で8.22m、深さ6.34mで、東の沢に向かって緩い弧を描き、自然地形をうまく利用している。この間、農道の西側つまり、調査区中央部の粗掘も併行して第II層、第III層上面でそれぞれ遺構確認をしながら掘下げを進める。大湯浮石上面で小さい柱穴様のプランを検出するも断面形が浅い皿・鍋底状となっていて、柱穴かどうか判然としないものが多い。9月26日、SD102と農道の間と農道の南西脇で、大湯浮石層を掘り込んだ方形プランの竪穴住居跡(SI150、151)を検出した。9月28日、MAラインから北西部の粗掘がだいぶ進行し、土坑や柱穴様ピットが検出されたが、分布密度はさほど高くないようだ。9月30日、MAラインから北東部の粗掘を開始する。10月3日頃までこの地区的粗掘を集中的に行い、土坑や柱穴様ピット・焼土遺構はあるが、数は少なく、竪穴住居跡はないことがわかった。全体的な遺構の分布は、農道の両脇周辺に集中する傾向の強い事がはっきりしてきた。10月11日、調査区北東端寄りでは縄文・弥生土器が出土するものの遺構は検出できない。農繁期のためこの頃から作業員の出勤率が半分以下となり、作業の進行が遅くなりだしてきた。10月19日、SI150竪穴住居跡の東側で検出された竪穴住居跡(SI157、158)の検出状況写真撮影後精査に入り、10月25日、いずれも焼失家屋で、炭化材上に黄褐色土が流れ込んで堆積している事が判明し、火山灰ではないかと推察された。これら住居跡の精査と併せて、中央部の土坑・焼土遺構などの平・断面図作成・写真撮影も行った。10月下旬になって霜・降雪に悩まされ、調査の作業能率が落ちてきた。11月9日、天気の合間を見計らって、SI157・158と調査区全体の写真撮影を行った。11月12日、図面のチェック・補足後、資材を撤収して調査を終了した。



第5図 遺跡基本土層図

## 第4章 調査の記録

### 第1節 遺構と遺物

発掘調査の結果、縄文時代の土坑6基、弥生時代の土坑2基、焼土遺構1基、平安時代の竪穴住居跡5軒、土坑8基、焼土遺構1基、空堀跡1条など計29遺構を検出した。その分布をみると、空堀跡（SD102）から調査区中央部までは比較的密であるが、北西側では数が極端に減少する。その他に、遺構周辺に柱穴様ピットがやや広めに分布するが、これらは規模・断面形に規則性がなく、時代を特定できないものが多い。SD102は第1次調査で検出し、一部調査されていたもので、平安時代末葉とされる3条ある空堀のうち舌状台地部の一一番外側に位置しており、今回調査した竪穴住居跡などよりは時期が新しい。竪穴住居跡は5軒のうち4軒が、第II層の大湯浮石降下以後に構築されている。

#### 1. 縄文時代

##### (1) 土坑（第22図）

SK164

S I 150竪穴住居跡の北、MD61グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形はやや上に開く円筒形で、底面中央に円形のピットが1箇所にある。規模は坑口部1.62m、坑底部0.65m、深さ2.18mで、底面のピットは上端0.24m、下端0.15m、深さ0.30mで、土層断面の観察によれば幅0.12mの棒状の痕跡が認められる。埋土は第5層に地山ブロックが多量に混入している。出土遺物はない。

SK168

S I 158竪穴住居跡の西、LQ64グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形はやや上に開く円筒形で、基本層位の第III層から掘り込まれている。底面中央に円形のピットが1箇所にある。規模は坑口部1.27m、坑底部1.08m、深さ1.30mで、底面のピットは上端0.27m、下端0.14m、深さ0.56mである。出土遺物はない。

SK169

S I 151竪穴住居跡の南西、MF61グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形はやや上に開く円筒形で、底面中央に円形のピットが1箇所にある。規模は坑口部1.45m、坑底部1.37m、深さ1.41mである。底面のピットは上端0.30m、下端0.20m、深さ0.38mである。埋土は

全体的にレンズ状の堆積を示す。出土遺物はない。

S K163

S I 151堅穴住居跡の北、MC 61グリッドに位置する。平面形は梢円形で、断面形は鍋底状である。規模は坑口部1.18m、坑底部1.06m、深さ0.25mである。出土遺物はない。第V層の地山漸移層から掘り込まれており、埋土は大湯浮石粒子を含まず、黒・暗褐色土で地山細粒を含むことから、縄文時代に属するものと判断した。

S K165

MD 68グリッドに位置し、平面形は円形で、断面形は浅皿形である。規模は坑口部1.78m、深さ0.10mで底面はややデコボコしている。出土遺物はない。埋土は黒褐色～褐色で大湯浮石粒子を含まず、S K169と似た様相を呈することから縄文時代に属するものと判断した。

S K177

北西端のL S 75グリッドに位置し、平面形は円形で、断面形は上がやや開く円筒形である。規模は坑口部で1.36m、坑底部で0.98m、深さ1.13mである。埋土は12層に分層したが、4～9層に地山粒子・ブロック混入し、11層は地山主体で厚さ0.13～0.22mである。形態・規模・埋土の状況から縄文時代に属するものと判断した。

## 2. 弥生時代

### (1) 土坑（第23・26図）

S K172

L R 67グリッドに位置し、第III層を掘り下げて検出した。断面形は上がやや開く円筒形である。規模は坑口部で0.68m、坑底部で0.48m、深さ0.69mである。遺物は、弥生土器（第34図1～3）が埋土より出土した。外面に細かい撻糸文を施すもので、弥生時代末葉の小坂X式に比定される。

S K173

L R 67グリッドに位置し、平面形は不整梢円形で、断面形は鍋底形である。規模は坑口部で1.35m、坑底部で1.11m、深さ0.55mである。埋土は1層が大湯浮石主体で4層にも多く混入する。これは埋まりかけていて、中ほどがくぼんでいる時にレンズ状に堆積したもので、他の土層は褐色～黒褐色を呈する。遺物は弥生土器、フレイク、土師器杯・甕の破片が混じって出土しているが、確認面や埋土の状況から、弥生時代の土坑と考えられる。第26図4～10は弥生土器で4・5・7は外面に朱を塗った菱形土器かと思われるもので、4と6は口唇部に細い撻糸文を施してあり、小坂X式に比定される。11はロクロ使用の土師器杯である。

### (2) 焼土遺構（第24・26図）

S N 161

L Q66グリッドの第Ⅲ層中で検出した。平面形は椭円形で $0.95 \times 0.62\text{m}$ 、厚さは $0.04\text{m}$ で、特に下に掘り込みはない。確認面で弥生土器片が出土している。第26図12・13は胴部に細い撚糸文を縦に施文しているもので、小坂X式に比定される。

### (3) 柱穴様ビット（第25・26図）

ビット 1

L Q67グリッドで検出した。平面形は円形で、径 $0.38\text{m}$ 、深さ $0.46\text{m}$ で、埋土は黒色土と浮石粒子が混じる。小坂X式に比定される土器片（第26図14）が出土している。

## 3. 平安時代

### (1) 壁穴住居跡

#### S I 150 壁穴住居跡（第6～8・27～29図、第4表、図版4・5・10・13・14）

L R61・62、L Q61～63の各グリッドにまたがり、主軸方位がS- $20^{\circ}$ -E、壁長が東壁 $3.9\text{m}$ 、西壁 $3.95\text{m}$ 、南壁 $4.83\text{m}$ 、北壁 $4.8\text{m}$ の方形プランを呈し、南壁の南西隅部寄りにカマドを付設した壁穴住居跡である。本住居跡の周辺グリッドは第Ⅱ層（大湯浮石一以下、浮石と呼ぶ）の堆積がほとんどなく、表土I層下はⅢ層の層序になるが、L S・L R62グリッドの一部にⅡ層がわずかに残り、本住居跡の南西隅部は、その一部を掘り込んだ状況で検出された。壁高は、東壁 $46\text{cm}$ 、西壁 $58\text{cm}$ 、南壁 $42\text{cm}$ 、北壁 $56\text{cm}$ で、 $5^{\circ}$ ～ $21^{\circ}$ の傾斜で立ち上がる。柱穴は、北西隅部を除く各隅部、南壁下に3本、北壁から $1.2$ ～ $1.3\text{m}$ 内側に2本の計8本設けられ、その埋土は地山粒と浮石粒が混入した黒褐色土である。P 2・3はカマドの位置から上部構造に伴う柱穴の可能性がある。床面はカマドが付設された南西部分を除いて貼床が施され、一段高い状況を呈する。したがって低い部分に相当する南西部は平坦でよく踏み固められ堅緻であるのに対し、貼床はやや軟弱で北東隅部が特に著しい。床面積は $19\text{m}^2$ を測る。埋土は15層に分層された。1～3・9・10・13～15層は浮石粒・地山粒を混入する黒褐色土を主体とし、1・2層は浮石粒がシモフリ状に多量に混入する。4層は地山浮石ブロックを主体、5～8・11・12層は浮石・浮石ブロックを主体とする。したがって4～8・11・12層は人為的堆積を呈することから、北東～南東方向からの投棄が想定できる。カマドは南壁の南西隅部寄りに付設されており、両袖部分を円形～椭円形に掘り込んだ後、手前の床面を幅 $70\text{cm}$ 、長さ $100\text{cm}$ の不整椭円形に $3$ ～ $7\text{cm}$ 掘り下げている。両袖部は灰白色粘質土・地山土・黒褐色土を積んで構築している。支脚は地山土を積んだ上部に土器杯を逆位に据えている。煙道部はやや起伏を呈しながら緩く立ち上がり、煙山部で一旦くぼんでからやや垂直に立ち上がる。埋土は31層に分層され、9～11層が袖部構築土、2・3・6・8・9・18～20・22～28層は天井部の崩落土である。また、芯

材として20~40cmの扁平な石、多量の土器破片が使用されている。

遺物はカマド及びカマドに隣接する北東部分に集中して出土した。鉄滓1点、須恵器破片2点、弥生土器破片2点で、その他はすべて土師器破片である。小破片を含めた土師器破片の総点数は100点をややこえるが、接合後図示できた破片・復原土器数は35点である。杯・椀が10点で、他の25点は土師器壺である。またロクロ成形の土師器は9点（杯4点・椀1点・壺4点）で他は非ロクロ成形である。住居跡から出土する土器については出土地点・層位・接合関係から転用・遺棄・廃棄・流入のケースが想定される。以下では本住居跡出土の土器破片について可能なかぎり想定を行う。なお、土器の説明は最初が挿図中の番号で、括弧内が現場で取り上げた時の番号で、接合できたものである。

①カマド構築時に芯材・支脚に転用された土器は出土状況から16(74)・21(86)・23(35)・25(78)・27(66)・28(56)・36(42)・37(52・77)・42(31・33・44・58・69・76・80~82)・43(83)・45(22・34・53・87)・46(77)・47(15・16・46・70・71・72・79・85)・48(28・41・43・49・63・67)・49(59・61)の15点である。これらの土器はカマドの支脚・両袖部を構築する9~11層・天井部崩落土の2・3・6・9・18~20・22~28層から出土している。②床面から埋土中にかけて出土する流入の土器は24(4)・26(24)・30(36)・32(47)・33(18)・34(45)・35(5)・38(13)・39(48)・40(38)・44(64)・50(8)である。また転用と想定する①の土器の中で37(52)・42(31)・45(22・87)・47(46・79)・48(41)の一部（括弧内）の破片は流入と想定される。これらの土器はカマド天井部崩落後の1・13~15・21層上面、埋土の自然堆積を呈する1~3・9層から出土している。③床面から埋土にかけて出土する廃棄された土器は②の場合との識別が困難な場合が多い。しかし本住居跡の場合、埋土の一部が人為的堆積を呈することから、少なくともその層に含まれた土器破片は廃棄と想定できる。19(29・30)、①の土器の中では47(15・16)・48(28・41)の一部の破片で埋土中の4・12・14層から出土している。④遺棄は住居廃絶時に残された場合であるが、22(6・25)は埋土の3・9層下部から出土していることからこのケースに想定される。

#### S I 151 穫穴住居跡（第9・10・30図、第5表、図版6）

MD60・61、ME60・61グリッドに位置し、第II層（大湯浮石）上面で検出した。主軸方位がS-5°-W、壁長が東壁4.65m、西壁4.95m、南壁4.95m、北壁4.75mの方形プランを呈し、南壁の南西隅部寄りにカマドを付設した竪穴住居跡である。壁高は東壁70cm、西壁62cm、南壁64cm、北壁67cmで1°~2°の傾斜で立ち上がる。壁直下には、幅7~35cm、深さ3~16cmの壁溝が巡り、底面に径10~20cm、深さ3~10cmのピットが検出された。カマド付設部分では、付設以前に壁溝の埋め戻しが行われている。埋土は20層に分層されたが、大湯浮石粒・地山粒を混入する黒褐色土を主体とした自然堆積を呈する。床面積は20m<sup>2</sup>を測り、よく踏み固められているが、南東隅部、南西隅部の貼床が施された部分はやや軟弱である。柱穴は南側壁溝内に2



第27号10 (1/5)

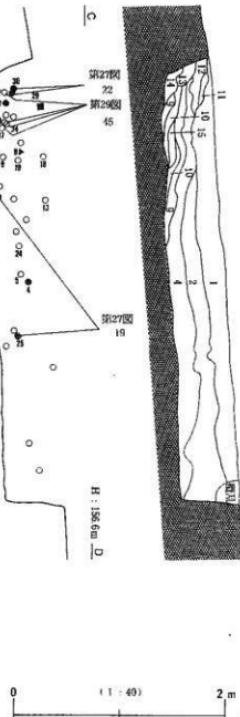


第27号22 (1/5)



第27号46 (1/8)

- 1 黒褐色土 (10YR 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。部分的に鐵分を多く含む所もあり。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 2 黑褐色土 (10YR 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 3 黑褐色土 (10YR 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 4 黑色土 (10Y R 1/1) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 5 黑色土 (10YR 3/1) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 6 黑褐色土 (10YR 2/3) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 7 黑褐色土 (10Y R 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 8 黑褐色土 (10Y R 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 9 黑色土 (10Y R 2/1) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 10 黑褐色土 (10YR 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 11 にいわゆる土 (CST R 6/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 12 黑褐色土 (10Y R 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 13 黑褐色土 (10YR 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 14 黑褐色土 (10Y R 2/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。
- 15 黑褐色土 (10YR 3/2) 鮮明な鉄色斑点あり。しらべる。1m以上で約10%の鉄分を含む。

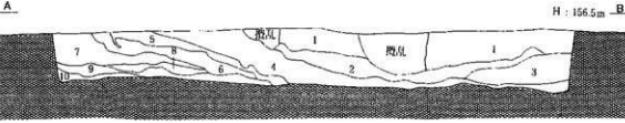


C

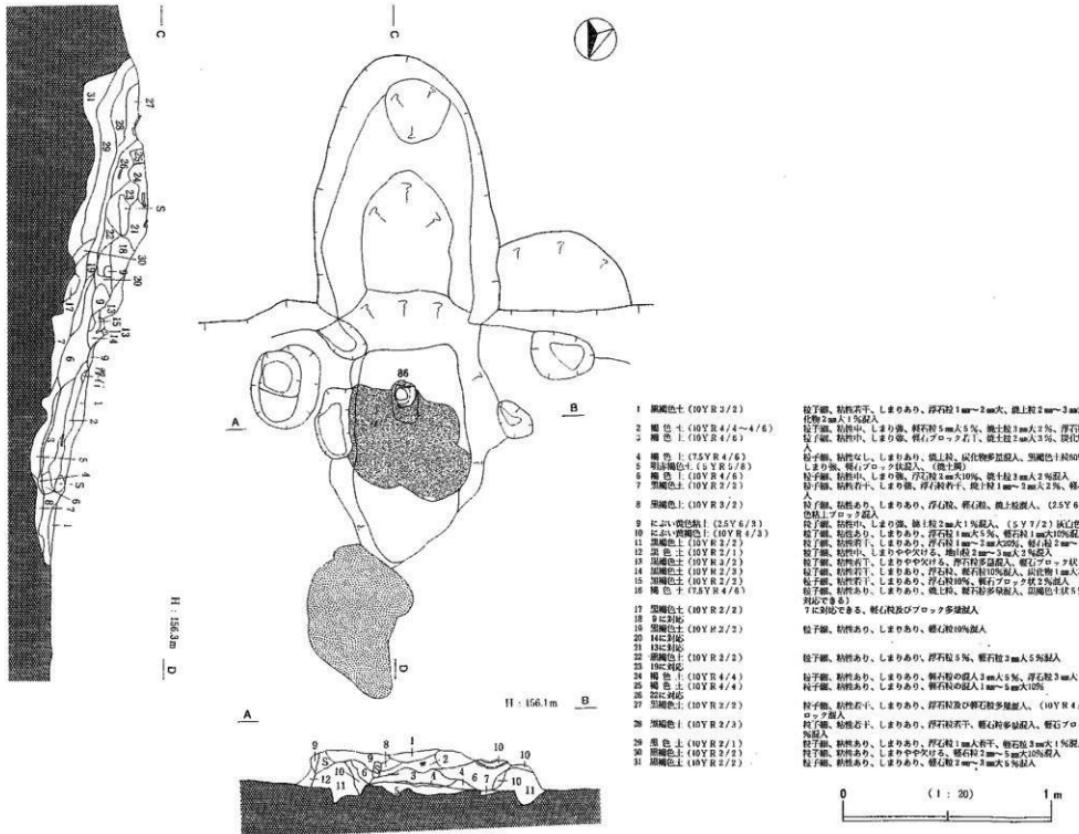
A

A

B

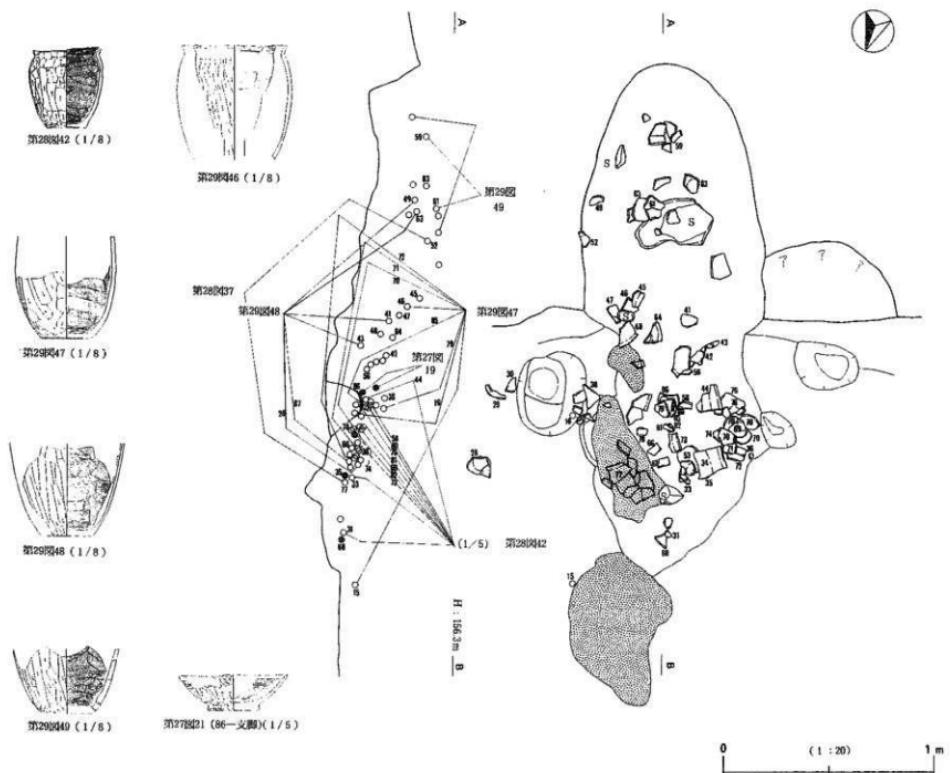


第6図 S I 150堅穴住居跡



第7図 S I 150堅穴住居跡 カマド

第1節 遺構と遺物



第8図 SI 150整穴住居跡カマド 遺物出土状況

本、北壁から0.1mほど内側に2本設けられ、径13~23cmを測り、埋土は浮石粒・地山粒を少量混入する。カマドは南西隅部の貼床上に付設されているが、かなり崩壊していたため下部構造をわずかにうかがえる程度であった。貼床を含めた埋土の状況から主軸方向を同一にする2時期のカマドが想定できる。第1期は貼床面から深さ15~20cm、幅28~42cmで南壁に向かってかなり起伏をもちらがら掘り込まれているが、南壁に進むにつれて掘り込み面が不明瞭になり、煙道部は看取できなかった。埋土から、河原石、繩羽口が1点出土したことから、芯材として石を使用し、支脚として繩羽口が転用されたと想定できる。第2期は、第1期を一度埋め戻してから約15cm南壁寄りに構築されている。焚口部は径40~60cm、深さ5~10cmの横円形で、南壁に向かう煙道部はかなり起伏をもちらがら緩く立ち上がる。袖部・支脚は不明であるが、周囲に河原石、灰白色粘質土が散在していたことから、芯材・構築材としてこれらが使用されたと想定できる。両時期とも、埋土の状況、特に焼土面を重視して位置決定を行ったが、第2期の北東部に、やはり貼床上で同レベルの焼土面が存在する。掘り込みは看取できなかったが、第2期のカマドに伴うものかは不明である。

遺物は、番号を付して取り上げた土器破片25点、繩羽口1点、鉄滓1点、その他に埋土一括が数点である。番号を付した土器破片はカマドの埋土・周囲の床面に集中して出土した土師器甕の破片のみである。出土状況及び接合関係から遺棄された2個体の土師器甕が識別でき、他は流入した可能性が強い。57(2・5~8・10・11・19・20・23・25)は、口縁部が「く」の字に外反する小形の甕で、58~60(3・4・9・15~18)は、同一個体で口縁部がやや外傾し、体部の膨らみが少なく、底部がわずかに丸底風を呈する。いずれも粗いケズリ・ナデの調整が施されている。61(24)は第1期のカマド底面から出土し、溶融物の付着した繩羽口の破片である。外面は丁寧なケズリ調整が施され、内面は成形の工程をうかがわせる痕跡があるが、過熱のためか遺存状態がきわめて悪い。

#### S I 152 積穴住居跡（第11・31図、第6表、図版6）

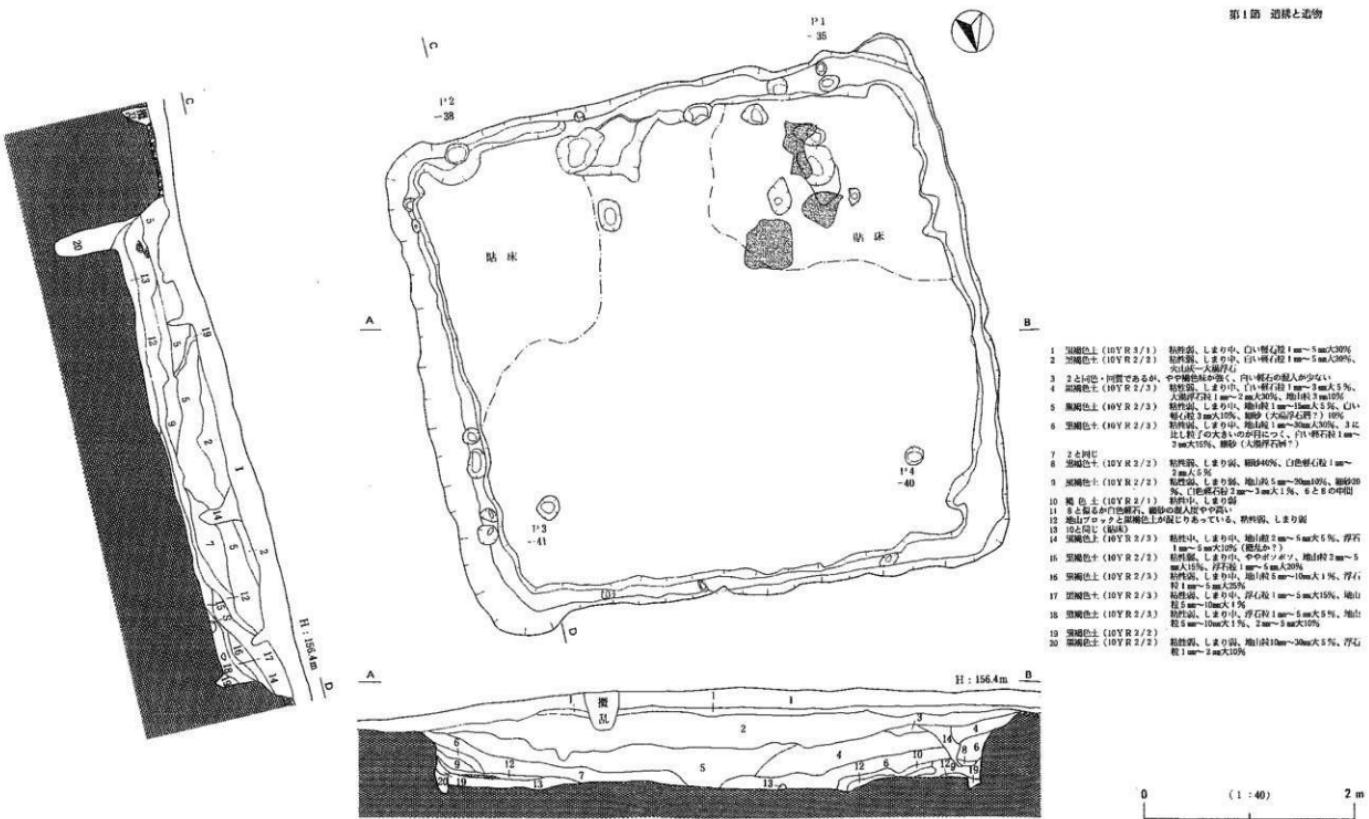
MB62・63グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で検出した。主軸方位がS-80°-E、壁長が東壁3.35m、西壁3.85m、南壁3.95m、北壁3.3mの隅丸方形プランを呈する積穴住居跡である。壁高は東壁42cm、西壁45cm、南壁42cm、北壁は4層上面まで掘り下げてしまったため残存壁高27cmで、10°~39°の傾斜で立ち上がる。全体がやや外側に張り出しが、東壁が特に顯著で傾斜も緩い。柱穴は東壁際に2本、西壁から1.2~1.4m内側に2本設けられ、径20~30cmを測り、埋土は地山粒を多量に混入する黒褐色土である。配置としては、住居跡の主軸方向とややズレがある。埋土は10層に分層され、6・7・8・10層は貼床に相当する。1~6層は大湯浮石粒・地山粒を混入する黒褐色土・暗褐色土で2・5層には大湯浮石粒がシモフリ状に多量に混入する。床面積は14m<sup>2</sup>で、北東隅部を除く全面に貼床が施されている。北東隅部はよく踏み固めら

れているが、貼床の部分はやや軟弱で、特に南西部はかなり軟弱である。カマドは東壁の北東隅部寄りに付設され、大部分は貼床上に位置する。構造は不明な点が多いが、床面の焼土範囲が焚口部に相当し、両側のピット状の落ち込みが袖部の掘り方と想定できる。埋土は3層に分層され、灰白色粘質土・地山土が主体であることから、これらはカマド構築材に、また周辺に散在する石は芯材とし使用されたと考えられる。支脚・煙道部は不明であるが、支脚の位置と思われる部分で、著しい過熱のため赤変した粘土塊が5点出土したことから、支脚の芯材あるいは天井部の崩落土と考えられる。並置する形で南東隅部で焼土を検出した。北東隅部のカマド焚口部と同様に床面（貼床）を掘り込んだ形跡はなく、主軸方向も一致する。本遺構における初期のカマドを想起させるものである。

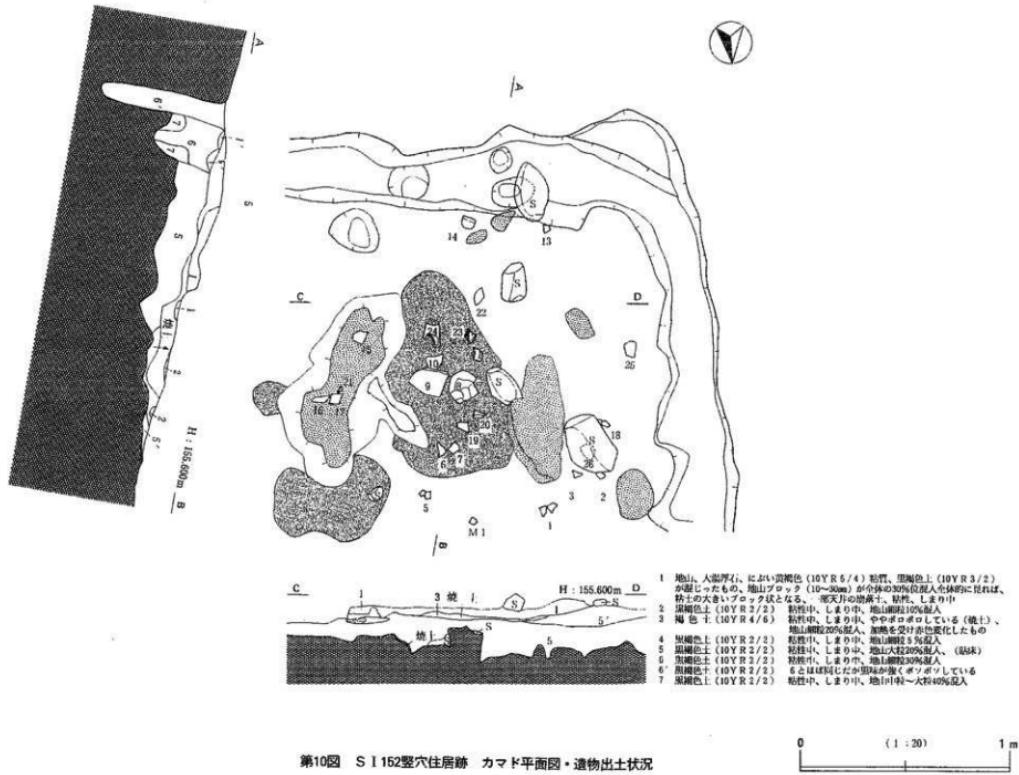
遺物は、カマド付近で出土した土器破片に番号を付して取り上げ、他は小破片のため埋土一括で取り上げた。番号を付した土器破片は10点である。69（1・2）が須恵器甕の破片である以外は、全て土師器甕の体部破片である。接合資料は69以外1点もなく、また、出土状況から埋土一括として取り上げた遺物（縄文土器・土師器）も含めて流入・混入と考えられる。

#### S I 157 穫穴住居跡（第12～16・32図、第7表、図版7・8・10・15）

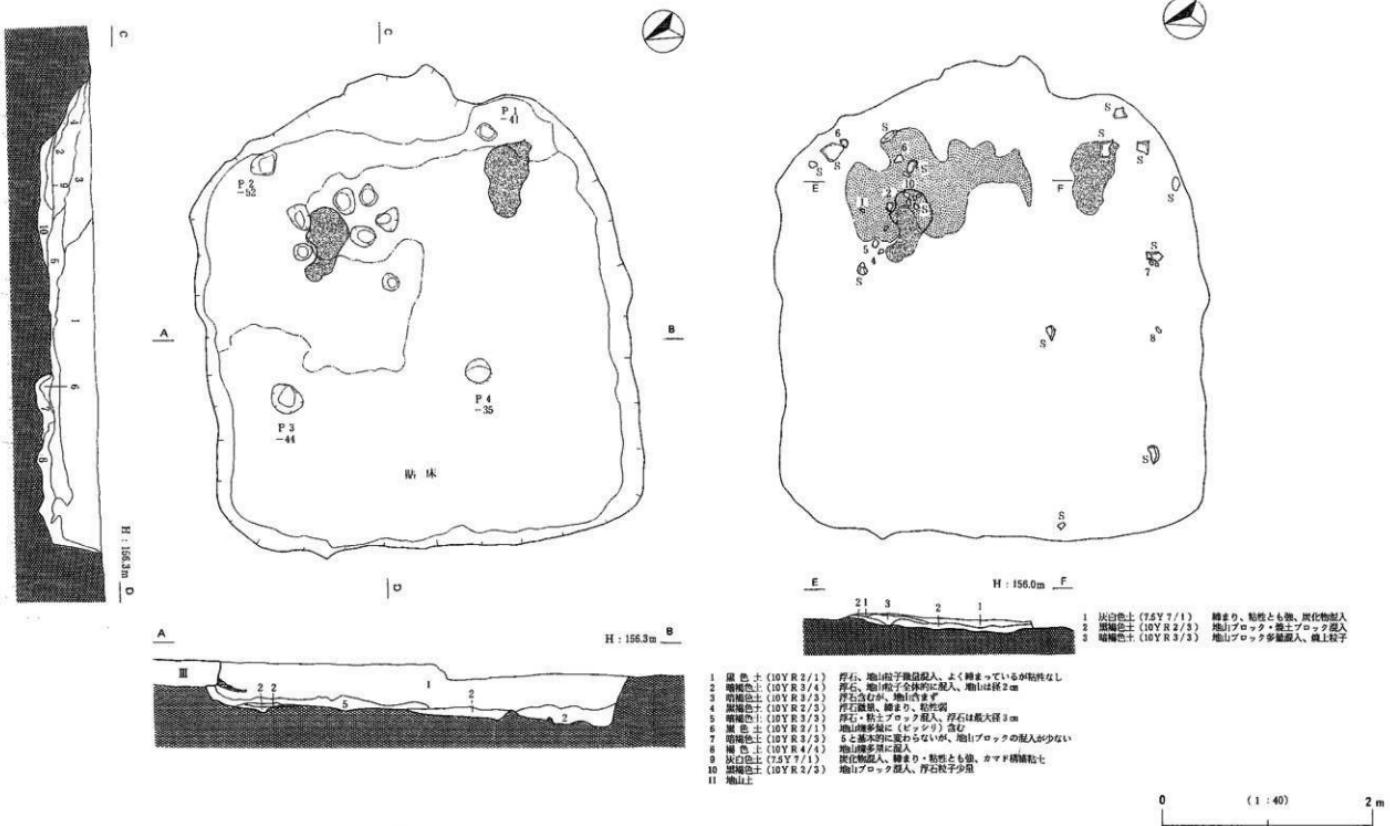
L Q60・61グリッドに位置し、北・東壁の一部が調査区外になるためその全容を明らかにはできなかったが、南壁の南西隅部寄りにカマドを付設した竪穴住居跡である。南東隅部はSK159と重複しているが、検出時にSK159が新しいことを確認している。西壁から71～91cm離れたところにSI150が位置し、SI150の東壁と本住居跡の西壁はほぼ平行関係にある。また、東部にはSD102空堀跡が位置し、それに伴う整地事業の始まりのところに一部あたるためか、かなり削平されていた。したがって確認面はカマドから西側は第Ⅲ層上面、東側は地山面である。主軸方位がS-15°-E、壁長が西壁3.4m、南壁3.7m、東・北壁は不明であるが、ほぼ方形プランを呈すると考えられる。壁高は東壁21cm、南壁35cm、北壁36cmで5°～7°の傾斜で立ち上がる。壁直下には幅6～15cm、深さ5～10cmの壁溝がカマド付設部分を除いて巡り、底面には円形・楕円形の小ピットを伴う。埋土には炭化物、焼土粒が混入する。床面は緩い起伏を呈し、やや軟弱で、西壁から50～90cm内側の部分に貼床が施されている。全面に炭化物・焼土粒が多く混入し、北東部では焼土が散在している。床面積は10m<sup>2</sup>であるが、調査区外の部分を含めた推定では14m<sup>2</sup>と思われる。柱穴は各隅部・西壁からやや内側に計5本設けられ、埋土には炭化物・焼土粒・地山粒が混入する。柱穴の配置から東壁寄りにも対応する2本の柱穴を想定できる。埋土は14層に分層され、炭化物・焼土粒・大湯浮石粒・地山粒を混入する。10層は床直上の堆積土であるが、赤変した地山ブロック、多量の焼土粒が主体であるため床面の可能性をうかがわせる。10層の上面には部分的に炭化物を看取できた。5層は所謂火山灰である。基本層位の第Ⅱ層（大湯浮石）とはまったく異質のものである。本住居跡の中央部・壁際を除



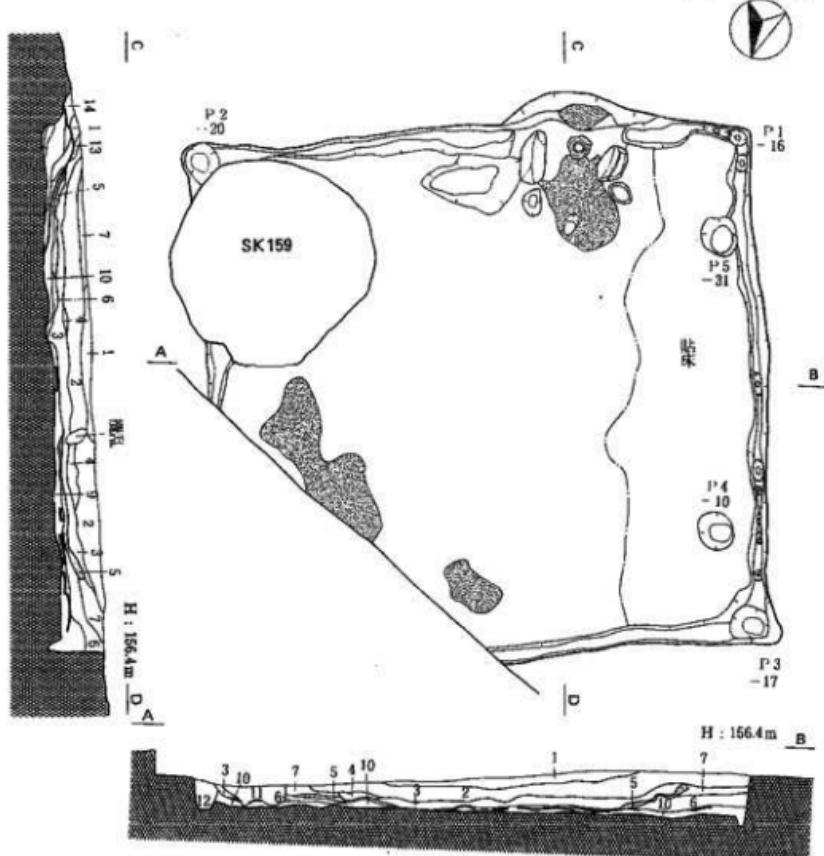
第9図 SI 151号穴住居跡



第10図 SII 152堅穴住居跡 カマド平面図・遺物出土状況



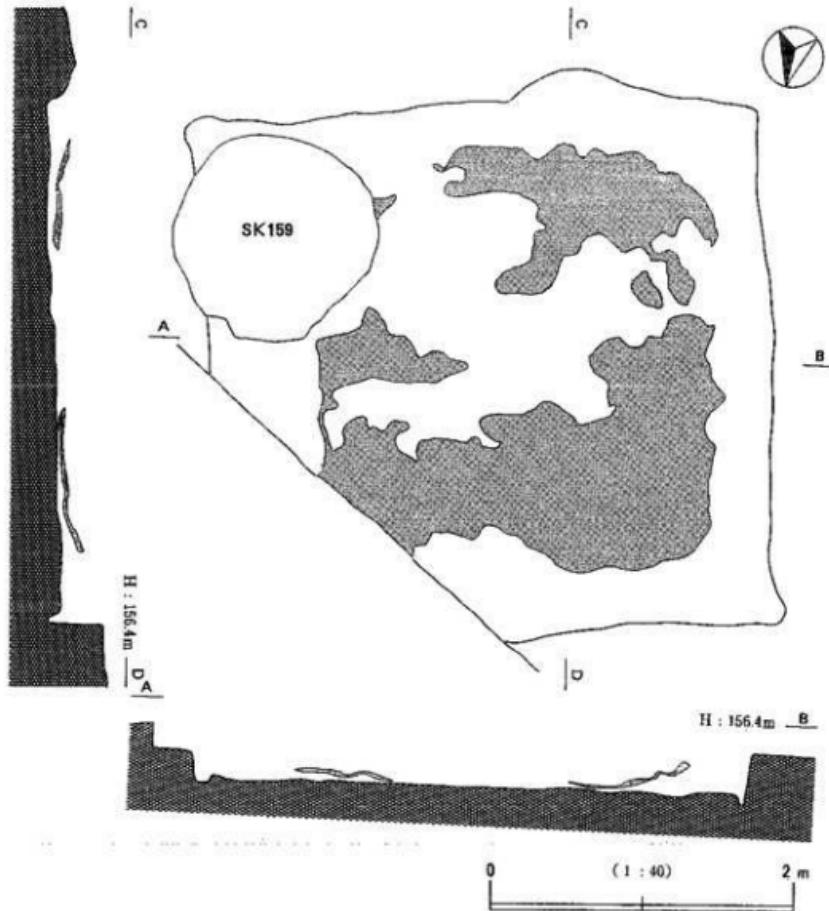
第11図 S.I.152壁穴住居跡 平面図・遺物出土状況



- 1 黒色土 (10YR 1.7/1) 漢化物シミ状多量、粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒1mm~2mm大2%
- 2 褐褐色土 (10YR 2/3) 粒子細、粘性若干、しまり強、浮石粒1mm~3mm大20%、地山粒1mm~5mm大15%、炭化物2mm大1%
- 3 褐色土 (10YR 1.7/1) 漢化物シミ状弱、しまりあり、地山粒1mm大5%、地土粒1mm~2mm大2%
- 4 褐色土 (10YR 2/1) 粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒1mm~5mm大5%、炭化物シミ状20%、地山粒1mm~3mm大10%
- 5 にごい黄一明褐色土 (2.5Y 6/4~6/6) 粒子細、粘性なし、しまりあり (白頭山火成岩)
- 6 褐褐色土 (10YR 2/2) 粒子細、粘性あり、しまりあり、浮石粒1mm~3mm大20%、炭化物1mm~2mm大2%、地土粒1mm大2%
- 7 褐褐色土 (10YR 2/3) 粒子細、粘性若干、しまりや欠ける、浮石粒1mm大30%、地山粒1mm~5mm大5%
- 8 褐褐色土 (10YR 2/2) 粒子細、粘性若干、しまり強、炭化物シミ状10%、浮石粒1mm~3mm大20%
- 9 黑色土 (10YR 2/1) 粒子細、粘性若干、しまりあり、漢化物シミ状3mm~5mm大1%、地土粒10mm大1%
- 10 褐色土 (10YR 4/4) 山崎砾石ブロック+褐色土層、多部混合ナ、地土ブロック25%、一部地山底層
- 11 黒色土 (10YR 2/1) 粒子細、粘性若干、しまりあり、浮石粒ブロック30%、浮石粒3mm~10mm大3%、地土粒1mm~5mm大1%
- 12 褐褐色土 (10YR 2/2) 粒子細、粘性若干、しまりなし、浮石粒1mm大3%、地土粒1mm~10mm大80%、炭化物3mm大2%
- 13 褐色土-にごい黄褐色土 (10YR 4/4~5/4) 粒子細、粘性中、しまりあり、浮石粒1mm大1%、地土ブロック一部あり
- 14 黄褐色土-明褐色土 (10YR 5/6~2.5Y 5/8) 粒子細、粘性中、しまりあり、12層の非変化したもの

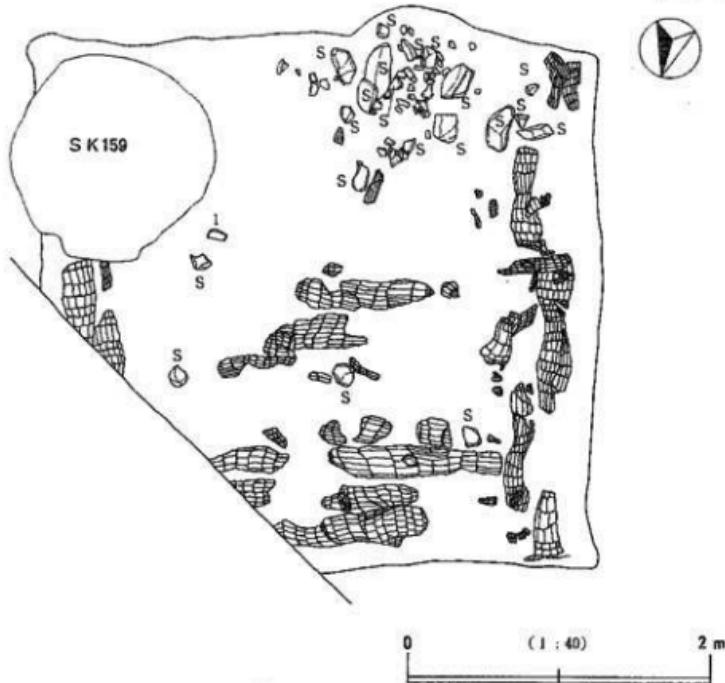
0 (1 : 40) 2 m

第12図 S-157竪穴住居跡



第13図 S I 157堅穴住居跡 火山灰検出状況

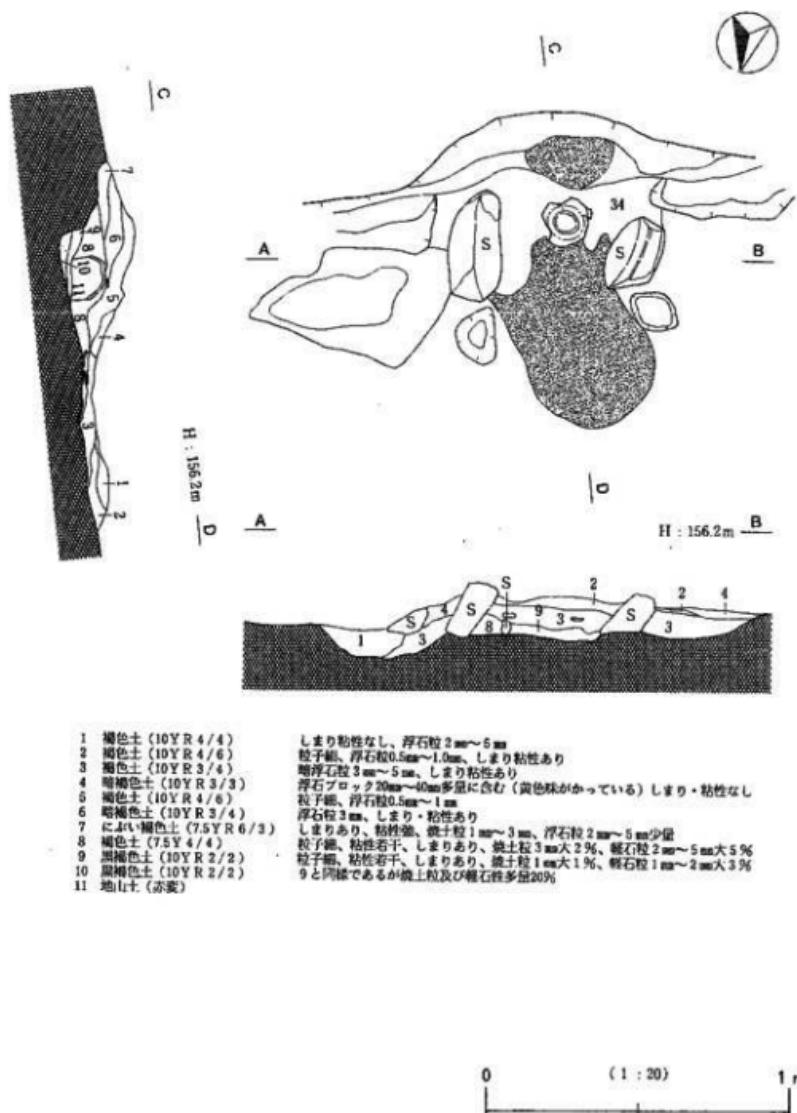
く部分に見られ、厚いところで6cmを測りレンズ状の堆積を呈する。本住居跡は焼失家屋で、火山灰直下の炭化物・焼土粒が住居跡を覆い、カマドから南東隅部を除いた部分に炭化した板材が遺存していた。幅13~24cm、長さ50~114cm、厚さ1~2cmを測り、南壁を除く各壁に沿う方向で壁際からやや内側に2~3枚並んでいる。東壁中央寄りにそれと直交する板材がある。板材の用途としては腰板・矢板・敷板が想定できるが、いずれも決めてを欠く。カマドは南壁・南西隅寄りに付設されている。カマドは、幅70cm、長さ40cmの不整形のくぼみを掘り、扁平な河原石を据えた後、外側を褐色土・暗褐色土で充填して両袖部を構築し、手前の床面を幅45cm、



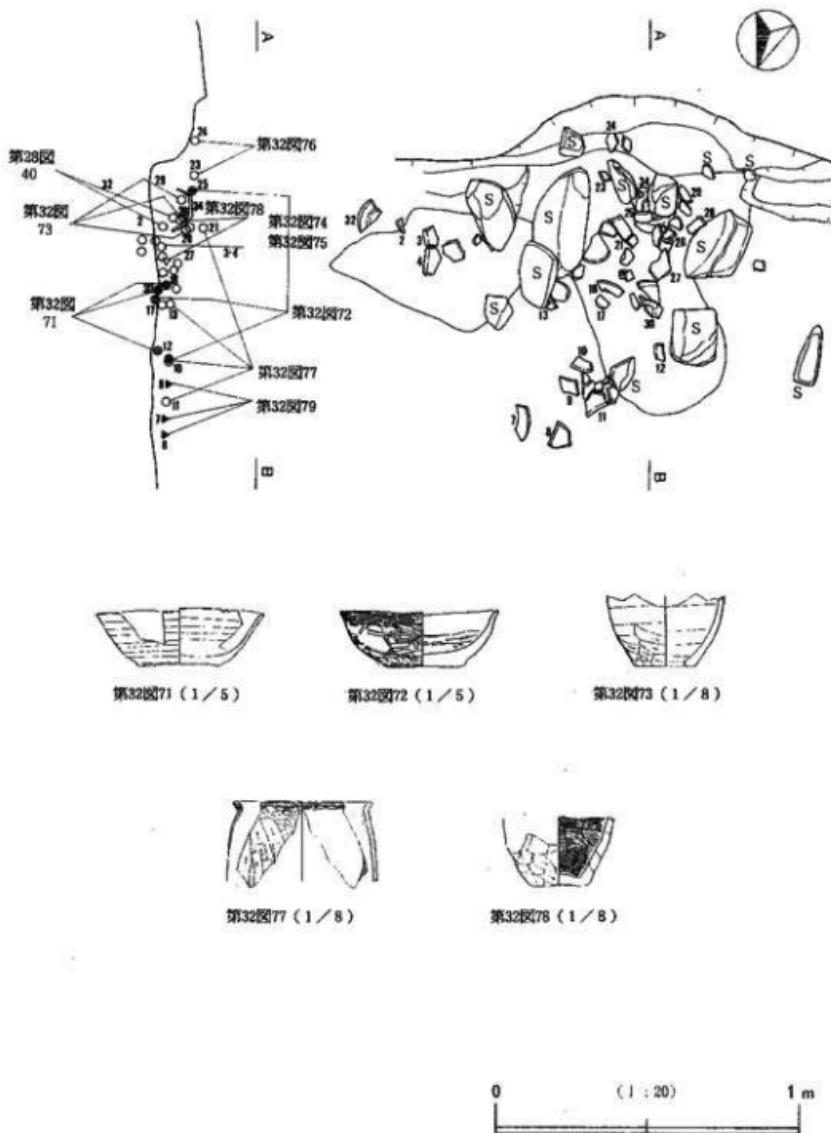
第14図 S I 157堅穴住居跡 遺物出土状況

長さ98cmの楕円形に2~10cm掘り下げて焚口部を構築する。焚口部から煙道部付近へは垂直に立ち上がって移行する。煙道部は削平を受けて不明である。支脚は地山土を積んだ上に土師器甕を逆位に据えている。埋土は11層に分層された。大湯浮石粒を混入する暗褐色土~褐色土が主体でカマド構築土である。カマド周囲に石が散在していることから、芯材として使用されたと想定できる。

遺物は、35点出土し、その大部分がカマドから集中して出土した土師器(32点)・須恵器(3点)の破片で、全て5層(火山灰)下からの出土である。土師器破片のうち大半が甕で、杯・壺は9点、ロクロ成形が11点、非ロクロが21点である。接合後、図示できた土器破片・復原土器は10点である。出土状況・接合関係からS I 150と同様の想定を行った場合、78(34)が転用、71(12+18+30)・72(10+17+25)・73(26+28+29)・74(26+27)・76(23+24)・77(10+11+13+21)が遺棄、40(2+32)・70・75(34)・79(7~9)は流入・廃棄と想定される。40は3点の破片から接合されており、残り1点はS I 150のR P 38である。どちらも流入の破片と想定したが垂直分布での違いから両遺構の有機的関係を想起させる資料である。



第15図 S I 157堅穴住居跡 カマド

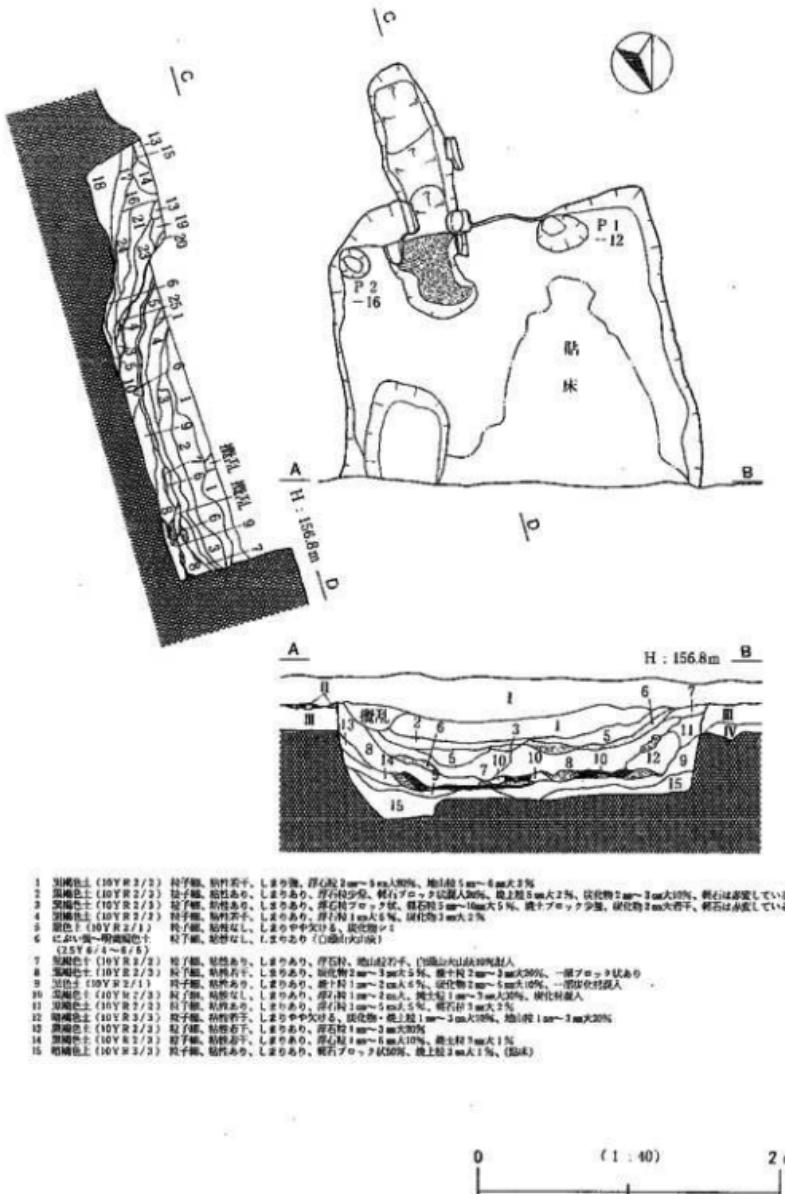


第16図 S I 157竪穴住居跡 カマド遺物出土状況

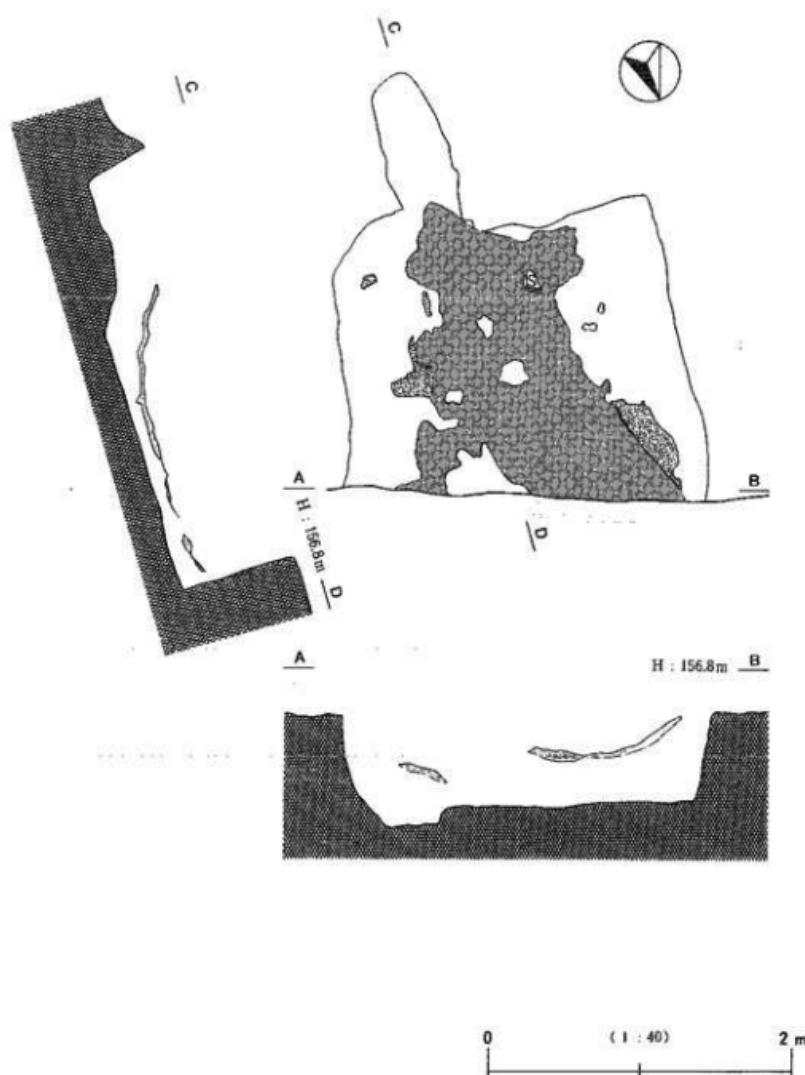
## S I 158竪穴住居跡（第17～20・33図、第8表、図版9・10・16）

L Q63・64グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で検出した。主軸方位がS-7°-W、南壁南東隅寄りにカマドが付設された竪穴住居跡であるが、北壁が調査区外にあたるため、全容は不明である。したがって壁長は南壁のみ計測可能で2.14mを測る。壁高は東壁37cm、西壁40cm、南壁42cmで2°～3°の傾斜で立ち上がる。柱穴は南東隅部・南壁下に2本設けられ、径20～25cmの略円形を呈し、埋土は焼土粒・炭化物を混入する。P1は本来隅部に配されるはずだったのが、南西隅部は縄文時代の土坑（SK168）と重複するため、柱穴の構造上、避けられた可能性がある。床面積は調査部分だけで4m<sup>2</sup>を測る。床面は緩い起伏を呈し、やや軟弱で、焼土粒・炭化物が混入し、北西部から北東部にかけて貼床が施されている。東壁下に長軸65cm以上、短軸55cmを測る土坑状の落ち込みを検出した。埋土は貼床と同様の單一層であるため、本住居跡より古い時期の遺構に貼床を施した可能性がある。埋土は15層に分層された。大湯浮石粒・焼土粒・炭化物を混入する黒褐色～暗褐色土が主体で自然堆積を呈する。床面よりやや浮いた部分に焼土及び炭化層が看取でき、直上の6層は火山灰である。カマドが付設された南側から北側にかけてレンズ状の堆積を呈し、厚いところで7cmを測る。調査区外との境界にあたる部分で埋土を観察した結果、第II層（大湯浮石）を掘り込んで本住居跡が構築され、実際の壁高は東壁60cm、西壁40cm以上となり、6層の火山灰は大湯浮石より新しい火山灰と識別できる。本住居跡もS I 157と同じ焼失屋敷で、炭化した板材が北側に遺存していた。幅10～18cm、長さ25～57cm、厚さ1～3cmを測り、東西方向に並んでいる。また、これに直交して上になる板材がほぼ中央部にみられる。炭化材の検出、埋土の状況からS I 157も本住居跡と同じ面で構築された可能性が高い。カマドは南壁、南東隅寄りに付設されている。幅40cm、長さ55cmの不整方形に床面を2～3cm掘り込んで焚口部を構築し、その後両袖部の芯材となる河原石を側壁上端に押しつけて、灰白色粘土質・地山土を積み上げている。焚口部から煙道部へは緩い傾斜で移行し、煙出部で垂直に立ち上がる。煙道部は幅42cm、長さ117cmを測る。支脚は検出されなかった。埋土は、26層に分層され、6・26層は焼土、2・7・8層は袖部構築材、1・3・4・9・10・13・19・21・25層は天井部崩落土に相当する。また芯材として河原石が使用されている。

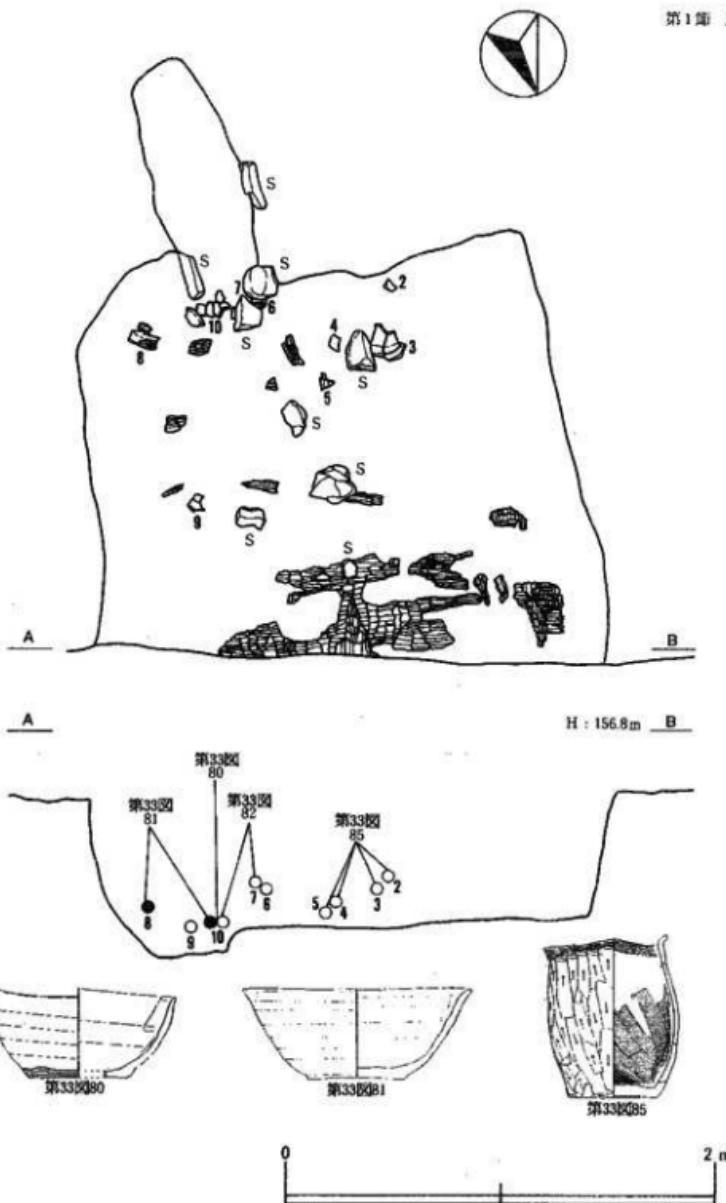
遺物は番号を付して取り上げた土器片が10点である。縄文土器片1点を除けば、全て土師器破片で6層（火山灰）下からの出土である。接合後図示できた遺物は7点で、ロクロ成形の土師器杯2点、土師器壺1点、非ロクロ成形の土師器壺3点、縄羽口破片1点である。出土状況、接合関係からS I 150と同様の想定を行った場合、81（8・10）、85（2～5）は遺棄、82（7・10）、83（6）、84（9）は流入が想定される。80（10）、86（カマド内一括）はカマド埋土の6層下部から出土している。カマドにおける位置関係からどちらかが支脚に転用された可能性が強い。86は、丁寧なヘラケズリ調整された縄羽口の破片である。



第17図 S I 158号穴住居跡

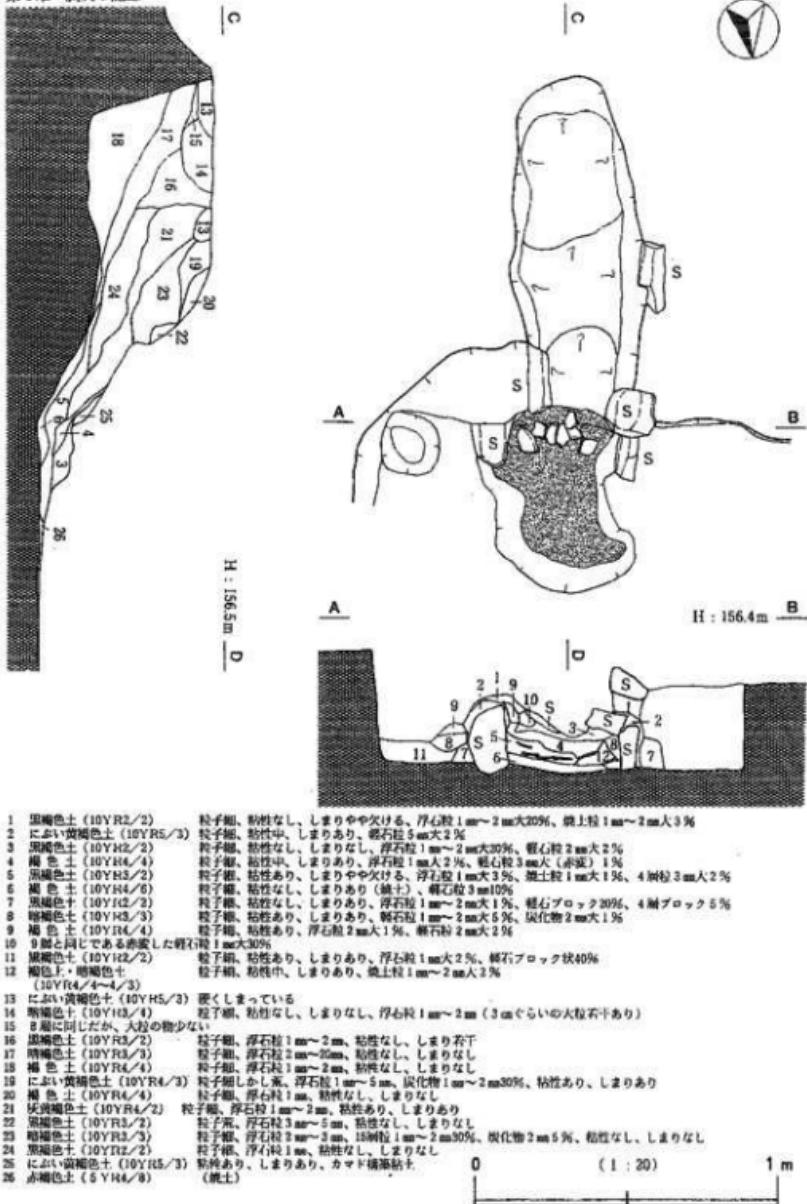


第18図 SI 158竪穴住居跡 火山灰検出状況



第19図 S I 156竪穴住居跡 遺物出土状況

第4章 調査の記述



第20図 S I 158 穴住居跡 カマド

## (2) 土坑(第24・35・42図、第10表、図版11)

## SK153

ME65グリッド周辺に位置し、平面形は隅丸な不整方形で、断面形は鍋底状を呈するが、かなりデコボコしている。規模は坑口部1.37×1.03m、坑底部0.68×0.56m、深さ1.18mである。本造構は第II層(大湯浮石)上面より掘り込まれており、埋土は5層に分層され、レンズ状の堆積を呈し、1・2層には西より流れこんだ浮石粒が混入している。出土遺物はないが、掘り込み面や埋土の状況から平安時代に属すると考えられる。

## SK155

S I 151の床面で検出したもので、SK156と重複しており、SK156より古い。カマドの位置からS I 151に伴うものではないと考えられる。平面形は円形、断面形は円筒形である。規模は坑口部1.20m、深さ0.62mである。埋土は6層に分層したが、全体的に褐色土を主体に地山ブロックが混入して、6層は地山主体土で、埋められた様相を呈する。1層は黒褐色土に地山ブロックを混入しているもので、S I 151構築時に貼られた可能性が強く、厚さ5~15cmを測る。遺物は小刀1点(第42図223)が出土している。224は茎の部分で223と同一個体と思われる。223は長さ15.2cm、最大幅2.4cm、厚さ0.25cmで、224は長さ4.7cm、最大幅1.0cm、厚さ0.4cmである。

## SK156

S I 151の床面で検出したもので、SK155と重複しており、SK155より新しい。カマドの位置からS I 151に伴うものではないと考えられる。平面形は円形、断面形は円筒形である。規模は径0.90m、深さ0.46mである。埋土上部より土師器壺(第35図98・99)が出土した。埋土は地山ブロックが多く混入しボソボソしており、埋められた様相を呈する。

## SK159

S I 157と重複しており、本造構が新しい。平面形は円形、断面形は円筒形で、その規模は径1.37m、深さ0.36mである。土師器壺の口縁部(第35図101)が出土している。

## SK166

S I 150の東に位置し、東半分が調査区外である。平面形は円形で、断面形は鍋底状である。規模は推定径1.23m、深さは0.36mである。埋土は9層に分層したが、2・3・5・7・8層に浮石が混入し、5層にその傾向が著しい。土師器杯(第35図100)が出土している。

## SK167

S I 150の南に位置し、平面形は円形、断面形は浅皿形である。規模は径1.00m、深さ0.28mで、埋土は2層に分層したが、1層に大湯浮石がびっしり堆積している。

## SK174

調査区中央部のLS68グリッドに位置し、平面形は不整椭円形、断面形は鍋底状を呈し、底面はデコボコしている。規模は坑口部1.25m、深さ0.45mである。埋土は6層に分層したが、第1～4層まで径3～4mmの円もしくは角礫が数多く検出された。遺物は鉄製品が2点（第42図216、219）、鉄滓がわずかに出土した。

## SK175

北東端のLM68グリッドの第II層（大湯浮石）上面で検出した。平面形は円形で、断面形は浅皿形である。規模は径1.14m、深さ0.15mで、底面はややデコボコしている。埋土は4層に分層したが、いずれも大湯浮石が混入し、第1層は40%ほどの割合である。第3層には炭化物が堆積している。遺物は確認面で内面黒色処理した土師器杯（第35図102）と他に埋土より土師器杯が出土した。

## (3) 焼土造構（第24図）

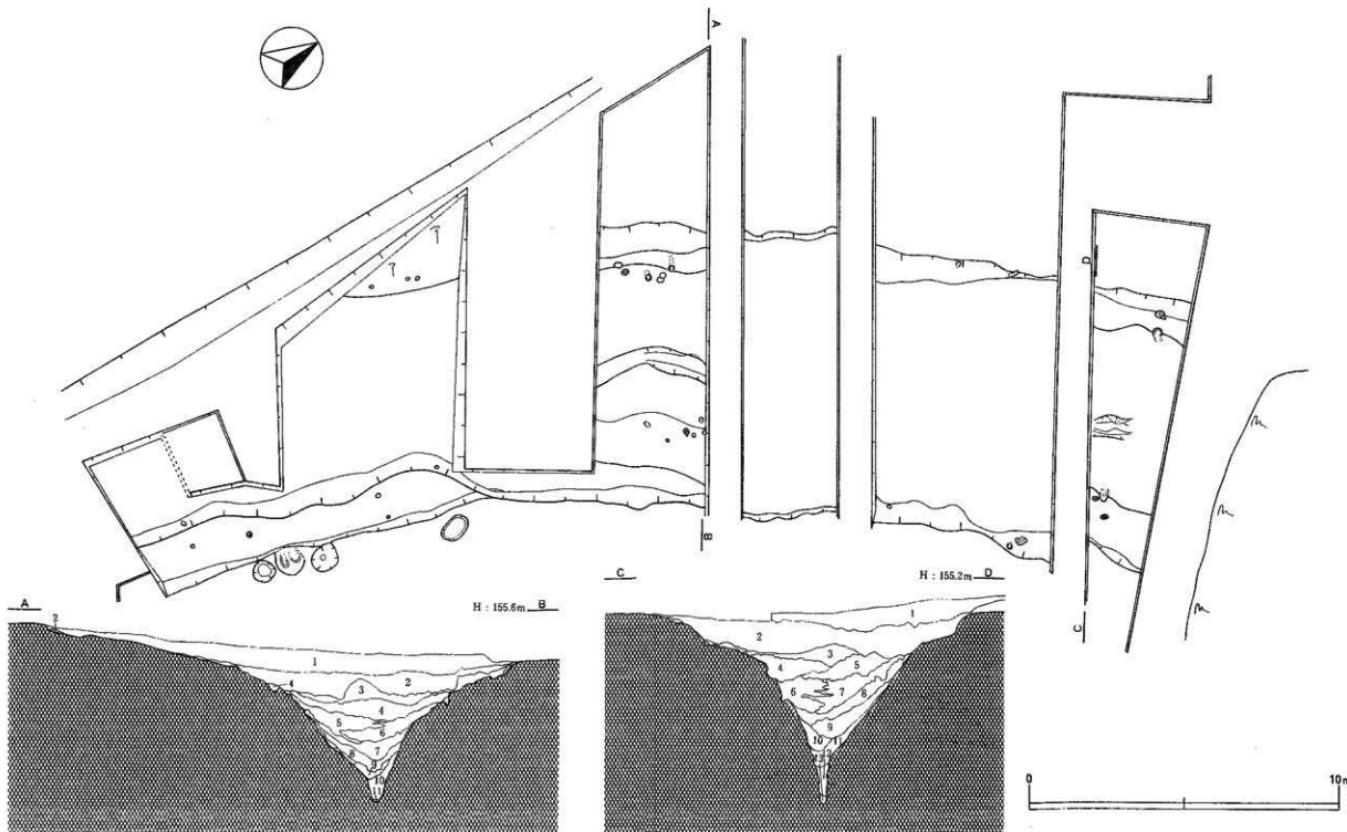
## SN160

農道の西、LS63グリッドに位置し、平面形は不整椭円形で、わずかに掘り込まれており断面形は浅皿形で深さ12cmである。埋土は4層に分層したが、1層は大湯浮石が主体で、焼土が混じる。

## (4) 空堀跡

## SD102（第21・27・29・34・42図、第2～4表、図版12～14）

調査区の南東端にあり、第1次調査区の北西部との間に3条検出されている中で、一番外側つまり、舌状台地の付け根部に位置する。これら3条の堀跡はSD102のごく一部も含めて、第1次で調査されており、その時期は平安時代末葉とされ、その中でSD102が一番古いと考えられている。本遺構はこの部分の現況地形から推測して、東に突き出た舌状台地付け根部に北側から入り込んだ小さな沢を利用するようにして掘られたもので、その総延長は75mほどであろう。平面的には沢に向かって緩い弧を描き、断面形は底面が細い溝状で、北は緩く、南は急に、上面ではかなり緩やかに立ち上がる。調査は堀跡に直交する形でLR・MAラインに沿って2本のトレーナーを設定し、他は4m毎に幅1mのベルトを残しながら堀の上面を確認した。その規模はLRラインで上面幅8.22m、中位幅5.26m、下位幅4.0m、溝状部分の上幅0.50m、下幅0.20m、深さ1.54mで、全体の深さは6.34mである。MAラインでは上面幅8.86m、中位幅5.08m、下位幅2.28m、溝状部分の上幅0.56m、下幅0.18m、深さ0.76mで、全体の深さは4.78mである。上面端から中位の肩にかけての間に、円形もしくは椭円形を呈する径18～25cmのピットが全体的にあり、56cmほど横に掘り込んだものもある。これらの埋土はほとんど炭化物粒子がびっしりつまっており、かなり軟かく、藁のようなものが焼けたという印象を受けた。遺物（第27図19、第29図49、第34図87～97）は土師器杯・甕、須恵器杯、鉄製品（第42図222）、



第21図 SD 102 空堀跡

第2表 SD102 土層観察表 (A~B)

番号	色調	記号	粘性	硬度	混入物			備考
					炭化物	地山	砾石	
1	黒色土	10YR2/1	あり	あり		3~10mm10%		
2a	黒色土	10YR2/1			多量	多量		擾乱堆土
2b	黒色土	10YR2/1			多量	多量		"
2c	黒色土	10YR3/1			ブロック10%			"
2d	暗褐色土	10YR5/3	なし	なし		混入		"
2e	暗黄褐色土	10YR6/6	なし	なし		10%		"・黒褐色土
3a	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり	1~2mm5%	5~10mm10%		自然堆積
3b	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり	1mm10%	3~10mm20%		"
3c	黒色土	10YR2/1	なし	あり	1~2mm10%	5~7mm5%		"
3d	黒褐色土	10YR2/3	なし	やや欠	1~3mm20%	5~10mm5%		"
3e	明黄褐色土	10YR6/8			多量	ブロック多量		"
4a	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり	1~3mm10%	5~20mm20%		人为的堆積
4b	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり	1~6mm15%	5~20mm20%		"
4c	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり	1~2mm5%	5~10mm10%		"
4d	暗褐色土	10YR3/3	なし	あり	多量	ブロック15%		"
4e	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	5mm1%	1~2mm5%	5~30mm20%	"
4f	褐色土	10YR4/4	なし	あり		1~2mm10%	3~20mm30%	"
4g	褐色土	10YR4/4	なし	あり		1~3mm10%	ブロック5%	"
5a	黒褐色土	10YR2/2	なし	やや欠	1mm5%	3~10mm7%		"
5b	黒褐色土	10YR2/2	なし	あり	3mm若干	1~2mm3%	3~10mm5%	"
5c	黒褐色土	10YR2/2	若干	やや欠	2mm1%	1~2mm5%	5~30mm5%	"
5d	黒褐色土	10YR3/2	あり	なし		1~2mm20%	5~10mm10%	"
5e	黒褐色土	10YR3/2	なし	やや欠	2~5mm2%	1~2mm5%	3~5mm20%	"
6a	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	2~5mm1%	1~3mm20%	5~20mm10%	"
6b	ぶいい黄褐色土	10YR4/3	なし	あり	1~2mm若干	1~2mm30%		"
6c	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	5mm1%	1~3mm30%	20mm10%	"
6d	暗褐色土	10YR2/4	なし	あり	3mm若干			"・にじく黄褐色土
6e	暗褐色土	10YR3/4	なし	あり	1~5mm2%	1~2mm30%	5~10mm10%	"
6f	黒褐色土	10YR3/2	なし	あり		1~2mm10%	5~10mm10%	"
6g	暗褐色土	10YR3/3	なし	あり	2~5mm3%	1~3mm20%	10~20mm5%	"
7a	褐色土	10YR4/4	なし	あり		1~2mm20%	3~40mm30%	第三次崩壊上
7b	暗褐色土	10YR3/3	なし	なし	1~2mm20%	1~2mm20%	ブロック20%	少量
7c	暗褐色土	10YR3/3	なし	なし	ブロック		ブロック30%	"
7d	暗褐色土	10YR3/4	なし	やや欠		1~2mm20%	5~10mm20%	少量
8a	黒褐色土	10YR2/2	なし	やや欠		1~2mm5%	5~10mm3%	自然堆積
8b	暗褐色土	10YR3/4	なし	なし		1~2mm10%	3~30mm5%	"

8c	暗褐色土	10YR3/3	な	し		1~2mm 5%	5~20mm 3%		自然堆積
8d	暗褐色土	10YR3/4	な	し	し	1~2mm 20%	5~30mm 20%	少量	"
8e	褐色土	10YR4/4	な	し	し	2mm 10%	2~10mm 20%		"
8f	褐色土	10YR4/4	な	し	若干	1~2mm 多量	3~5mm 多量		"
8g	にぶい褐色土	10YR4/3	な	し	あり	1~5mm 10%		少量	"
8h	黒褐色土	10YR2/2	若	干	あり	2~10mm 1%	1~3mm 5%	5~10mm 10%	少量
9a	褐色土	10YR4/4	な	し	やや欠		ブロック		第二次崩壊上
9b	褐色土	10YR4/4	な	し	やや欠		3~5mm 90%		"
9c	褐色土	10YR4/4	な	し	し	1~2mm 10%	10~20mm 2%		"
9d	にぶい黄褐色土	10YR5/4	な	し	やや欠	ブロック多量	3~10mm 5%		"
10a	暗褐色土	10YR3/3	な	し	やや欠	ブロック 10%	5~10mm 5%		第一次崩壊上
10b	黒褐色土	10YR2/3	な	し	し		多量		"
10c	暗褐色土	10YR3/3	な	し	し	1~2mm 10%	5mm 10%	若干	"
10d	暗褐色土	10YR3/3	な	し	し	1~5mm 20%	10~20mm 3%	少量	"
10e	黒褐色土	10YR3/2	若	干	なし	1~2mm 20%	5~10mm 30%		"
10f	黒褐色土	10YR3/2	な	し	し	1~5mm 60%	5mm 10%	若干	"
10g	褐色土	10YR4/4	な	し	し	1~5mm 50%	3mm		"
11	砂層			あ	り		2~3mm 3%	1~2mm	自然堆積

第3表 SD102 土層観察表 (C~D)

番号	色調	記号	粘性	硬度	混入物				備考
					炭化物	地山	軽石	砂	
1	黒色土	10YR2/1	あり	あり		3~10mm 10%			
2a	黒色土	10YR2/1				ブロック 20%			機械理土
2b	黒色土	10YR2/1			多量	多量			"
2c	黒色土	10YR2/1			多量	多量			"
2d	黒色土	10YR3/1			ブロック 10%				"
2e	明黄褐色土	10YR6/6				10%			"・黒褐色土
2f	暗褐色土	10YR5/3	な	し	し	混入			"
3a	黒色土	10YR2/3	若干	あり		1~2mm 5%	3~5mm 2%		自然堆積
3b	黒色土	10YR17/1	な	し	あり	1~3mm 5%	5~10mm 7%		"
3c	暗褐色土	10YR2/2	な	し	あり	3mm 1%	1~3mm 10%	5mm 10%	"
3d	黒褐色土	10YR2/3	若干	あり		1~2mm 3%	少量		"
3e	暗褐色土	10YR3/3	な	し	あり	2mm 1%	少量		"
4a	褐色土	10YR4/4	な	し	あり	シラス多量	5~10mm 10%		人為的堆積
4b	暗褐色土	10YR3/3	な	し	やや欠	1~3mm 20%	ブロック 3%		"
4c	にぶい黄褐色土	10YR4/3	な	し	やや欠	シラス多量	20%		"
4d	にぶい黄褐色土	10YR4/3	な	し	やや欠	2~5mm 20%	ブロック 10%		"
4e						シラスブロック	混入		"
4f	黒褐色土	10YR3/2	な	し	やや欠	3mm 1%	2~3mm 10%	10~20mm 5%	"

4 g	黒褐色土	10YR2/3	なしあり	1mm若干	2~5mm10%	ロック10%		人為的堆積
4 h	にぶい黄褐色土	10YR5/4	なしなし		シラス多量	5~10mm3%		"
4 i	褐色土	10YR4/4	なしなし			1%		"・明治褐色土
5 a	黒色土	10YR2/1	若干あり		1~4mm5%			"
5 b	黒褐色土	10YR2/3	若干あり		1~10mm30%	ロック10%		"
5 c	黒褐色土	10YR2/3				ロック20%		"・石礫出土
5 d	黒褐色土	10YR2/2	なしあり		1~10mm40%	ロック10%		"
5 e	黒褐色土	10YR2/3	若干あり	3mm5%	1~5mm40%	ロック5%		"
5 f	黒色土	10YR2/1	若干あり	2mm1%	1~5mm20%	5%		"
6 a	褐色土	10YR4/6	なしあり		1~3mm50%	少量		"
6 b	黒褐色土	10YR2/3	なしやや欠		1~5mm20%	1%		"
6 c	黒褐色土	10YR2/2	若干あり		1~10mm30%	ロック5%		"
6 d	暗褐色土	10YR3/3	なしあり	2mm1%	2~5mm40%	10%	若干	"
6 e	黒褐色土	10YR2/3	若干あり	2mm若干	1~3mm7%	2%	若干	"
6 f	暗褐色土	10YR3/3	若干やや欠		1~5mm10%	1%	若干	"
6 h	にぶい黄褐色土	10YR4/3	なしなし		シラス多量	多量		"
6 i	にぶい黄褐色土	10YR5/4	なしなし		シラス多量	10mm10%		"
6 j	暗褐色土	10YR3/3	なしなし			3~10mm20%		"・明治褐色土
6 k	黒褐色土	10YR2/3	なしなし		シラス多量			"
7 a	黒褐色土	10YR2/2	なしあり		1~5mm20%	少量		"
7 b	黒色土	10YR2/1	なしあり	3mm1%	1~10mm10%	若干		"
7 c	黒褐色土	10YR2/2			1~3mm15%			"
7 d	黒褐色土	10YR2/3	なしあり		多量	3%		"
7 e	黒褐色土	10YR2/2	若干あり	2mm1%	1~5mm20%	20%		"
7 f	黒褐色土	10YR2/2	若干あり		1~5mm30%			"
7 g	黒色土	10YR2/1	若干あり		多量	5%		"
7 h	黒褐色土	10YR3/2	なしあり		1~3mm20%	少量		"
7 i	暗褐色土	10YR3/3	なしあり		多量	5%		"
8 u	暗褐色土	10YR3/3	なしあり		2~5mm20%	少量		第三次削土
8 b	褐色土	10YR4/6	なしやや欠		2~5mm20%	5~30mm10%	1mm若干	"
8 c	黄褐色土	10YR5/8	なしあり		3~5mm30%	20~30mm5%	若干	"
8 d	暗褐色土	10YR3/3	若干やや欠		2~5mm10%	ロック10%	1mm少量	"
8 e	褐色土	10YR4/4	なしなし		2~5mm30%	ロック50%		"
8 f	暗褐色土	10YR3/4	なしやや欠		2~3mm5%	ロック3%	1~2mm少量	"
8 g	明黄褐色土	10YR6/8	なしやや欠		3~10mm30%			"・黄褐色土
9 a	黒褐色土	10YR3/2	あり	3mm若干	3~10mm3%		1~2mm多量	自然堆積
9 b	黒色土	10YR2/1	やや欠		3~6mm5%		1~2mm多量	"
9 c	黒色土	10YR2/1	あり		2~10mm10%		1~2mm多量	"・黒褐色土
9 d	褐色土	10YR4/4	なしやや欠		1~10mm30%	10mm2%	2%	"
9 e	褐色土	10YR4/4	あり			10~40mm多量		"

9f	暗褐色土	10YR3/4	あり	3~5mm10%	20mm5%	1~2mm多量	自然堆积 黑褐色土
9g	黒褐色土	10YR2/2	若干	やや欠 3mm若干		ブロック10%	1mm10%
9h	黒褐色土	10YR2/2		やや欠	混入	ブロック	1mm
9i	明黄褐色土	10YR7/6	なし	なし		ブロック5%	1mm木屑若干
9j	黒褐色土	10YR2/2	なし	なし			"
9k	褐色土	10YR4/4	なし	やや欠	1~5mm20%	ブロック5%	1~2mm1%
9l	褐色土	10YR4/4	なし	なし	多量	多量	若干
9m	褐色土	10YR4/6	なし	なし	2~5mm20%		"
10a	暗褐色土	10YR3/3	なし	なし	2~5mm70%	ブロック	少量
10b	暗褐色土	10YR3/4	なし	やや欠	2~10mm60%	1%	少量
10c	褐色土	10YR4/4	なし	やや欠	3~5mm50%	2%	多量
11a	明黄褐色土	10YR7/6	なし	あり	3~8mm5%	若干	第二次削壠土
11b	にぼい黄褐色土	10YH7/3	なし	なし	2~5mm10%	2%	"・明黄褐色土
11c	暗褐色土	10YR3/4	若干	なし			"・褐色土
11d	にぼい黄褐色土	10YR7/3	若干	なし	5~20mm30%	2%	若干"・暗褐色土
11e	にぼい黄褐色土	10YR7/3	なし	なし	3~5mm10%		"
11f	にぼい黄褐色土	10YR7/3	なし	なし	ブロック2%		"
12a	黄褐色土	10YR5/6	若干	なし	2~3mm80%		削壠土
12b	明黄褐色土	10YR6/8	若干	なし	5~20mm90%		"
12c	明黄褐色土	10YR6/8	なし	なし	2~8mm90%		"
12d	褐色土	10YR4/4	若干	なし	2~7mm80%	若干	"
12e	にぼい黄褐色土	10YH7/3	なし	なし	3~10mm70%		"・明黄褐色土
13a	砂質			強		0.5~1mm砂鉄	自然堆积・礫付
13b	砂質			強		0.5~1mm砂鉄	

輪羽口(96)、縄文土器、石鎚(97)が出土している。埋土の詳しい状況は土層大別図(第21図)、土層注記表(第2・3表)にゆずるが、第1・2層は戦後まもなく畠地とする際に北側から重機で押された擾乱層である。遺物の取り上げは大別した土層の3・4層が上層、4層下部～6層上部が中層、6層下部～7層までが下層として行った。

#### (5) 柱穴様ピット(第24・25・35・41図、第10・12表、図版11・16)

##### 柱穴様ピット2(P2)

L68グリッドに位置し、平面形は円形で、径は上端で0.46m、下端で0.17m、深さ0.54mである。埋土は黒褐色土に大湯浮石の細粒が混入している。遺物は土師器壺(第35図103)が出土している。

##### 柱穴様ピット3(P3)

M69グリッドに位置し、平面形は円形で、径0.35m、深さ0.18mである。底面はデコボコしている。埋土は暗褐色土に大湯浮石がブロック状に混入している。遺物は土師器把手付土器(第41図210・212)が出土している。

## 柱穴様ピット4(P4)

MB65グリッドに位置し、平面形は円形で、径0.26mである。埋土に大湯浮石が混入し、遺物は土師器把手付土器(第41図214)が出土している。

## 柱穴様ピット5(P5)

LS68グリッドに位置し、平面形は円形、断面形は円筒形で、径0.47m、深さ0.47mである。埋土の第2層に大湯浮石が混入する。遺物は土師器把手付土器(第41図215)が斜めになって出土した。

## 柱穴様ピット6(P6)

LT67グリッドに位置し、平面形は梢円形、長軸0.40m、短軸0.25mである。埋土は黒色土で、遺物は径2cm前後の鉄滓が6点出土した。

## (6) その他の遺構(第24図、図版11)

## S X176

調査区中央部のLT67グリッドに位置し、平面形は梢円形、深さ0.13mと浅く掘り込まれており、底面はデコボコしている。埋土は3層に分層し、そのいずれも大湯浮石粒が混入している。1層は径5~10mmの小礫(2%)と小さな鉄滓(10%)が混入した層で、2・3層には炭化物粒子が混入し、その割合は2層にはシミ状に30%、3層には径3mmの粒子が1%である。本遺構の西と東に1層が厚さ2cmで広がる。

## 4. その他の遺構と遺物

時期不明の遺構を本項で記述する。

## (1) 土坑(第24図)

## SK154

ME66グリッドに位置し、平面形は円形で、断面形は円筒形である。規模は坑口部0.85m、坑底部0.56m、深さ0.86mである。

## SK170

LT66グリッドに位置し、平面形は円形、断面形は浅皿形である。規模は、坑口部1.74mで、深さは0.27mである。

## (2) 焼土遺構(第23・24図)

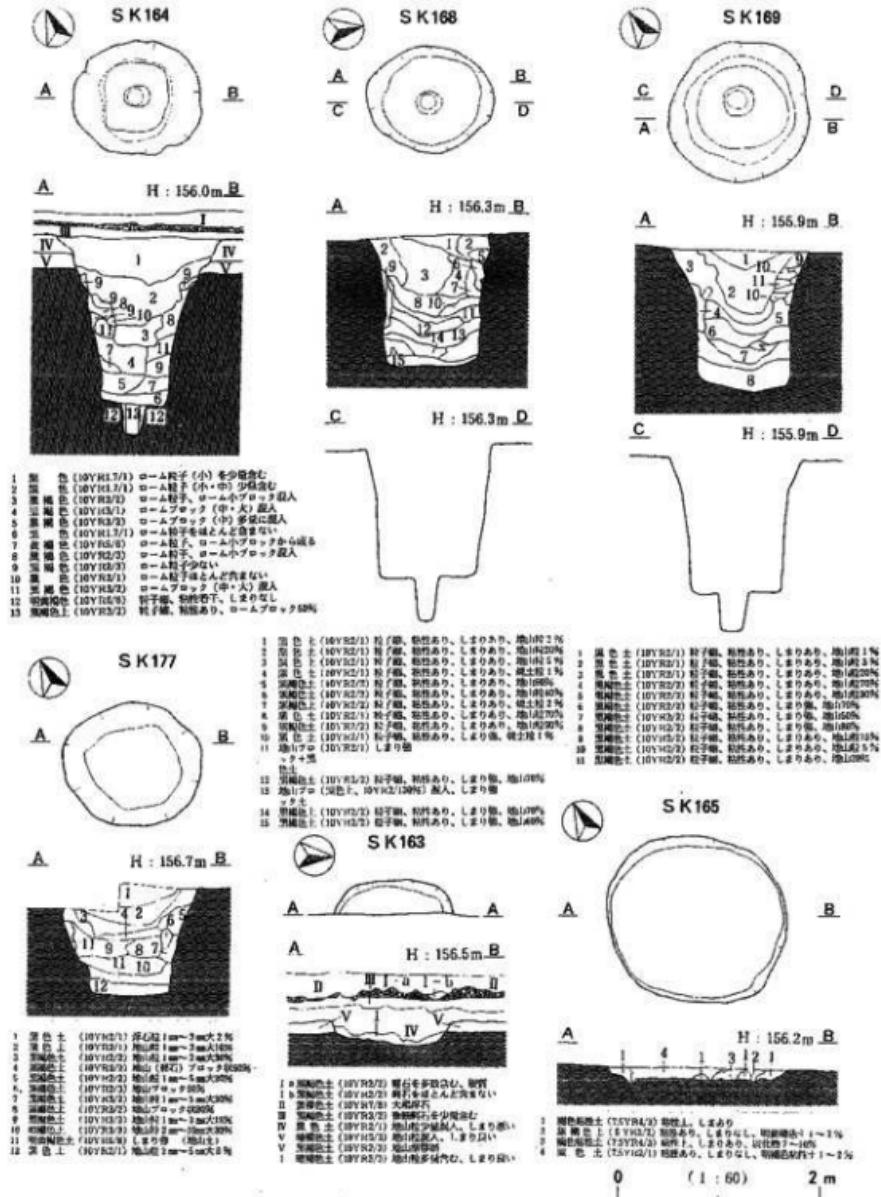
## SN162

LS66グリッドに位置し、梢円形で、長軸0.88m、短軸0.56mである。

## SN171

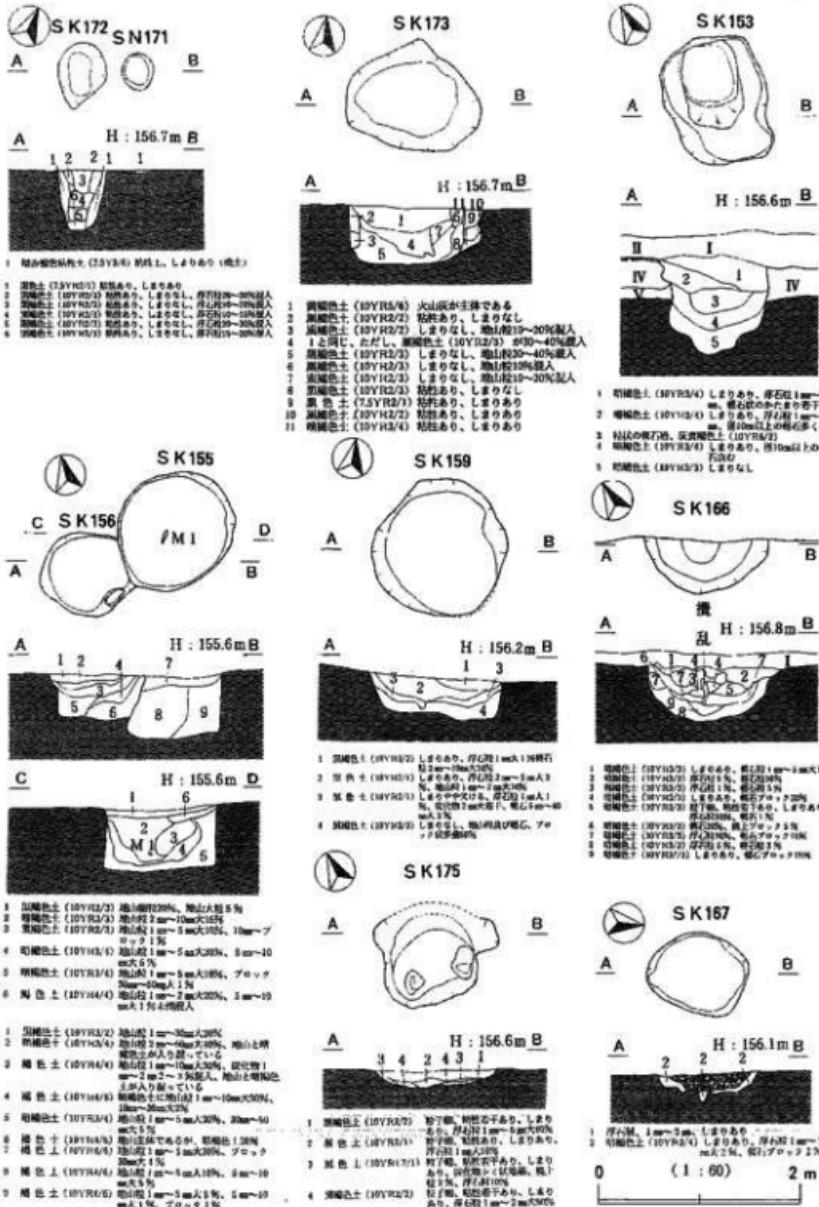
LQ67グリッドに位置し、不整梢円形で、長軸1.80m、短軸1.26m、深さ0.10mである。

#### 第4章 調査の結果

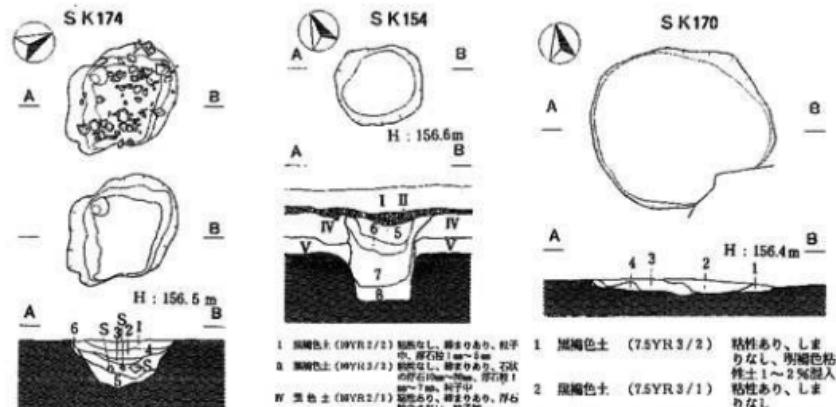


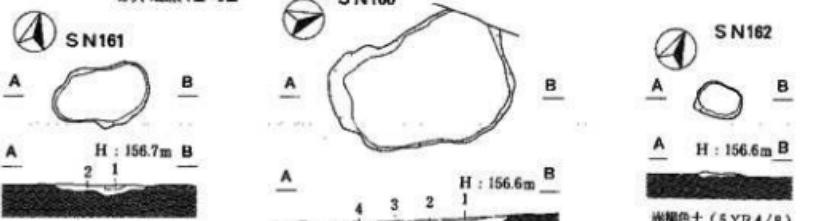
### 第22図 SK土坑

## 第1節 遺跡と遺物



第23図 SK土坑 SN焼土遺構



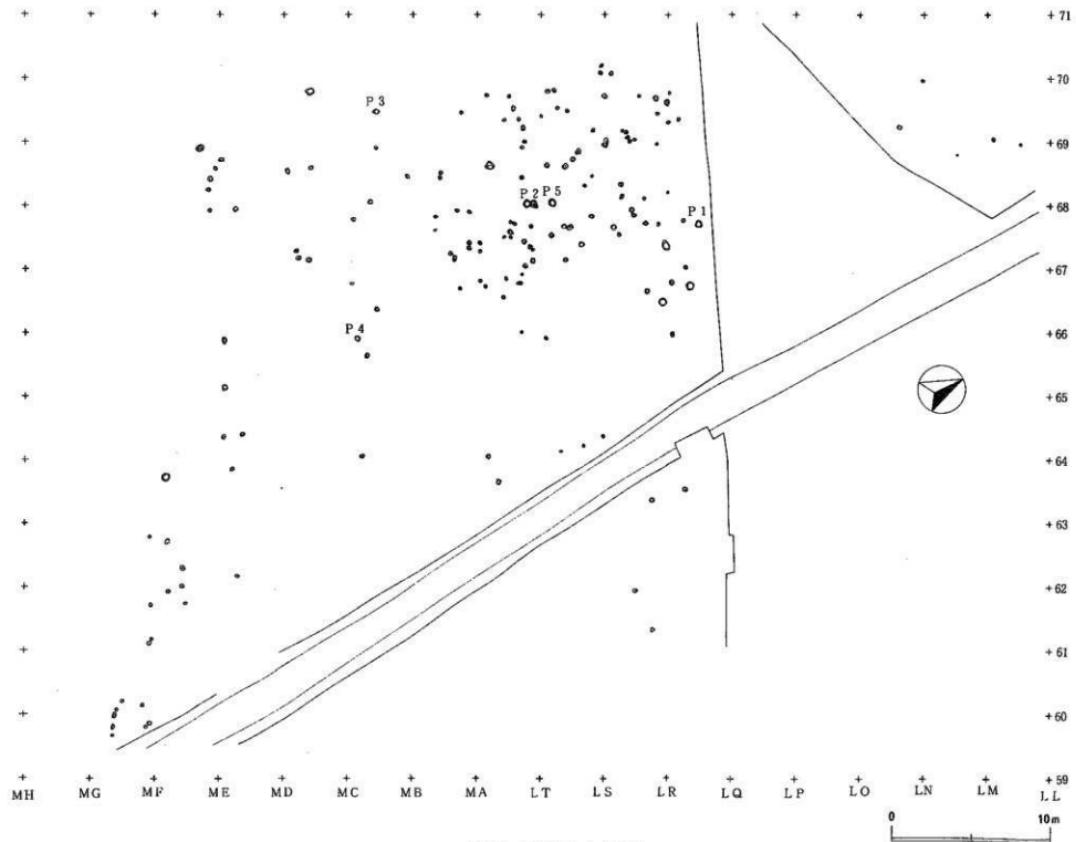



- 1 赤褐色土 (SYR4/3) 砂土、粘性あり、しまりあり  
2 赤褐色土 (SYR4/8) 黄褐色土 (T.SYR 2/2) の配合土砂、粘性あり、しまりなし



- 1 地表色土 (IGW R 2 / 1) 粒子細、初性あり、しまりなし、砾石粒 1 mm ~ 3 mm 大20%、砾石粒 5 mm ~ 10 mm 小5%  
2 地表細颗粒土 (IGW R 2 / 2) 粒子細、初性あり、しまりや少欠ける、砾石粒 3 mm ~ 2 mm 大10%  
3 地表ブロッカ (IGW 3) 人  
4 地表ブロッカ、砾石粒

第24図 SK土坑 SN焼土遺構 柱穴様ピット SX性格不明の遺構



第25図 柱穴標ピット分布図

## (3) 柱穴様ピット（第25図）

中央の遺構を中心に広く分布しているもので、規模、断面形に規則性がない。

## 第2節 遺構外出土の遺物

## 1. 繩文時代の遺物

## (1) 土器（第36～38図）

時期毎に群に別けて細分した。

第I群 前期初頭の土器である。

## a類（第36図、110～116）

いずれも胎土に纖維を混入し、羽状縄文があり、107は内面に条痕を施すものである。107、108は補修孔がある。

## b類（第36図117）

胎土に纖維を混入し、表裏縄文を施すものである。

第II群 前期前葉の土器である。胎土にやや纖維を混入し、焼成が良く硬質である。

## a類（第36図104、105）

いずれも口縁部で、104は口唇部をヘラ状工具で平滑に仕上げている。

## b類（第36図106、109）

いずれも胴部で、羽状縄文を施すものである。

第III群（第36図118、119） 前期末葉の土器である。

口縁部の文様帯が狭いもので、118は胴部上半から木目状撚糸文を施すものである。

第IV群 後期初頭の土器である。

## a類（第36図125・126、第37図127～130）

地文が無文で、その上に太めの平行沈線で文様帯を構成するもので、125は波状口縁である。

## b類（第36図120）

縄文のみのもので、口縁部は粘土紐の貼付によって折返し口縁のように肥厚する。

第V群 後期前葉の土器である。

## a類（第36図122～124、第37図133～136）

地文が縄文で、浅い沈線で文様を区画するものである。

## b類（第37図131、132）

地文が無文で、浅く細い沈線で文様を区画するものである。

第VI群 後期後葉の土器である。

a類（第37図133）

沈線による区画文内にクシ状工具による浅い条線を施すものである。

b類（第36図121、第37図138）

縄文のみを施すものである。

(2) 石器（第38図169）

石棒が1点出土している。

## 2. 弥生時代の遺物

(1) 土器（第37図138～152、第38図153～168）

139～141、153、154は沈線で文様帶を区画するもので、153は外面に朱を塗っている。143～146、157は横位または斜位の撚糸文によって口縁部の文様帶を構成しているものである。いずれも小坂X式に比定される。

## 3. 平安時代の遺物

(1) 土器（第39図170～189、第40図190～198、200～209、第41図210～213）

170～182は土師器杯、183～198は土師器壺である。200は須恵器杯、201～203は須恵器壺で、204～209は須恵器壺である。211～213は土師器把手付土器の小形のもので、210は把手部分である。

(2) 土製品（第40図199）

構羽口の破片が1点出土している。外面にケズリによる調整痕がある。

(3) 鉄製品（第42図217・218・220・221・225～227）

217と218は鉄鎌の基部かと思われるが、218は釘かもしれない。220、221は鍔状のものである。220は釘かもしれない。225、226は棒状を呈する。227は楕円形でLT68グリッド出土である。このグリッドからはもう1点出土しており、大きさ11.5×8.5cm、重さ0.24kgである。

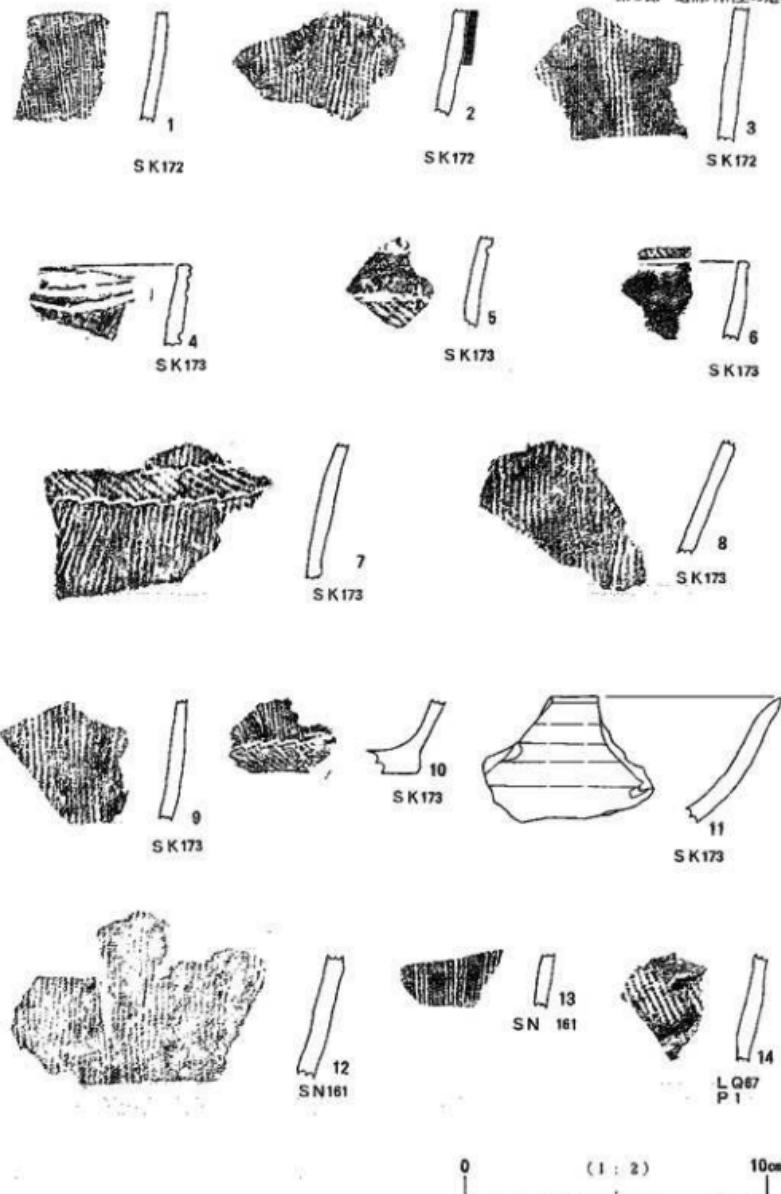
註1 遺構内出土遺物の扱い方は直接それに携わった人によって様々なアプローチの方法がある。

ここでは下記の報告書に記述されている遺構内出土遺物、とりわけ住居跡からの土器の出土状況について想定できる「転用」「遺棄」「廃棄」「流入」の概念に基づいている。

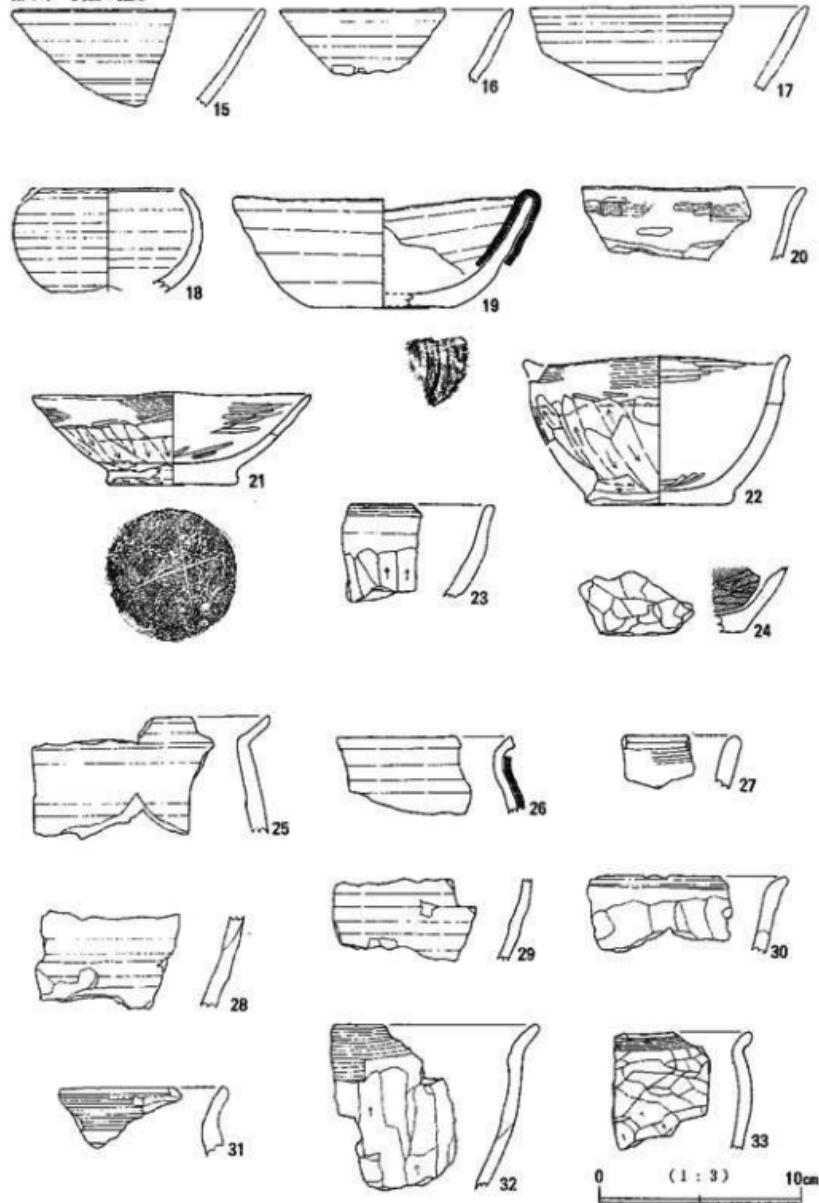
多摩市遺跡調査会『和田・百草遺跡群』多摩市埋蔵文化財調査報告3 1982(昭和57年)

多摩都市計画道路事業1・3・1号線関連遺跡調査会『向ヶ岡遺跡』多摩市埋蔵文化財調査報告6 1983(昭和58年)

第2節 週縁外川土の遺物

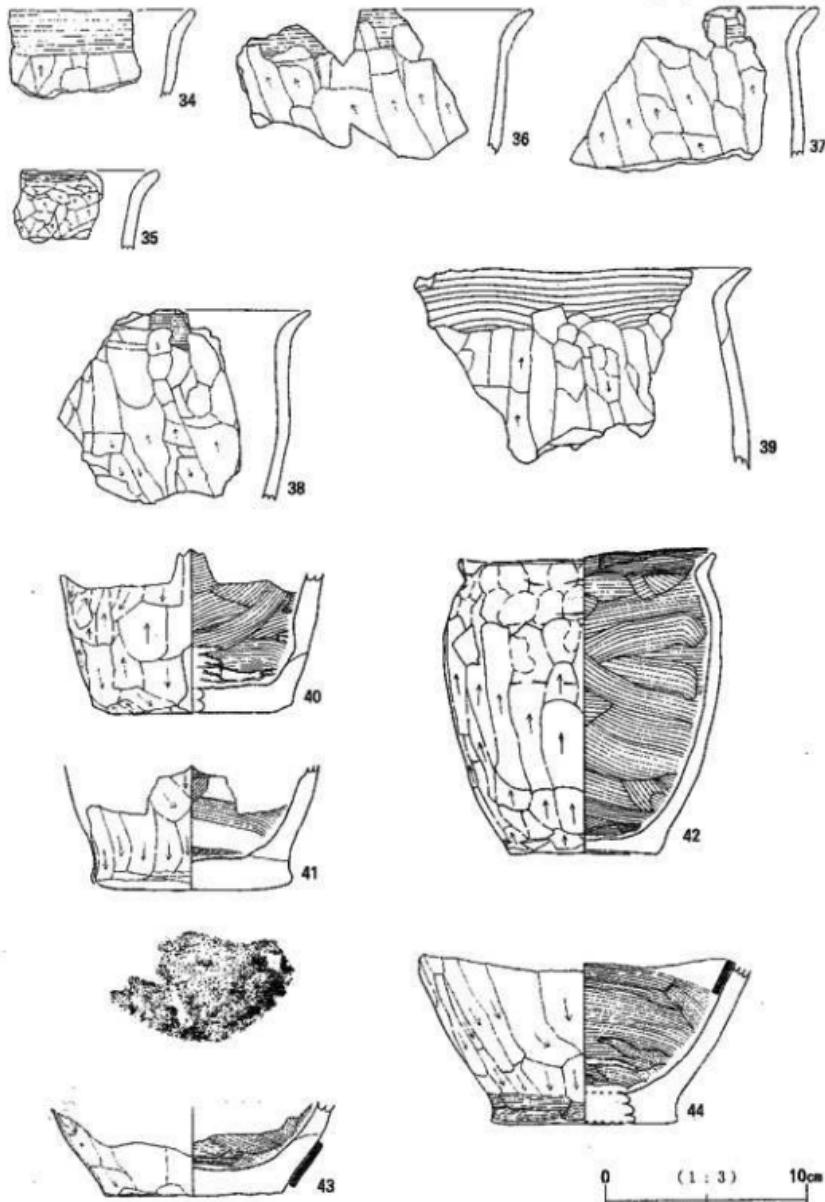


第26図 弥生時代の遺構内出土遺物

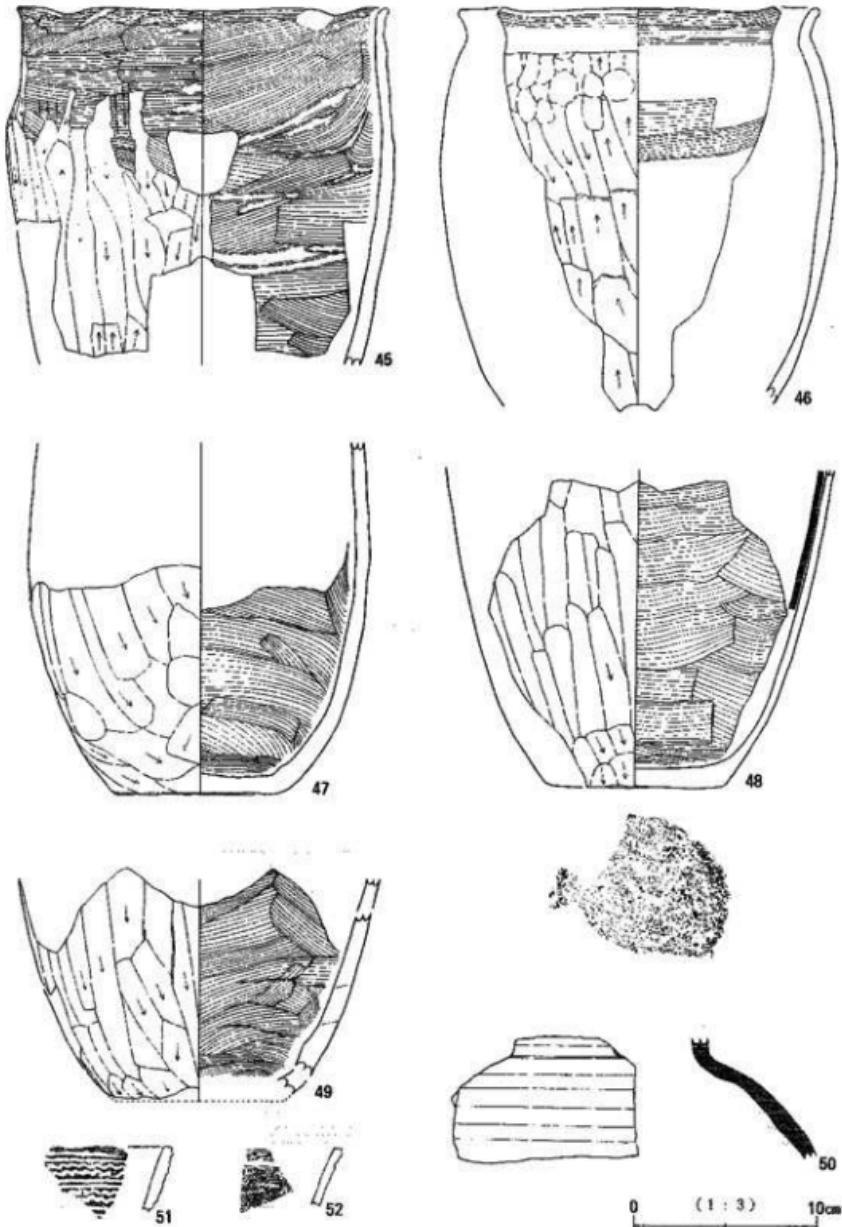


第27図 S I 150竪穴住居跡 出土遺物(1)

第2節 遺構外出土の遺物

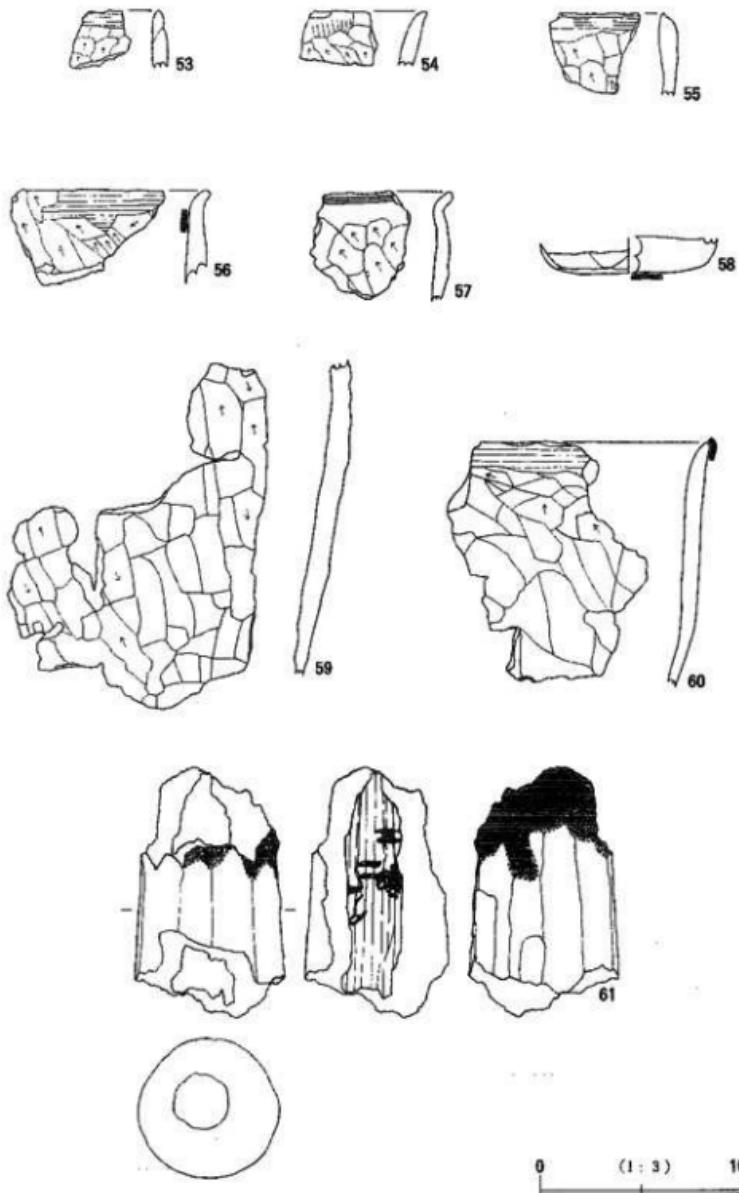


第28図 S I 150堅穴住居跡 出土遺物(2)



第29図 S I 150整穴住居跡 出土遺物(3)

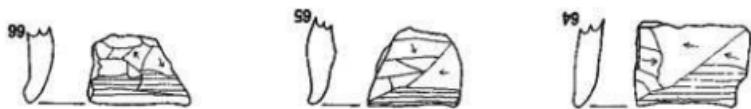
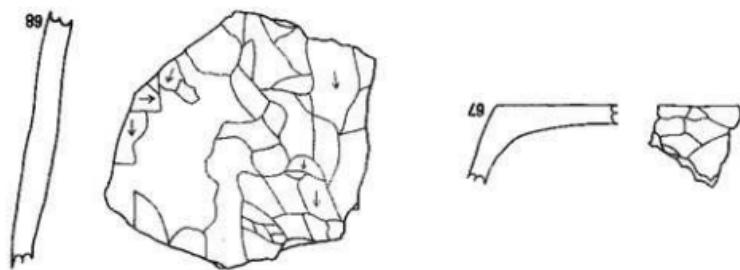
第2節 道標外出土の遺物



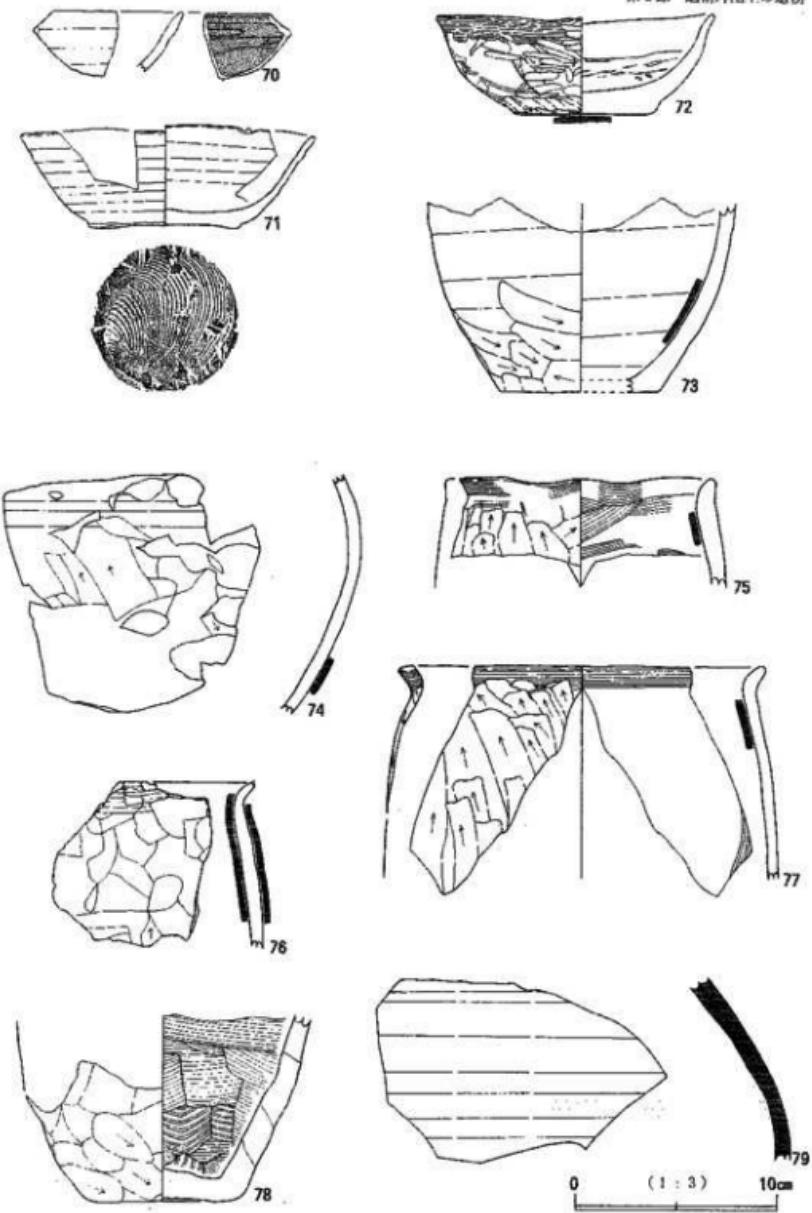
第30図 S I 151堅穴住居跡 出土遺物

図31 S 1152号出土器物 出土遺物

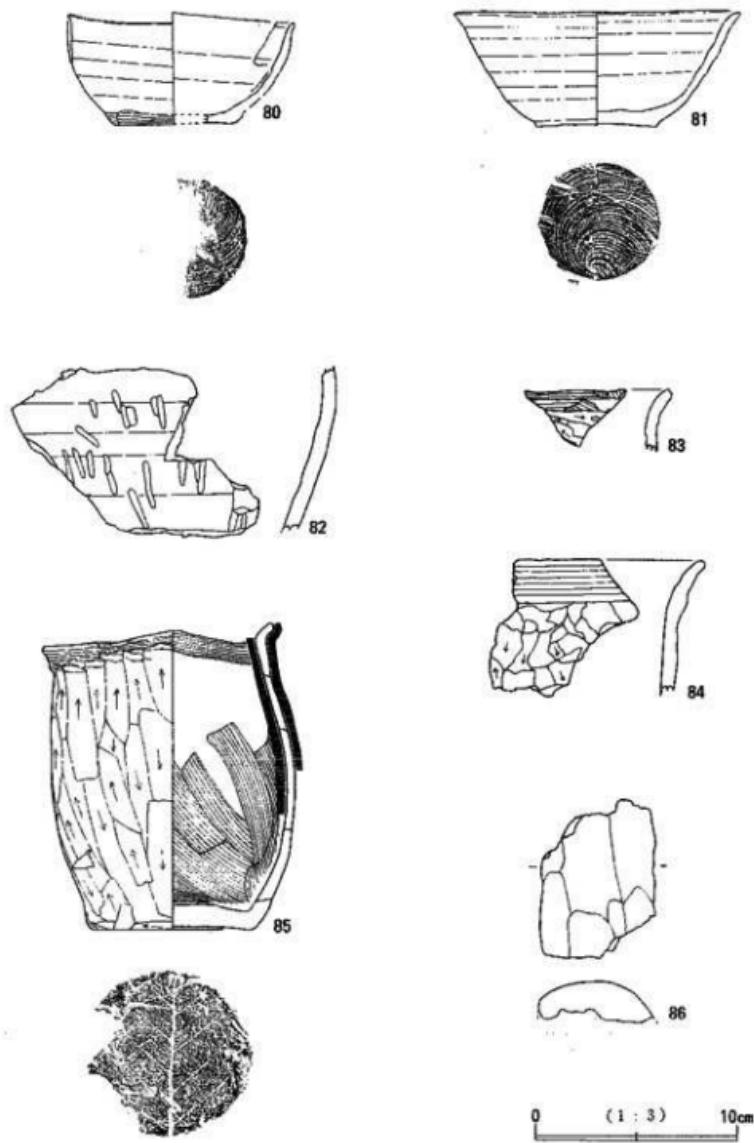
0 (1 : 2) 10m



第2節 道標外出土の遺物

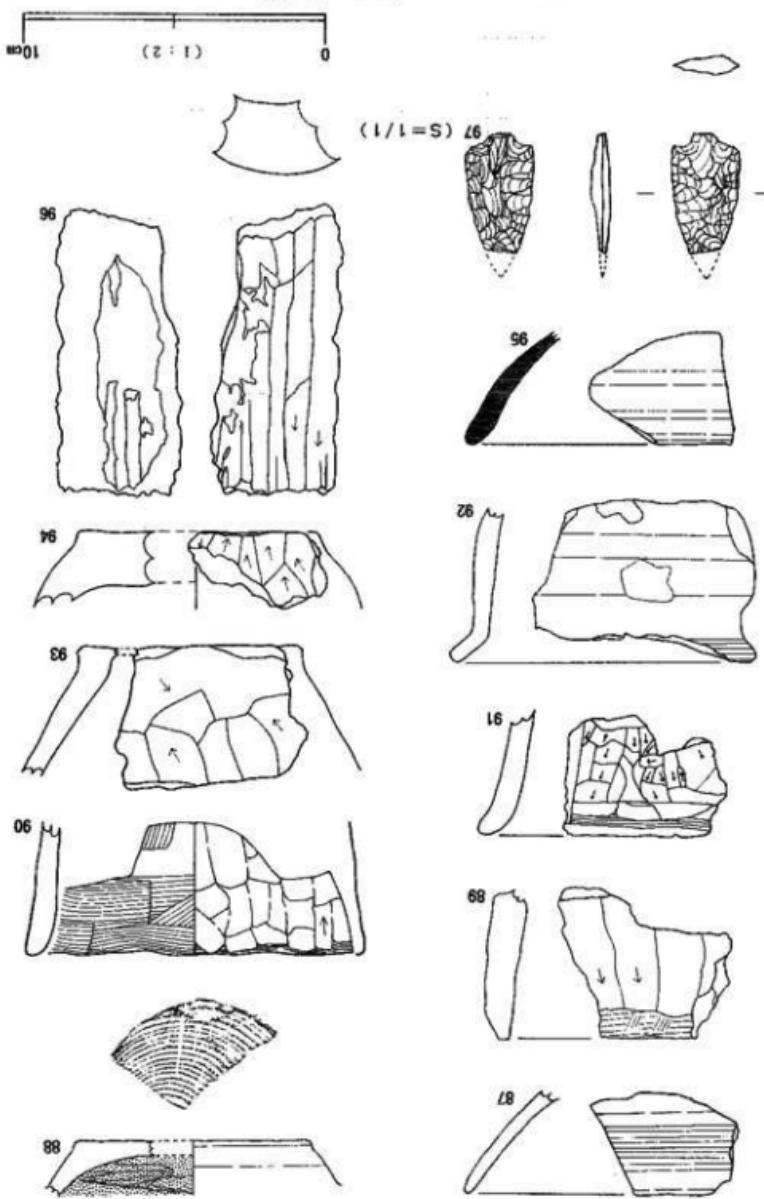


第32図 S I 157号穴住居跡 出土遺物

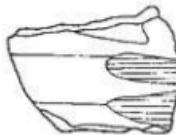
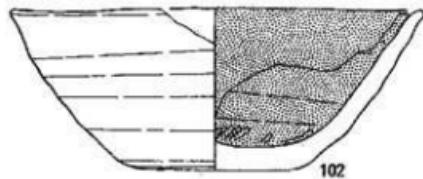
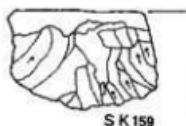
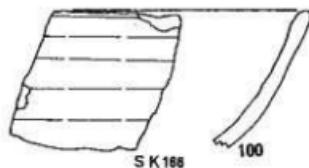
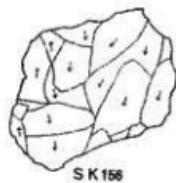


第33図 S.I. 158竪穴住居跡 出土遺物

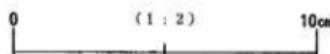
圖34圖 SD102空頭器 出土遺物



第二圖 空頭器出土の遺物

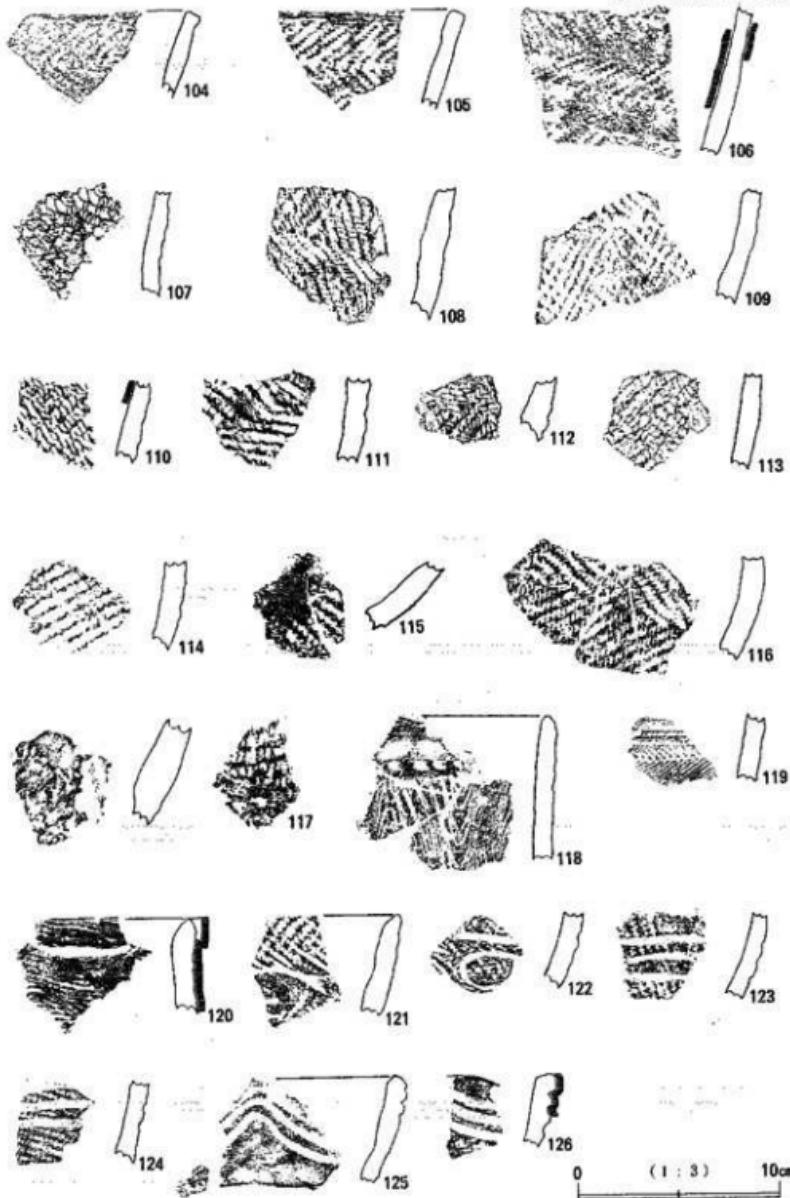


SK 175



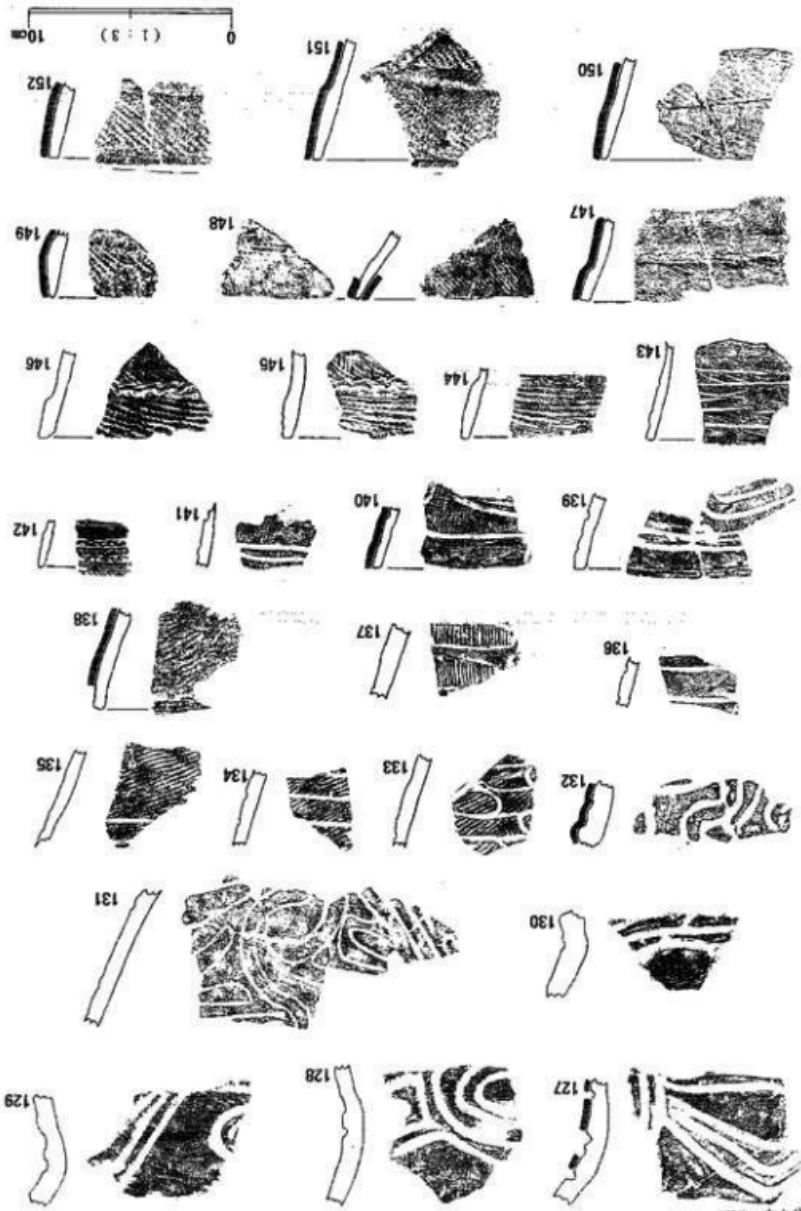
第35図 平安時代の造構内出土遺物

第2節 造横外出土の遺物

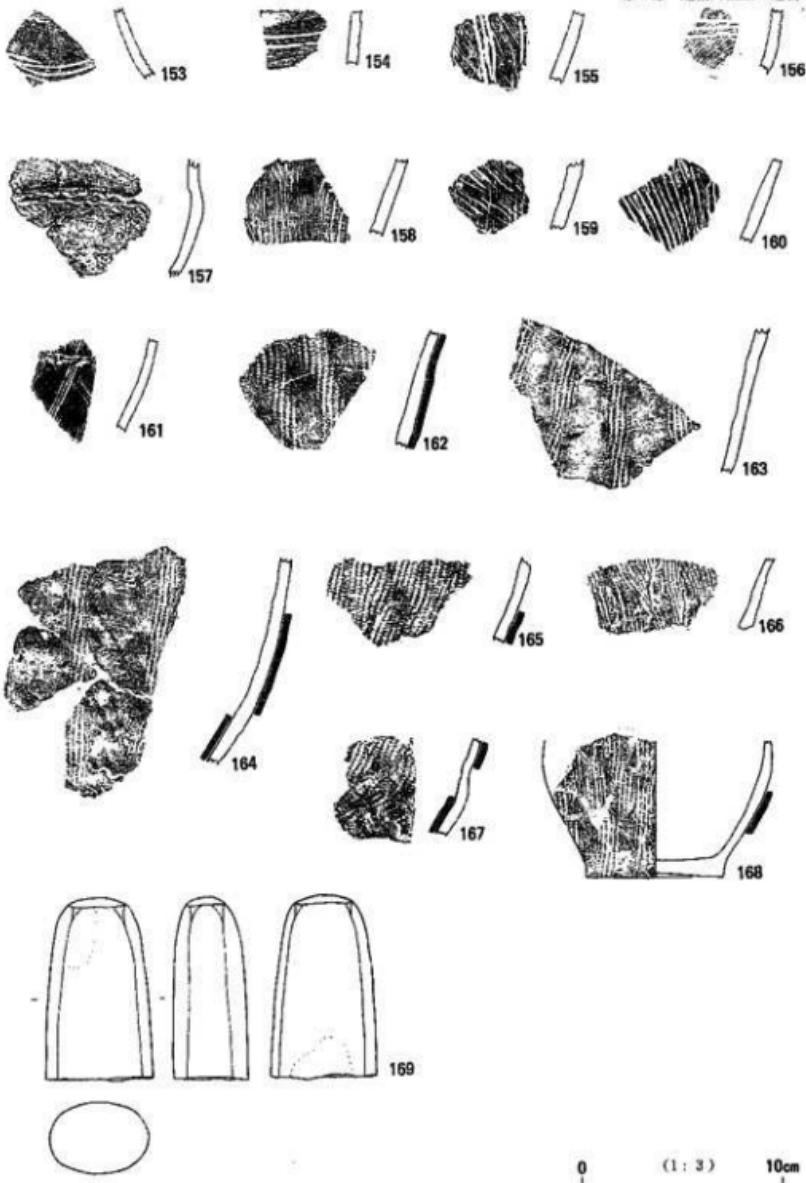


第36図 造横外出土遺物(1) 一縄文土器一

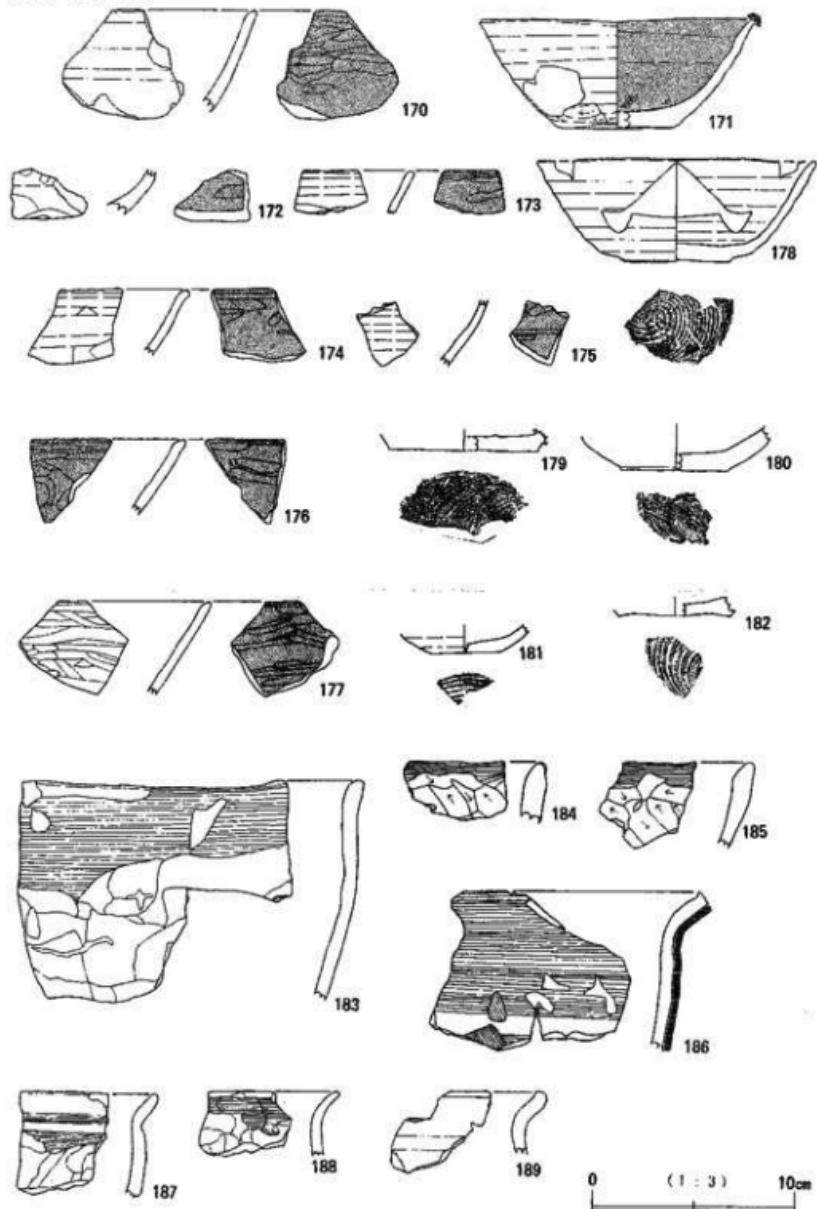
圖三七 遷都外出土遺物(2) 一編文土器·漆生土器



第2節 造構外出土の遺物

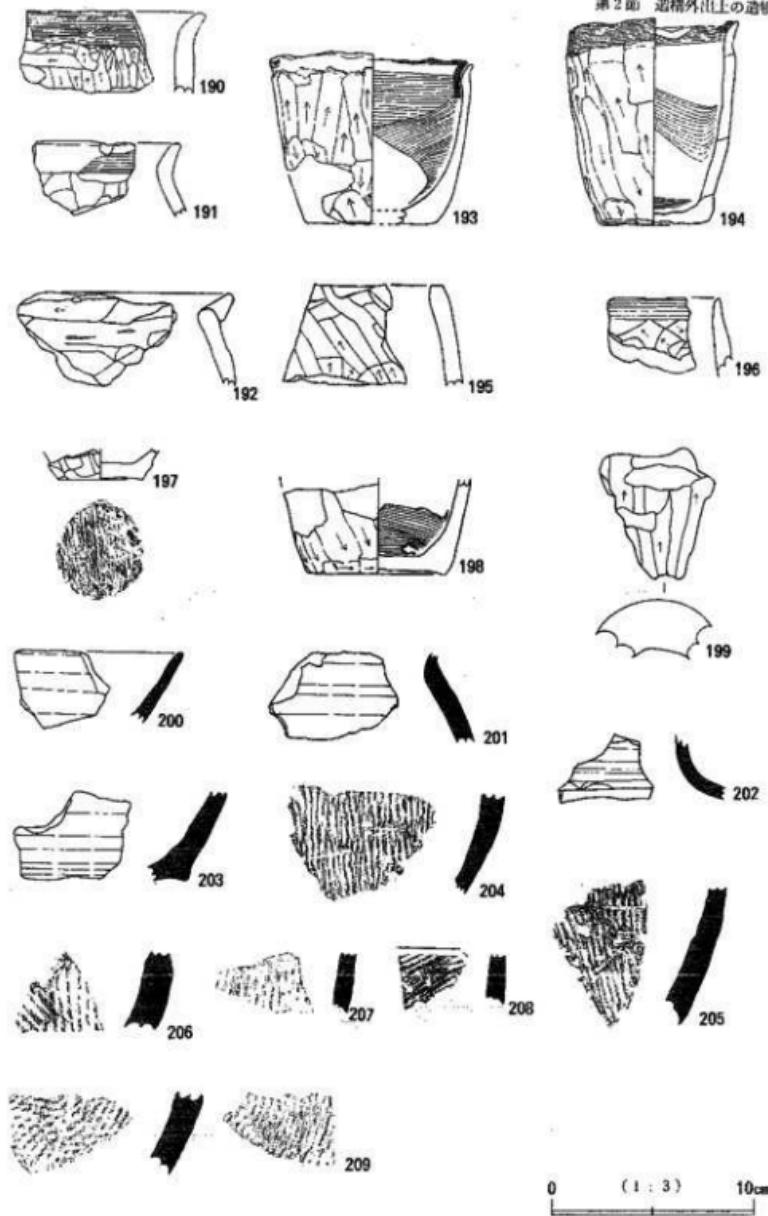


第38図 造構外出土遺物(3) —弥生土器・石器—

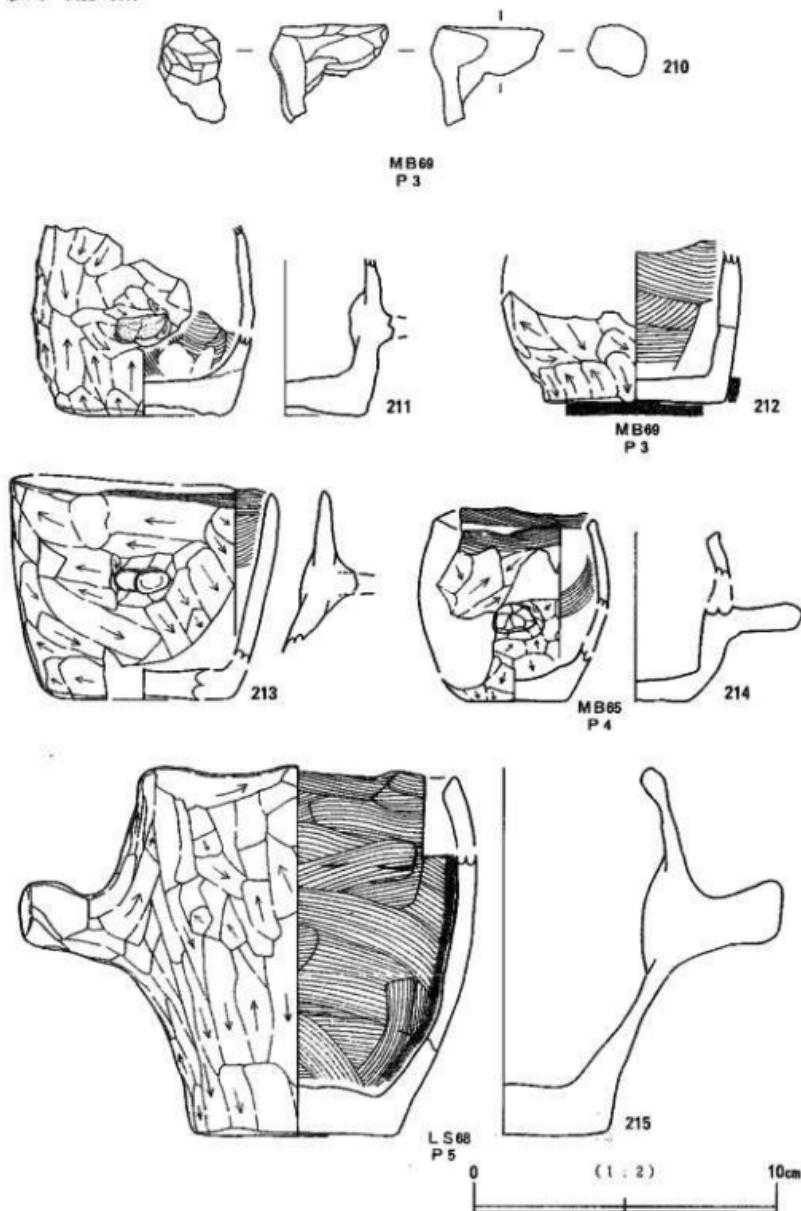


第39図 造構外出土遺物(4) 一土師器一

第2節 造構外出土の遺物

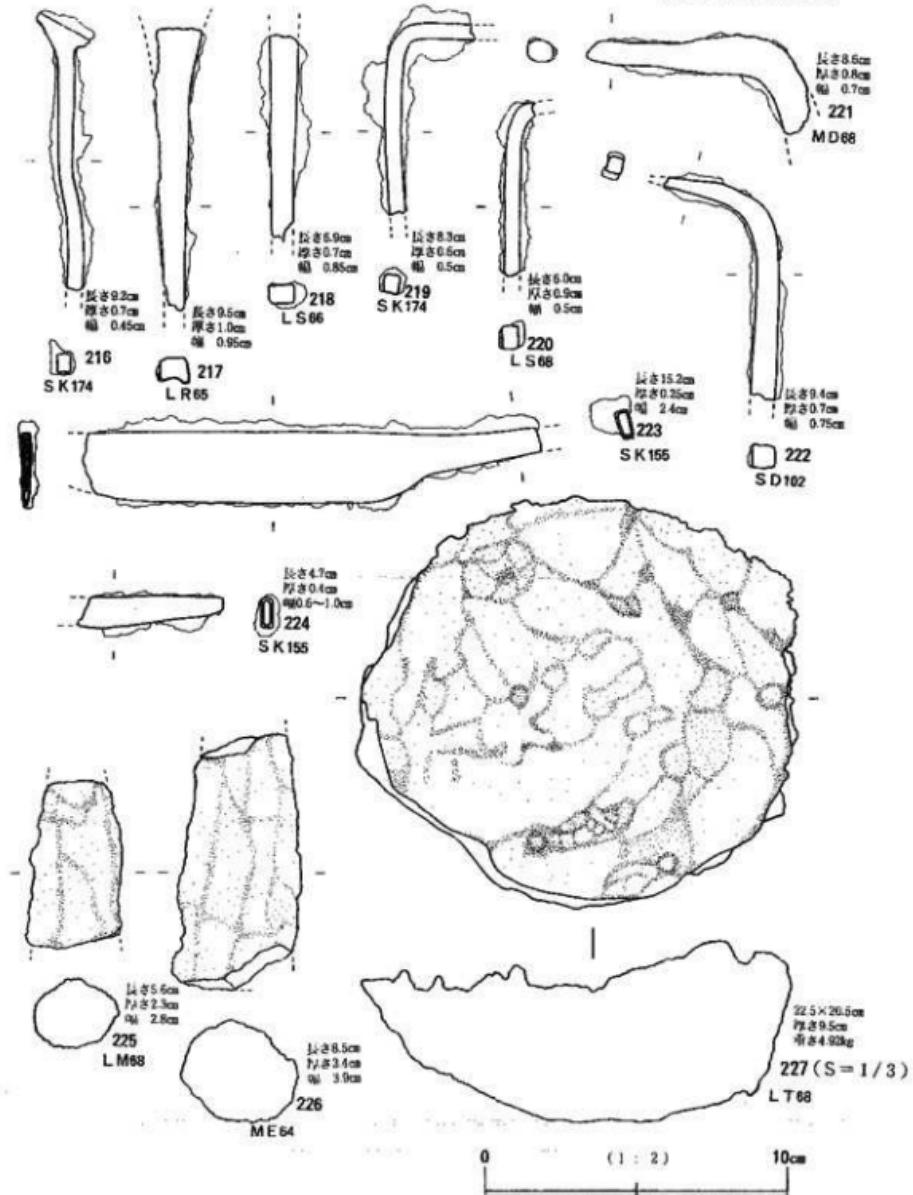


第40図 造構外出土遺物(5) —土師器・須恵器・繭羽口—



第41図 土師器把手付土器

第2節 造橋外川土の遺物



第42図 鉄製品・鉄滓・蓋羽口

第4表 S I 150 出土土器観察表

番号	出土地点	器種	寸法	底径	器高	底	土	施成	色	質	内	外	備考	目次
27-15	カマド	土器盃杯				底径 3cm~2.5cm の 少部分人	灰土	1.5YR10/4(赤褐色) 10YR8/4(赤褐色)	ロクロ	RPH8	62			
27-16	カマド	土器盃杯				底径 3cm~3cm の 少部分人	灰土	2.5YR10/4(赤褐色) 2.5YR8/2(赤褐色)	ロクロ	RPH8	63			
27-17	ピット3	土器盃杯 (13.6)				底径 3cm の砂利人	灰土	7.5Y10/7(赤褐色) 10YR8/3(赤褐色)	ロクロ	ピット3 理土一括 RPH2	61			
27-18	ピット3	土器盃杯 (7.4)				底径 3cm~2cm の 少部分人	灰土	10YR10/6(赤褐色) 10YR8/5(赤褐色)	ロクロ	ピット3 理土一括 RPH2	61			
27-19	理土 SDH102	土器盃杯 (14.8) (7.0)	4.5~ 5.5			底径 3cm~2cm の 少部分人	灰土	7.5YR10/6~7/5 7.5YR7/3(赤褐色)	ロクロ	HPI9 理土一括 SDH102 底面刷毛	62			
27-20	理土 カマド	土器盃杯				底径 3cm の砂利 少部分人	灰土	7.5YR10/6 10YR8/2(赤褐色)	ロクロ→ミガキ	RPH8 カマド一括	71			
27-21	カマド	土器盃杯 (13.6) 6.4	4.5			底径 3cm~2cm の 少部分人	灰土	10YR10/7(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	横ナード→ケズリ→ミガキ	RPH8 RPH9 ケズリ出し 底面刷毛	34			
27-22	理土	土器盃杯 (12.8) (7.2)	7.0~ 7.4			底径 3cm~3cm の 少部分人	灰土	5 YR10/6 5 YR8/6	横ナード→ケズリ→ミガキ ミガキ	RPH8 RPH9 ケズリ出し 底面刷毛	35			
27-23	カマド	土器盃杯				底径 3cm の砂利 少部分人	灰土	10YR10/7(赤褐色) 10YR8/3(赤褐色)	横ナード→ケズリ→ミガキ ミガキ	RPH8	64			
27-24	理土	土器盃杯				底径 3cm~2cm の 少部分人	灰土	10YR10/5(赤褐色) 10YR8/2(赤褐色)	ケズリ ミガキ	HPI9 底面ケズリ	36			
27-25	カマド	土器盃杯				底径 3cm~2cm の 少部分人	灰土	10YR10/4(赤褐色) 10YR8/2(赤褐色)	ロクロ	RPH8	75			
27-26	理土	土器盃杯				1cm~2cm の砂利 多部分人	灰土	7.5YR10/3(赤褐色) 7.5YR7/6(赤褐色)	ロクロ	HPI9 外周削物付着	66			
27-27	カマド	土器盃杯				底径 3cm~1cm の 少部分人	灰土	10YR10/7(赤褐色) 10YR8/3(赤褐色)	ロクロ	RPH8	77			
27-28	カマド	土器盃杯				底径 1cm の砂利 少部分人	灰土	7.5Y10/7(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	ロクロ	RPH8	77			
27-29	理土	土器盃杯				1cm~3cm の砂利 少部分人	灰土	10YR10/5(赤褐色) 10YR8/3(赤褐色)	横ナード→ケズリ	理土 1kg	78			
27-30	カマド	土器盃杯				1cm~2cm の砂利 多部分人	砂利	10YR10/8(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	横ナード	RPH8 小型	73			
27-31	カマド	土器盃杯				1cm~3cm の砂利 多部分人	良好	7.5Y10/6(赤褐色) 10YR8/2(赤褐色)	横ナード	カマド 1kg	65			
27-32	カマド	土器盃杯				1cm~3cm の砂利 多部分人	灰土	2.5YR10/6(赤褐色) 10YR8/3(赤褐色)	横ナード→ケズリ ヘラタード→磨ナダ	RPH7 小型	67			
27-33	理土	土器盃杯				底径 1cm~4cm の 砂利少部分人	灰土	7.5YR7/4(赤褐色) 2.5YR10/6(赤褐色)	ケズリ→横ナード ヘラタード→磨ナダ	RPH8 小型	69			
28-34	カマド	土器盃盤				底径 1cm~5cm の 少部分人	良好	10YR10/4(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	ケズリ→横ナード ヘラタード→磨ナダ	RPH8	74			
28-35	理土	土器盃盤				底径 1cm~2cm の 砂利少部分人	良好	7.5Y10/7(赤褐色) 10YR7/6(赤褐色)	横ナード→ケズリ ヘラタード→磨ナダ	RPH8 小型	66			
28-36	カマド	土器盃盤				底径 1cm~2cm の 砂利少部分人	良好	10YR10/4(赤褐色) 10YR8/3(赤褐色)	横ナード→ケズリ ヘラタード→磨ナダ	RPH8	78			
28-37	カマド	土器盃盤				底径 1cm~2cm の 砂利少部分人	良好	7.5YR7/4(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	横ナード→ケズリ ヘラタード→磨ナダ	HPS2, HPI7	79			
28-38	理土	土器盃盤				底径 1cm~5cm の 砂利少部分人	良好	7.5Y10/6(赤褐色) 10YR7/6(赤褐色)	横ナード→ケズリ ヘラタード→磨ナダ	RPH8	76			
28-39	カマド	土器盃盤 (19.6)				底径 1cm~5cm の 砂利少部分人	良好	10YR10/4(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	横ナード→ケズリ ヘラタード→磨ナダ	RPH8	80			
28-40	カマド	土器盃盤 (9.8)				底径 1cm~3cm の 砂利少部分人	良好	10YR10/4(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	ケズリ ヘラタード→磨ナダ	S1510~RP38 S1517~RP3.32(理土)	6			
28-41	カマド	土器盃盤 (9.8)				1cm~4cm の砂利 多部分人	良好	10YR10/3(赤褐色) 10YR8/5(赤褐色)	ケズリ ヘラタード	カマド 1kg 砂紙	19			
28-42	カマド	土器盃盤 12.8	7.5	14.7	1cm~2cm の砂利 多部分人	良好	2.5YR10/6 2.5YR8/6	オキナード→ケズリ ヘラタード→磨ナダ	RPH1, 33, 44, 58, 69, 73, 76, 80, 81, 82 SDH102 1kg	7				
28-43	カマド	土器盃盤	8.9			底径 1cm~3cm の 砂利少部分人	良好	5 YR10/7(赤褐色) 10YR8/4(赤褐色)	ケズリ ヘラタード	RPH8 外周削物付着	14			
28-44	カマド	土器盃盤	9.2			底径 1cm~4cm の 砂利少部分人	良好	10YR7/4(赤褐色) 10YR8/4(赤褐色)	ケズリ→ヘラナダ ヘラタード→磨ナダ	RPH8 外周削物付着	8			
28-45	カマド ピット3	土器盃盤 20.4				底径 1cm~3cm の 砂利少部分人	良好	10YR7/4(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	ケズリ→ヘラタード ヘラタード→磨ナダ	ピット3 理土 1kg	5			
28-46	カマド	土器盃盤 (19.6)				1cm~3cm の砂利 少部分人	良好	10YR10/4(赤褐色) 5 YR10/6	ケズリ→ヘラタード ヘラタード→磨ナダ	RPH7	35			
28-47	カマド SDH102	土器盃盤	9.2			1cm~5cm の砂利 少部分人	良好	7.5YR7/3(赤褐色) 10YR8/3(赤褐色)	ケズリ ヘラタード	HPI8, 16, 46, 70, 71, 72, 78, 85	12			
28-48	カマド ピット3	土器盃盤	9.8			底径 1cm~2cm の 砂利少部分人	良好	5 YR10/6(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	ケズリ ヘラタード	HPI8, 41, 43, 49, 63, 67 砂紙	2			
28-49	カマド SDH102	土器盃盤				底径 1cm~3cm の 砂利少部分人	良好	10YR7/4(赤褐色) 2.5YR10/6(赤褐色)	ケズリ ヘラタード	HPI8, 61 SDH102 1kg	4			
28-50	カマド ピット3	土器盃盤				1cm~3cm の砂利 少部分人	良好	7.5Y10/4(赤褐色) 7.5Y10/3(赤褐色)	ロクロ	HPI8 ピット3 理土 1kg	83			
28-51	理土	砂利土層				底径 1cm~2cm の 砂利少部分人	良好	7.5Y10/6(赤褐色) 7.5Y10/5(赤褐色)	2 と 1kg の砂利層に 隔離した状態で採取	理土 1kg	65			
28-52	理土	砂利土層				底径 1cm~2cm の 砂利少部分人	良好	10YR7/4(赤褐色) 10YR7/3(赤褐色)	百の目録又は 機械の收蔵	理土 1kg	72			

第5表 S I 151 出土器観察表

番号	出土地點	器種	口 径 cm	底 径 cm	高さ cm	胎 土	焼成	色	調 査	外 部	内 部	備 考	目録 番号
30-53	床面	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂混入	良好	5 YR5/4C-5L-4H 5 YR5/4C-5L-4H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	RPI 1			
30-54	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂混入	良好	2.5YV4/1B-4H 2.5YV4/1B-4H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	埋土一括			
30-55	床面	土鍋器皿				胎土: 細～3mmの砂混入	良好	7.5YR7/4C-5L-1H 10YR7/3C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	RPI 1			
30-56	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～3mmの砂混入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ→横ナメ	埋土一括			
30-57	カマド	土鍋器皿				2mm～7mmの小石 多量混入	良好	7.5YR7/4C-5L-1H 7.5YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ→横ナメ	RPI 19			
30-58	カマド	土鍋器皿				1mm～3mmの砂粒 混入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	RPI 15 RPI 16	陶質化 炭化物付		
30-59	カマド	土鍋器皿				2mm～7mmの砂粒 小石多量混入	良好	7.5YR7/1B-5L-1H 7.5YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	RPI 17 RPI 18	同上		
30-60	カマド	土鍋器皿				2mm～7mmの砂粒 小石多量混入	良好	5 YR5/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	RPI 15 RPI 16	同上		

第6表 S I 152 出土器観察表

番号	出土地點	器種	口 径 cm	底 径 cm	高さ cm	胎 土	焼成	色	調 査	外 部	内 部	備 考	目録 番号
31-42	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ロクロ ミガキ	埋土一括 削除手切り無剥離			
31-43	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	5 YR5/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ロクロ	埋土一括 削除手切り無剥離			
31-44	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	7.5YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ(横) ヘラナメ	埋土一括			
31-45	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	埋土一括			
31-46	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	埋土一括			
31-47	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	埋土一括 削除手切り無剥離			
31-48	埋土	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	埋土一括 削除手切り無剥離			
31-49	埋土	土鍋器皿				1mm～4mmの砂粒 小石混入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	RPI 5			
31-50	カマド	加熱器皿				1mm～2mmの砂粒 少量化入	良好	2.5YR7/1B-5L-1H 5 YR5/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	カマド 削除手切り無剥離			
31-51	カマド	加熱器皿				1mm～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	カマド 削除手切り無剥離			
31-52	カマド	加熱器皿				1mm～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	カマド 削除手切り無剥離			
31-53	カマド	加熱器皿				1mm～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	カマド 削除手切り無剥離			
31-54	カマド	加熱器皿				1mm～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	カマド 削除手切り無剥離			
31-55	カマド	加熱器皿				1mm～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ	カマド 削除手切り無剥離			

第7表 S I 157 出土器観察表

番号	出土地點	器種	口 径 cm	底 径 cm	高さ cm	胎 土	焼成	色	調 査	外 部	内 部	備 考	目録 番号
32-70	カマド	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 有小石混入	良好	2.5YR7/4C-5L-1H 5 YR5/4C-5L-1H	ロクロ ミガキ	カマド一括			
32-71	カマド	土鍋器皿	13.6～ 14.5	7.5	4.5～ 5.1	胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	7.5YR7/4C-5L-1H 5 YR5/4C-5L-1H	ロクロ	RPI 18, 19 内側剥離			
32-72	カマド	土鍋器皿	13.7	6.6	4.6～ 5.1	胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	2.5YR7/4C-5L-1H 5 YR5/4C-5L-1H	ケズリ→テラーラミガキ ミガキ	RPI 19, 20 内側剥離	ケズリ 焼成化物付		
32-73	カマド	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	2.5YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ロクロ	RPI 20, 21 内側剥離	焼成化物付 剥離		
32-74	カマド	土鍋器皿				胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 2.5YR7/4C-5L-1H	ロクロ	RPI 20, 21 内側剥離	剥離		
32-75	埋土	土鍋器皿	(13.3)		1mm～ 3mmの砂粒 小石混入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ナメ→ケズリ→ナメ ヘラナメ→横ナメ	RPI 3, 4 内側剥離	内側剥離	小石		
32-76	カマド	土鍋器皿				胎土: 細～3mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 5 YR5/4C-5L-1H	ロクロ→ケズリ ロクロ	RPI 20, 21 内側剥離	内側剥離		
32-77	カマド	土鍋器皿	(17.0)			胎土: 細～3mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 2.5YR7/4C-5L-1H	ロクロ	RPI 11, 12, 21 26と同	内側剥離		
32-78	カマド	土鍋器皿		10.1		胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	2.5YR7/4C-5L-1H 2.5YR7/4C-5L-1H	ケズリ ヘラナメ→ナメ→ヘラナメ	RPI 24 支脚			
32-79	埋土	土鍋器皿				1mm～2mmの砂粒 少量化入	良好	2.5YR7/4C-5L-1H 2.5YR7/4C-5L-1H	ロクロ	RPI 7, 8, 9			

第8表 S I 158 出土器観察表

番号	出土地點	器種	口 径 cm	底 径 cm	高さ cm	胎 土	焼成	色	調 査	外 部	内 部	備 考	目録 番号	
33-80	カマド	土鍋器皿	11.2	6.0	4.9～ 5.5	胎土: 細～2mmの砂粒 有小石混入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ロクロ→ヘラナメ ロクロ→ミガキ	内側剥離				
33-81	カマド	土鍋器皿	(14.2)	6.6	5.7	胎土: 細～2mmの砂粒 少量化入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ロクロ	RPI 8, 16 剥離手切り(右)				
33-82	カマド	土鍋器皿				1mm～3mmの砂粒 少量化入	良好	6 YR5/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	ロクロ	RPI 7, 16				
33-83	カマド	土鍋器皿				1mm～3mmの砂粒 少量化入	良好	2.5YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ	RPI 6				
33-84	埋土	土鍋器皿				1mm～5mmの砂粒 小石混入	良好	10YR7/4C-5L-1H 5 YR5/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ→横ナメ	RPI 6				
33-85	埋土	土鍋器皿	(14.2)	6.0	5.7	胎土: 細～4mmの砂粒 小石混入	良好	10YR7/4C-5L-1H 10YR7/4C-5L-1H	横ナメ→ケズリ ヘラナメ→横ナメ	RPI 2, 3, 4, 5 内側剥離化物付 内側剥離手切り(右)				

第9表 SD102 出土土器観察表

番号	出土地點	器種	LJ 径 cm	高 さ cm	器 高 さ cm	胎 土	焼成	色	調 査 外 内	調 査 外 内	指 標	指 標
34-87	MA58	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 7.5YR8/6D	ロクロ ミガキ			51
34-88	MA59	土器縁杯				胎土 2 mm の砂粒 若干混入	良好	2.5YR8/6D 褐色地底	ロクロ ミガキ			128
34-89	MA59	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の 砂粒混入	良好	7.5YR8/2B6E6H 10YR8/4C に近い模	焼付テーケズリ ハラナタケナダ	凸凹形を手前に調整		62
34-90	MA59	土器縁杯				1 mm~2 mm の砂粒 多量混入	良好	5YR8/6D 10YR8/4C に近い模	焼付テーケズリ ハラナタケナダ			27
34-91	MA59	土器縁杯				1 mm~3 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 7.5YR8/4C に近い模	焼付テーケズリ ハラナタケナダ→焼付			62
34-92	LG50	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の 砂粒混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 2.5YR8/6D	ロクロ			54
34-93	MA59	土器縁杯				1 mm~5 mm の砂粒 ・小量混入	良好	10YR8/4C に近い模 10YR8/4C に近い模	ケズリ ハケ模様	底面模様		41
34-94	MA59	土器縁杯				1 mm~3 mm の砂粒 若干混入	良好	2.5YR8/4C に近い模 2.5YR8/6D	ケズリ ハラナタ	底面模様		42
34-95	MA59	土器縁杯				胎土 2 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 7.5YR8/6D	ロクロ			60

第10表 平安時代の造構内 (SK・SN・ピット) 出土土器観察表

番号	出土地點	器種	LJ 径 cm	高 さ cm	器 高 さ cm	胎 土	焼成	色	調 査 外 内	調 査 外 内	指 標	指 標
35-96	SK166	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/6D 7.5YR8/6D	ケズリ ハラナタ	埋土一括		69
35-99	SK166	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 7.5YR8/4C に近い模	ケズリ ハラナタ	埋土一括		69
35-100	SK166	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 10YR8/6D	ロクロ	埋土一括		57
35-101	SK159	土器縁杯				胎土 2 mm~3 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 7.5YR8/4C に近い模	ケズリ ハラナタ	埋土一括		68
35-102	SK175	土器縁杯	13.4	5.2	5.3	胎土 1 mm~2 mm の砂粒 少量混入	良好	10YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ ミガキ	凹凸模様(右) 底面模様		17
35-103	SK176	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/6D 10YR8/4C に近い模	ケズリ ナダ	小判形外共丁寧な調査		56

第11表 造構外出土土器観察表

番号	出土地點	器種	LJ 径 cm	高 さ cm	器 高 さ cm	胎 土	焼成	色	調 査 外 内	調 査 外 内	指 標	指 標
39-170	SK166 裏面	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の砂粒 若干混入	良好	10YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ ミガキ			99
39-171	MCT74 裏面	土器縁杯	(13.4)	(5.2)	5.4	胎土 1 mm~2 mm の 砂粒少量混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ→ケズリ ミガキ	凹凸模様に硬化物付着		31
39-172	LN69 三脚	土器縁杯				胎土 2 mm~4 mm の 小量少量混入	良好	10YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ ミガキ			104
39-173	LR63 裏面上面	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 若干混入	良好	10YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ ミガキ			103
39-174	LR64 裏面上面	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 若干混入	良好	10YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ ミガキ			101
39-175	LR63 裏面上面	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の 砂粒混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ ミガキ			106
39-176	LR68 裏面上面	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 若干混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ ミガキ			102
39-177	LR62 裏面上面	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 若干混入	良好	10YR8/4C に近い模 原色底	ロクロ→ミガキ			106
39-178	LT-1, LN63 1脚	土器縁杯	(13.6)	(5.4)	5.6	胎土 1 mm~2 mm の砂粒 若干混入	良好	10YR8/4C に近い模 10YR8/4C に近い模	ロクロ	凹凸模切り(右) 底面模底石→ケズリ		25
39-179	LN63 1脚	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の砂粒 少量混入	良好	8 YR8/6D 7.5YR8/6D	ロクロ	凹凸模切り(右)		124
39-180	MCT63 2脚	土器縁杯				胎土 1 mm~2 mm の 砂粒混入	良好	10YR8/4C に近い模 7.5YR8/6D	ロクロ	凹凸模切り(右)		126
39-181	LG-1, LG70 1脚	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 若干混入	良好	10YR8/4C に近い模 10YR8/4C に近い模	ロクロ	凹凸模切り(右)		125
39-182	MCT73 1脚	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 若干混入	良好	2.5YR8/3H 2.5YR8/3H	ロクロ	凹凸模切り(右)		126
39-183	LG63 裏面上面	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 少量混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 10YR8/4C に近い模	焼付テーケズリ ハラナタ			108
39-184	MCT65 1脚	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 多量混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 7.5YR8/6D	ケズリ→ナダ ナダ	口内底内側からの 折り返し		115
39-185	A-Tレンチ 土器縁杯					胎土 1 mm の砂粒 少量混入	良好	2.5YR8/3H 2.5YR8/3H	焼付テーケズリ ナダ			111
39-186	LM68 1脚	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 少量混入	良好	10YR8/4C に近い模 10YR8/4C に近い模	ロクロ→ハラナタ ロクロ			109
39-187	LG63 1~2脚	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 少量混入	良好	7.5YR8/4C に近い模 10YR8/4C に近い模	ロクロ→ケズリ ロクロ	内側底色剥離の可能性 あり		107
39-188	LG64 裏面上面	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 少量混入	良好	10YR8/4C に近い模 7.5YR8/6D	焼付テーケズリ ナダ			118
39-189	MCT72 1脚	土器縁杯				胎土 1 mm の砂粒 少量混入	良好	7.5YR8/3H 7.5YR8/4C に近い模	焼付テーケズリ ナダ			115

## 第2節 道構出土の遺物

40-195	L208 1層	土器破片			直径1m~3mの 砂質粘土	良好	18Y17/7/3に高い質感 18Y18/4/5の質感	ヘラナテー <sup>ケズリ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>		119
40-191	LQ+LX70 1層	土器破片			1m~2mの砂質 粘土	良好	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	ケズリー <sup>横ナゲ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	陶土に鉄錆記入	114
40-192	L708 1層	土器破片			1m~2mの砂質 粘土	普通	18Y18/4/5の質感 18Y17/4/5の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	陶土に鉄錆記入 内部表面に凹凸の凹り	112
40-189	MU38 1層	土器破片	10.1~ 16.5	0.6~ 0.5	直径1m~2mの 砂質粘土	良好	5 Y27/4/5の質感 18Y17/4/5の質感	ケズリー <sup>横ナゲ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	凹凸ケズリ	22
40-194	MU38 底付	土器破片	8.3	5.4	直径1m~4mの 砂質粘土	良好	18Y18/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	ケズリー <sup>横ナゲ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	RP 2	23
40-195	Aトレンチ 土器破片				直径1mの砂質 少粘土	良好	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	山岡部ケズリ 非常に発達	113
40-196	M198 底付	土器破片			1m~2mの砂質 粘土	良好	5 Y27/4/5の質感 18Y17/4/5の質感	ケズリー <sup>横ナゲ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>		117
40-197	M198 底付	土器破片			直径1m~2mの 砂質少粘土	良好	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	凹凸ナフ 小形の把手土器	129
40-198	MG66 1層	土器破片	6.8		直径1m~2mの 砂質粘土	良好	5 YH2/2/5の質感 2.5Y5/6の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	凹凸ケズリ→ミガキ	23
40-200	L584 頂部上部	土器破片			1mの砂質 石子混入	良好	2.5Y8/1/5の質感 2.5Y8/1/5の質感	ケズリー <sup>横ナゲ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>		121
40-201	M198 底付	土器破片			1mの砂質 粘土	普通	5 Y27/4/5の質感 18Y17/4/5の質感		265と同一個体	110
40-202	LQ66 1層	土器破片			1mの砂質 石子混入	良好	2.5Y5/1/5の質感 2.5Y5/1/5の質感			120
40-203	M1398 1層	土器破片			1mの砂質 粘土	普通	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感		261と同一個体	122
40-204	L574 底付	土器破片			1mの砂質 石子混入	良好	18Y14/1/5の質感 18Y14/1/5の質感			87
40-205	L708 底付	土器破片			1mの砂質 少粘土	良好	18Y18/4/5の質感 18Y18/4/5の質感			85
40-206	M198 1層	土器破片			1mの砂質 石子混入	良好	18Y18/4/5の質感 18Y18/4/5の質感			75
40-207	TJ49 1層	土器破片			1mの砂質 石子混入	良好	18Y18/4/5の質感 18Y14/1/5の質感			73
40-208	L708 1層	土器破片			1mの砂質 石子混入	良好	18Y18/4/5の質感 18Y18/4/5の質感			80
40-209	MCG2+53 M198	土器破片			1mの砂質 石子混入	良好	18Y18/4/5の質感 18Y18/4/5の質感		MC-2類 MC-3類	90

第12表 土器把手手土器観察表

番号	出土地點	位	II 種 別	III 種 別	器 高 さ	助 上	底成	色 調	内 面 調	外 面 調	備 考		
41-210	M198 底付	把手部			1m~2mの砂質 粘土		良好	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup>		M198 23と同一個体		
41-211	L191 頂部上	把手~ 底付			1m~ 2.1		良好	5 YH8/1/5の質感 18Y17/4/5の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup> →まチエ	長い突起、 周囲に凹凸を有する	28		
41-212	MG66 底付	把手~ 底付			1m~ 2.9		良好	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	把手部、底部に凹凸 23と同一個体	26		
41-213	MCG9 底付	把手~ 底付			7.5	5.4	6.9~ 7.4	1m~ 2mの砂質 粘土	良好	18Y14/1/5の質感 18Y18/4/5の質感	把手 ケズリー <sup>横ナゲ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	把手 ケズリ	24
41-214	M198 2.2ト3	把手~ 底付	9.2	3.3	5.5~ 6.5		良好	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	把手 ケズリー <sup>横ナゲ</sup> ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	把手ケズリ 把手の側面に凹凸を有する	22		
41-215	L588 2.2ト5	把手~ 底付	10.0	5.8	12.3		良好	5 Y27/4/5の質感 18Y18/4/5の質感	ケズリ ヘラナテー <sup>トナダ</sup>	内部焼化物付着	16		

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 火山灰分析

太田谷地館跡出土火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻 利一

#### 1)はじめに

東北地方北部の平安時代後期の遺跡からは2種類の火山灰が出土する。これらの火山灰は蛍光X線分析法では容易に相互識別されるが、風化のため、色調は異なっており、外見上の識別はかなり難しいものと思われる。

蛍光X線分析(第46図)によると、一方の火山灰にはK、Rb量が多く、Ca、Sr量がより少ない。他方は逆にK、Rb量が少なく、Ca、Sr量が多い火山灰である。そして、両方の火山灰が同一遺跡から出土する場合には、必ず前者は上位にあり、後者は下位にあることが確認されている。

最近、北朝鮮と中国の国境にある白頭山山頂のバミスと溶結凝灰岩のX線分析のデータが出されたが、その化学特性は前者の火山灰の化学特性と一致した。すなわち、前者は白頭山火山灰と考えられる。一方、後者は十和田湖を中心とした東北地方北部地域に堆積する十和田系火山灰に対応する化学特性をもつことが明らかになった。すなわち、後者は十和田a火山灰である。

既に、筆者の手元には青森県、秋田県北部、岩手県北部の平安時代後期の遺跡から出土した300点ほどの火山灰の分析データが集積されているが、この結果を活用すれば、これらの地域から出土する須恵器の編年の研究に役立つものと考えられる。このような視点から、太田谷地館跡から出土した火山灰を分析した結果について報告する。

#### 2)分析結果

第43図には太田谷地館跡出土火山灰のRb-Sr分布図を示す。この分布図で白頭山火山灰と十和田系火山灰の特性を明確に識別することができる。これまでに得られた分析データに基づいて白頭山領域と十和田系火山灰領域を示してある。火山灰自身のもつ不均一性のためか、あるいは、長年にわたって遺跡に埋没中におこる風化や周辺の土壤による汚染のせいで分析値は

かなりばらつく。このように広い分布領域をとらなければならないのもこのためである。第43図より、No1、2の火山灰は両方とも白頭山領域に分布し、白頭山火山灰である可能性を示す。

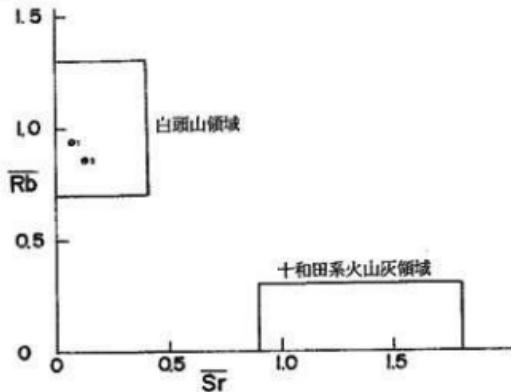
第44図にはK-Ca分布図を示す。この分布図でも白頭山火山灰と十和田系火山灰とは明確に識別される。この分布図でも、No1、2の火山灰は白頭山領域に分布することがわかる。この分布図でもNo1、2は白頭山火山灰である可能性を示した。

第45図にはFe因子を対比してある。この分布図でも、No1、2は白頭山領域によく対応することがわかった。

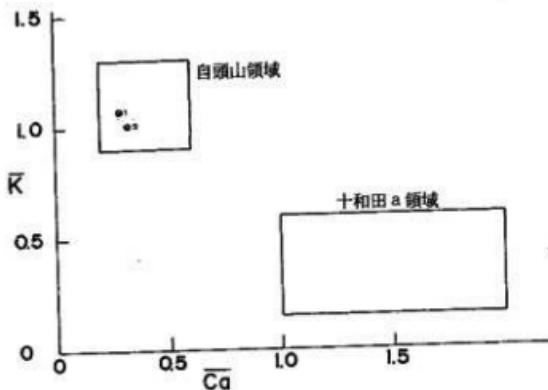
以上の結果、No1、2は全因子で白頭山火山灰によく対応することが明らかになった。

十和田系火山灰と比較して、白頭山火山灰がもつもう一つの特異的な特徴はZr（ジルコニウム）の含有量が多いということである。第46図にはNo1の火山灰と十和田系火山灰の蛍光X線スペクトルを比較してある。No1には明らかにZr量が著しく多いことが分かる。No2もNo1と類似した蛍光X線スペクトルを与えた。こうして、Zr因子からでもNo1、2は十和田系火山灰ではなく、白頭山火山灰であることが確認された。

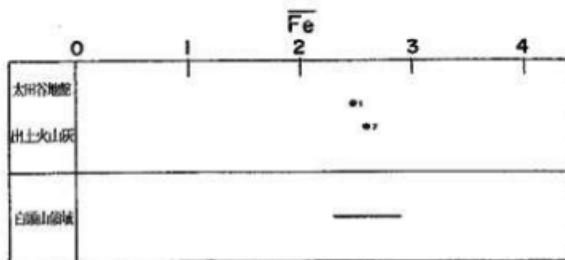
No1、2の分析結果を表13にまとめておく。分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で表示してある。



第43図 太田谷地館跡出土火山灰のRb—Sr分布図

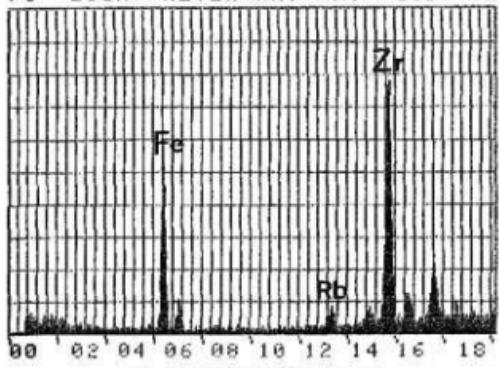


第44図 太田谷地館出土火山灰のK—Ca分布図



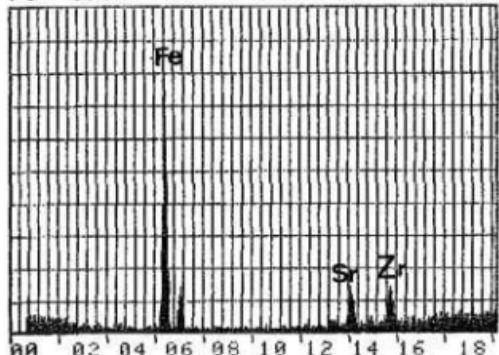
第45図 太田谷地館跡出土火山灰のFe量

oooooooooooooooooooooooooooooooooooo  
 FS = 200K KEVEX-RAY HS = 20EV/CH



a) No. 1の螢光X線スペクトル

oooooooooooooooooooooooooooooooooooo  
 FS = 200K KEVEX-RAY HS = 20EV/CH



b) 十和田系火山灰の螢光X線スペクトル

第46図 火山灰の螢光X線スペクトル

試料番号	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	判定
1	1 OTYT SI157 窓穴住居跡の埋土	1.07	0.294	2.47	0.940	0.069	白頭山火山灰
2	1 OTYT SI158 窓穴住居跡の埋土	1.01	0.324	2.60	0.862	0.128	白頭山火山灰

(分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値)

第13表 火山灰の分析結果

## 第6章 まとめ

今回の第2次発掘調査の結果、縄文時代の土坑6基、弥生時代の土坑2基、焼土遺構1基、柱穴様ピット1、平安時代の竪穴住居跡5軒、土坑8基、焼土遺構1基、空堀跡1条、柱穴様ピット5、その他の遺構1基の他、時代不明の遺構として、土坑2基、焼土遺構2基、柱穴様ピットを検出し、柱穴様ピットを除いた遺構数は計29である。出土遺物は縄文時代、弥生時代の土器、平安時代の土師器、須恵器や鉄製品、土製品などが出土したが、平安時代の土器が主体を占める。以下、検出した遺構と出土した遺物について、若干の整理と問題点の指摘をしてまとめてかえたい。

### 1. 縄文時代の土坑について(第47図)

検出した土坑6基は調査区内に点在しており、このうち、SK164・168・169の3基は底面中央にピットが1箇所あり、平面形は円形で、断面形は円筒形に近いがやや上に開くという同じ形態を示し、SK177は底面にピットはないものの形態は似る。規模は坑口部径は1.27～1.62m、深さが1.30～2.18mで径はやや近い数値だが深さにはばらつきがある。これは検出面の違いと思われ、例えばSK164のように基本層位の第IV層上面から検出した場合と、SK169のように第5層で検出した場合は、当然深さが違ってくるので、それを差し引いて考えれば規模・形態ともほぼ似た数値を示すといえる。SK164の土壠断面観察によれば、底面のピットは上端が24cmで中央に幅12cmの棒状の痕跡が認められるが、これは底面に穴を掘り、杭を立て、それを埋めて固定したと考えられる。これらは狩猟に使われた陥し穴と考えられており、最近、県内でも調査事例が増えている。この縄文時代の6基の土坑はいずれも出土遺物がなく、時期を決定できないが、遺構外から出土している縄文土器が前期・後期のものであることから、いずれかの時期に属する可能性が高いと考えられる。

### 2. 平安時代の土器について(第48図)

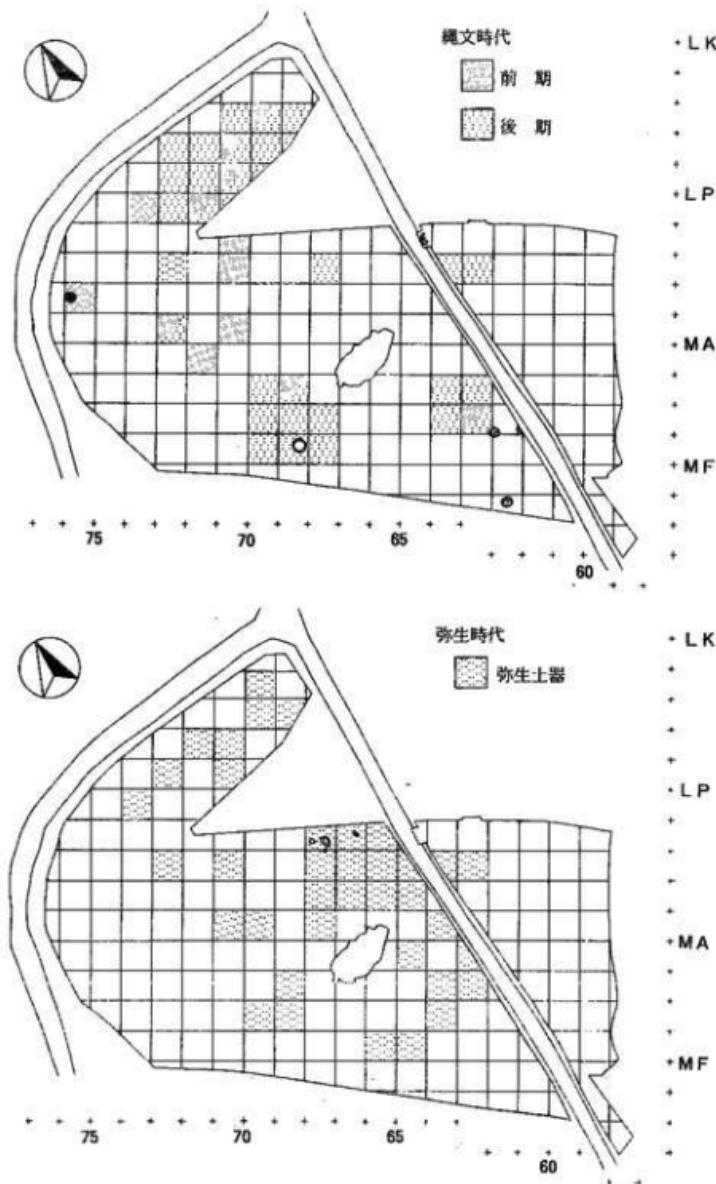
今回出土した土器は、土師器、須恵器、土師器把手付土器である。このうち土師器が主体を占め、器種には碗・杯・甕・壺がある。甕はロクロ成形で、杯・碗・甕はロクロ成形と非ロクロ成形とがある。杯はロクロ成形のものは全て底部の切り離しが回転糸切りで、これには二次調整のないものと、二次調整を施すものがある。二次調整を施すものには①内面が黒色処理で外面ケズリのもの、②内外面とも黒色処理を施すものがある。二次調整のないものには、SI150で出土している厚手の土器とSI157・158で出土している薄手で洗練された感じの土器がある。次に非ロクロ成形のものは①外面にナデ・ケズリ・ミガキ・内面ミガキのものがあり、

粘土縁の輪積痕を残すものもある。椀は①ロクロ成形で二次調整のないもの②非ロクロで杯の非ロクロ成形の①と同技法のものに分かれる。土師器壺はロクロと非ロクロ成形がある。非ロクロのものはいずれも外面に横ナデといわゆる「ナタケズリ」と呼ばれる粗いケズリを施すもので、内面はナデを施す。この土器の底部には砂粒が付着している、いわゆる砂底も数少ないながらもあり、中にはごくまれながら鉄滓と思われる粒子を胎土に含ませるものもある。ロクロ成形のものでも外面にはヘラケズリを施す。いずれの土器も口縁部が波打っており、その形態は一様ではないが、S I 150出土土器の口縁部の器形は非ロクロ成形の場合、大別すると①内傾しながら直線的に立ち上がり、口頸部で「く」字状に外反するもの②直線的に立ち上がり口頸部が①よりもゆるく「く」の字状に外反するもの、③外傾して直線的にそのまま立ち上がり、口縁部で肥厚するもの、④外傾しながら立ち上がり、口頸部が緩く「く」の字状に外反するものなどがある。これらの中に大小の土器があるが、成形・調整技法は同じである。土師器壺は数が大変少ないと、ロクロ成形によるものである。

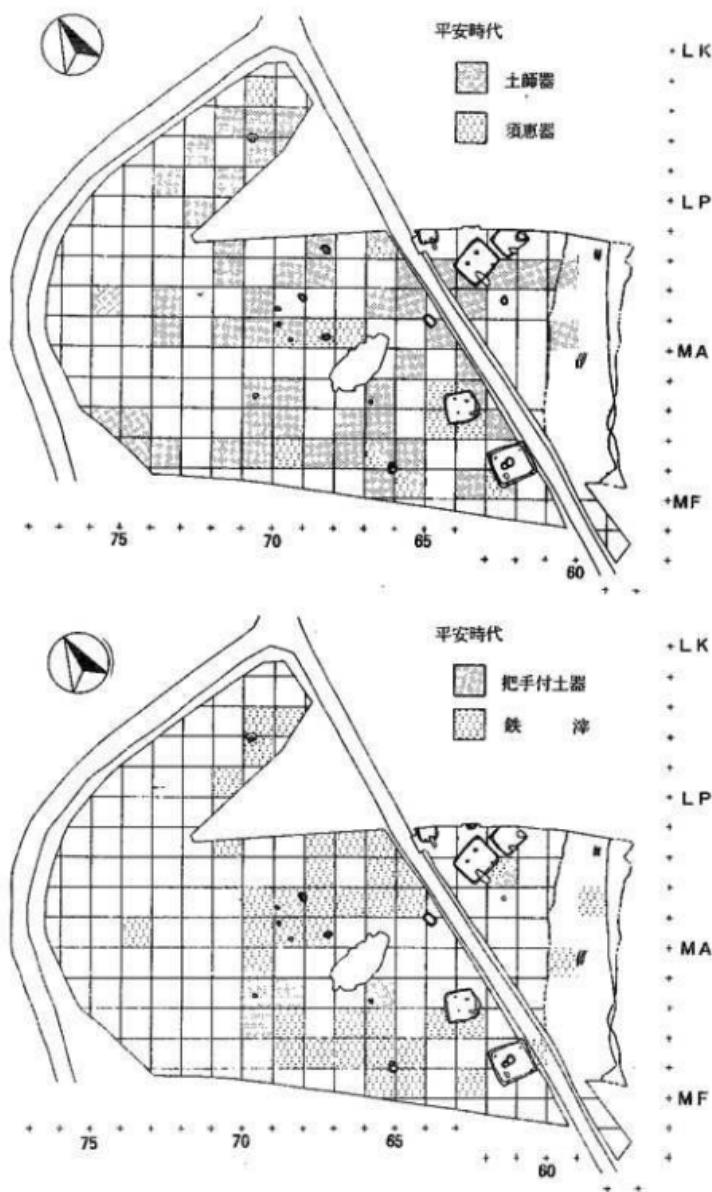
土師器把手付土器は6点(第41図)出土した。小型と中型のものがあり、211~214は小型である。その中で211~214は底部下端から胴部下半にかけて内窓しながら立ち上がるもので、214は口縁部が内傾する。212~213は底部下端から胴部下半にかけて直線的でそのまま口縁部までまっすぐ立ち上がり、213は口唇部が薄くなる。215は中型のもので、器形は211~214と似る。これらの土器は外面にヘラケズリやナデ、内面にナデや指オサエを施すもので、内外面の調整は壺と同じといえる。210は把手で212と同一個体である。210はその形状から本体への装着状況がよくわかるもので、それによれば、最初土器本体に穴を開けてそこに把手を差し込み、内外から粘土で補強したものである。把手に中空のものはない。

堅穴住居跡からは遺物全体の総量からすれば比較的多くの遺物が出土したといえる。S I 151~152~158は遺物が少なく、その出土状況から流入したものと考えられるため、それ以外の堅穴住居跡から出土した土器について、大まかに器種構成とその比率を述べてみたい。

S I 150堅穴住居跡から出土した遺物はカマドとそれに隣接する北東部分から集中して出土し、土器破片の総点数は100点を超える。そのうち図示できた土器は35点で、器種は土師器杯・椀・壺と須恵器壺である。その比率は土師器の杯7(20%)、椀3(8%)で計10(28%)、壺25(71%)、須恵器壺(ロクロ成形)1(1%)である。このうちロクロ成形は9(26%)で、その内訳は杯4(44%)、椀1(12%)、壺4(44%)で、非ロクロ26(74%)である。こうしてみると、土師器の杯・椀が全体の約1/3で、壺が約2/3を占め、そのうちロクロ成形が約1/4である。さらに、S I 150の遺構説明で想定した転用・遺棄・流入・廃棄のうち、住居跡構築時と同じく廃棄されるまで使っていったと考えられる転用・遺棄に該当する土器は16点で、内訳はロクロ使用土器4点(25%)、非ロクロ12点(75%)である。



第47図 時代別遺構・遺物分布図(1)



第48図 時代別遺構・遺物分布図(2)

S I 157の場合は5層(白頭山火山灰)下から全部で35点出土した。内訳は土師器32点(91%)、須恵器3点(9%)で、土師器は、杯・壺9点(28%)、甕23(72%)である。このうち土師器はロクロ使用土器11点(34%)、非ロクロ21点(66%)である。こうしてみると、杯・壺が全体の約13%、甕が約2/3を占め、そのうち、ロクロ成形が約1/3、非ロクロが2/3である。転用・遺棄としたものは7点でロクロ使用土器は3点(43%)、非ロクロ4点(57%)である。

以上の両者の数値を比較してみると、土師器の器種毎の比率は、甕が約2/3を占める点では同じであるが、ロクロ使用土器の比率ではS I 157が高い。また、転用・遺棄と想定した場合のロクロ使用土器の比率はS I 150が1/4で、S I 157が1/3を占め、S I 157の比率がこれでも高いことがわかる。非ロクロとロクロ使用の場合、技法的には非ロクロの方が一般的に古いとされている。したがってS I 157はS I 150よりも新しい土器の傾向を示しているといえる。また、ロクロ使用の土師器杯をみた場合、S I 150の第27図19は器肉が厚く底部下端から緩やかに丸味をもって立ち上がり、非ロクロ成形と似ているのに対し、S I 157の第32図71は器肉が薄く、底部下端から緩く立上がり、体部上半では直線的に口縁部にいたるもので、洗練された感じのする土器である。これはS I 158の第33図81の土器についてもいえる。このことは上記の傾向を傍証する1つの証左となりうるかもしれない。

### 3 平安時代の遺構について（第48図）

#### (1) 穴住居跡

検出された5軒の穴住居跡の規模をみると大きく2つに分けることができる。①一辺が3.95~4.95mで、床面積が14~20m<sup>2</sup>—S I 150・151・152—②一辺が1.36~3.70m(推定値を含む)で床面積4~12m<sup>2</sup>(推定値を含む)—S I 157・158となる。

カマドの位置は、S I 150・151・157は南壁南西隅にあり、158は南壁北東隅に、S I 152は東壁北東隅に付設されている。つまり、①の中ではS I 150・151が同じ場所にあり、②ではいずれも同じ壁側にあるという点で共通する。

次に柱穴配置をみてみると、①の中では、S I 151・152は基本的に4本の柱穴配置であることがうかがえる。S I 150は8本検出し、3コーナーにはあるが北壁北西隅に柱穴がなく、中央部北壁寄りに2本、南壁に取り付く3本があり、P 3・P 4・P 7・P 8の4本が主柱穴と思われる。②はいずれも一部が調査区外で正確を期しがたいが、検出した柱穴位置から推定すると、S I 157は壁の各コーナーに4本あり、さらに西壁の中央部寄りに2本あることから東壁中央部寄りに相対する2本が配置されていたものと考えられ、計8本と推定される。S I 158は南壁のコーナーかコーナー寄りに2本あり、4本の柱穴配置と考えられる。以上のことから、S I 150はS I 157と同じで、S I 151・S I 152・S I 158は同じ柱穴配置と思われ、①と②のそれぞれの中で配置が異なる。つまり、規模の大小は柱穴配置と相關関係がないことがわかる。

次にそれぞれの新旧関係について考えてみる。S I 150・S I 151・S I 158は平面プランや土層断面から第II層大湯浮石(十和田a火山灰)が降下した後に構築されている。S I 157・S I 158は焼失家屋で、焼失後ほどなく、白頭山・苦小牧火山灰が降下堆積しており、両住居跡とも主軸方向がほぼ一致しているので同時存在としてよいものである。したがって両住居跡とも大湯浮石の降下後に構築され、白頭山・苦小牧火山灰が降下する以前に焼失したものとができる。ところで、S I 150・S I 151の廃絶時期については、白頭山・苦小牧火山灰の降下前後のどちらかに想定できるが、S I 150とS I 157の埋土及び出土土器を比較した場合、前述のようにS I 150のほうが古い様相を呈すると考えられる。したがってS I 150・S I 151(古)→S I 157・S I 158(新)というようになる。S I 152については、S I 151と比較した場合柱穴配置は同じで、カマドの検出・土器の出土状況などが似ていることを勘案すれば、S I 150・S I 151と同じ時期に構築されたと考えてよいのかも知れない。

以上のことまとめると、5軒の住居跡とも大湯浮石降下後に構築されているが、S I 150・S I 151・S I 152が最初に作られ廃絶した後、S I 157・S I 158が構築され、廃絶後にはほどなく白頭山・苦小牧火山灰が降下した、というふうに考えられる。

## (2) 土坑、その他の遺構

鉄滓と土師器把手付土器の出土分布を見てみると(第48図)、調査区の中央部、北東部、南西部、つまり62~71グリッドラインの間に集中する傾向にある。この区域内には、前記の遺物の他に鉄製品を出土した遺構が分布している。中央部に位置するSK174は不整梢円形を呈するもので、中から鉄製の釘・鎌や少量ながら鉄滓が出土している。SK174が位置するLS68グリッドからも疑かと思われる鉄製品が1点出土している。隣接する梢円形を呈するSX176からも小さな鉄滓が出土しており、いずれにも埋土に炭化物や小礫が混入している。また、遺構外のLT68グリッドからは楕円形滓が2点出土し、SK174と同じグリッドのピット5からは把手付土器第41図の215が出土している。把手部の反対側は口縁部が故意に欠かれ、二次焼成痕、が残り内部に煤状炭化物が付着する。

(註2)

把手付土器は秋田県内では下沢田遺跡など、今のところ鹿角地方に出土が限られている。  
(註3)  
また青森県の古館遺跡などでもその出土例が知られており、これらの土器は「火を使う仕事に使われた道具」と推定されている。SK174・SX176やその周辺では、前述のように鉄滓や把手付土器などが出土しており、鉄釘や鎌などの出土とあわせて考えると、鍛冶作業を行っていた可能性があり、把手付土器はその作業に使われたと推定できる。さらにその作業を行う場合は屋外とは考え難いので、中央部周辺に群在する柱穴様ピットは、作業小屋(工房跡)の痕跡としてとらえることができそうである。なお、SK175は埋土に炭化物を含み、埋土の状況からSX176と類似した遺構と思われる。他に、遺物では鉄滓粒と思われるものを土師器甕の

(注5)  
胎土に混入させているものが2点(第40図191・192)出土している。

#### 4. 火山灰について

今回の調査では、S I 157竪穴住居跡・S I 158竪穴住居跡内から降下火山灰が検出された。三辻利一氏の分析により、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)と中国の国境にある白頭山を噴出源とする白頭山・苦小牧火山灰であることが判明した。本火山灰は、秋田県内では能代市上ノ山II遺跡を南限とし、八森町土井遺跡<sup>(註6)</sup>でも検出されている。鹿角地方には、十和田火山を噴出源とする大湯浮石(十和田a火山灰)<sup>(註7)</sup>が分布しており、その年代は10世紀前半頃と推定されつつある。今回検出された白頭山・苦小牧火山灰は、竪穴住居跡5軒のうち、S I 157竪穴住居跡・S I 158竪穴住居跡の焼失後に、降下・堆積したことが明らかになった。

#### 5 おわりに

米代川左岸の鳥越段丘上に位置する太田谷地館跡は、昭和62年の第1次で舌状台地部が調査され、平安時代の竪穴住居跡51棟、土坑73基、空堀3条など多数の遺構が検出され、遺物は土師器壺・把手付土器・小型手捏ね土器・須恵器・鞆羽口・鉄製品などが出土した由縁の全く伝わらない「集落保塞的」館で、その年代は、土師器・須恵器には杯が存在せず、須恵器が平安時代末葉の様相を呈し、中世陶器が出土しないことなどから平安時代末葉とされた。

今回の調査では竪穴住居跡から出土した土器の器種構成やその比率からすれば、土師器杯が供伴し、土師器碗・壺を含めると1/3を占める。さらに、非ロクロ成形の土器は2/3~3/4と高い比率を示す。このことは、今回出土の土器は第1次調査よりも相対的に古い土器の様相を呈しているといえる。

さらに、今回の調査は台地付け根部の北西側を調査し、遺構は平安時代を主体として検出された。調査区中央部で、把手付土器・鉄製品・鉄滓を出土した遺構は、自然科学的分析をもって結論されるべきことではあるが、製鉄に関する工房跡の可能性がある。第1次調査では、竪穴住居跡から鍛冶炉が検出され、把手付土器、鉄滓、鞆羽口、鉄製品が遺構内から出土している。当遺跡の第1次調査報告書中の指摘のように「製鉄品の生産・修理を行い得る設備・技術<sup>(註8)</sup>をもっていた」工人集団が存在していた、いう事が今回の調査でもうかがわれ、これらのことと、鹿角市堆忍沢遺跡の10世紀中葉~末葉とされる製鉄炉13基の存在と考えあわせてみることは鉄の生産・供給・消費を探るうえで大変興味深いことである。

竪穴住居跡5軒はいずれも大湯浮石(十和田a火山灰)降下後に構築され、2軒には白頭山火・苦小牧山灰が堆積していたことは前述したとおりである。このことは火山灰を鍵層として遺構・遺物の年代を推定できるということであり、鹿角地方のみならず、全県的にも歴史を研究する上で貴重な資料である。

- 註1 漢川司男 「陥し穴状遺構について」『紀要』I (財)岩手県埋蔵文化財センター  
1981 (昭和56年)  
今村啓彌 「陥穴(おとし穴)」『縄文文化の研究』2 生業 雄山閣 1983 (昭和54年)  
田村莊一 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』I (財)岩手県埋蔵文化振興事業  
団埋蔵文化財センター 1987 (昭和62年)
- 註2 下沢田遺跡発掘調査報告書中では把手付土器について「鍛冶施設及びその作業に使用される  
道具」と考えられている。青森県では古館遺跡・砂沢平遺跡・蓮田大館遺跡他などから出土  
している。  
秋田県鹿角市教育委員会『花輪館跡発掘調査報告書・下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市  
文化財調査資料27 1984 (昭和59年)  
秋田県鹿角市教育委員会『高市向館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査報告書22  
1982 (昭和57年)  
秋田県教育委員会『妻の神I遺跡』『東北縱貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財  
調査報告書第107集 1984 (昭和59年)  
秋田県教育委員会『はりま館遺跡』『東北縱貫自動車道発掘調査報告書X』秋田県文化財  
調査報告書第109集 1984 (昭和59年)
- 註3 青森県教育委員会『碇ヶ岡古館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第54集  
1979 (昭和54年)  
青森県教育委員会『砂沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第53集 1979 (昭和54年)  
櫻井清彦・菊地徹夫『蓮田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究報告 1987 (昭和62年)
- 註4 青森県教育委員会『碇ヶ岡古館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第54集  
1979 (昭和54年)
- 註5 数は少ないが、第1次調査でも土師器裏の胎土中に鉄滓と思われる粒を混入させている例が  
あり、「もしこれが鉄滓であるとすれば、土器作りする場に鉄滓があり、その細かい破片を  
意識的に土器胎土に混入させたと考えることができ、このことは鉄を扱う人々が土器作りを  
もしたことの傍証になるかもしれない」としている。  
秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ—太田谷地  
館跡—』秋田県文化財調査報告書第172集 1988 (昭和63年)
- 註6 秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第  
114集 1984 (昭和59年)  
秋田県教育委員会『上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第137  
集 1986 (昭和61年)
- 註7 秋田県教育委員会『土井遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第111集  
1984 (昭和59年)
- 註8 註5と同じ

註9 註5と同じ

上記の報文によれば「S I 11号穴住居跡の遺構A・B・C」を昭治遺構としている。

註10 秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書I－堪忍沢遺跡－』秋田県文化財調査報告書第152集 1987（昭和62年）

圖版一



太田谷地附近航空写真 (北△)

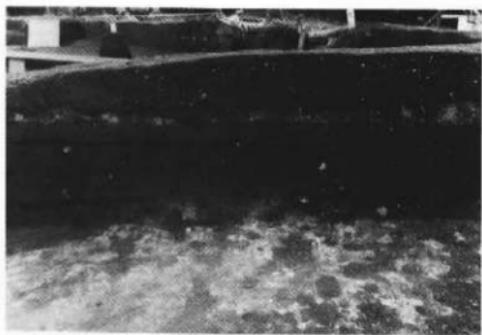
1988年12月撮影



1. 調査前 (北東▷)



2. 調査後 (南西▷)



1. 遺跡基本層位 MD61グリッド 東壁 (北▷)



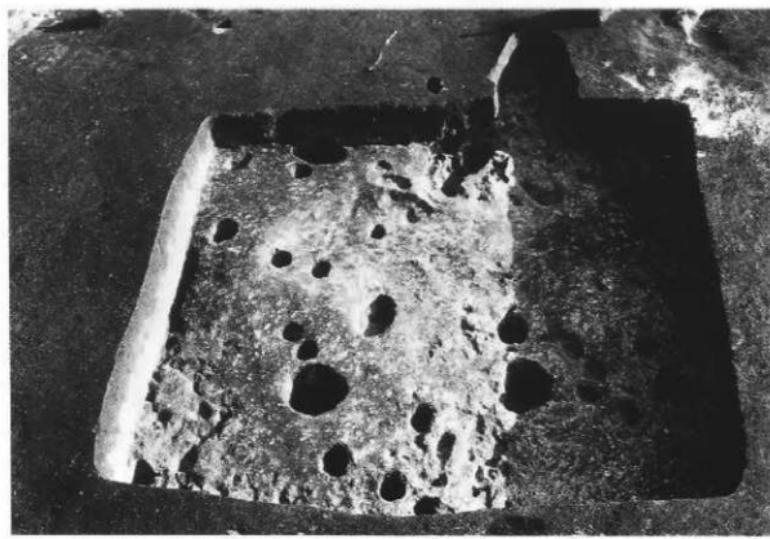
2. 遺跡基本層位 MD71グリッド 東壁 (北西▷)



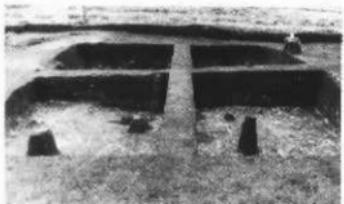
3. 北東部大湯浮石(第Ⅱ層)検出状況 (西▷)



1. SI151 積穴住居跡 検出状況 (北東△)



2. SI151 積穴住居跡 完掘後 (北西△)



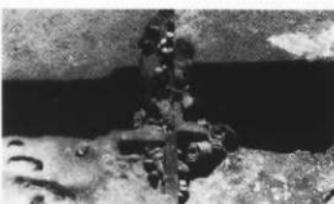
1. 穫穴住居跡土層断面—C～D— (北東D)



2. カマド検出状況 (北西D)



3. カマド土層断面—C～D— (北東D)



4. カマド遺物出土状況 (北西D)



5. カマド土層断面—C～D— (北東D)



6. カマド完掘後 (北西D)



7. カマド土層断面—C～D— (南西D)



8. カマド内土製支脚出土状況 (北東D)

SI150竪穴住居跡カマド検出および遺物出土状況など

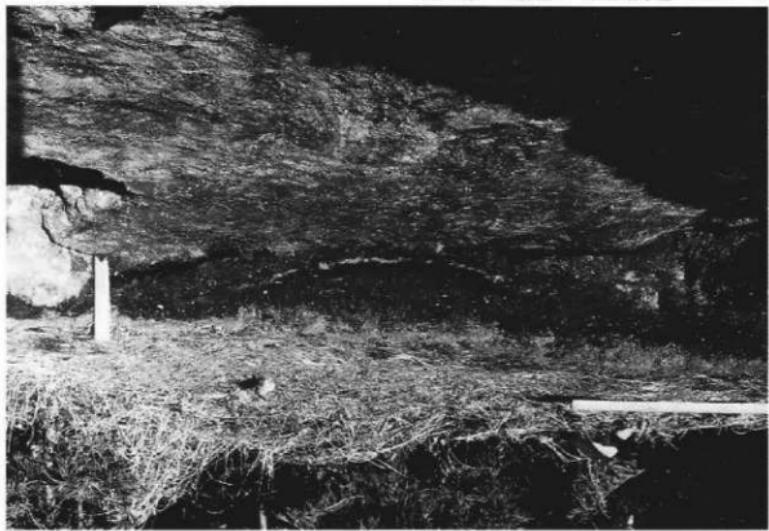


1. SI151 穹穴住居跡 完掘後 (西▷)



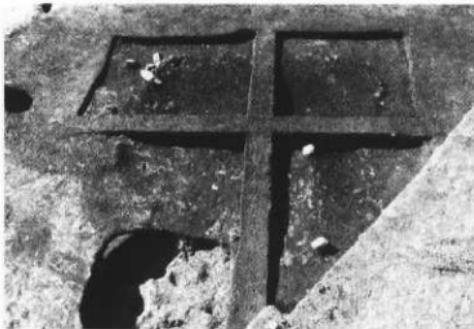
2. SI152 穹穴住居跡 完掘後 (北西▷)

2. S1157 豐次性尾跡 土器斷面 (東面△)



1. S1157 豐次性尾跡 完整體 (東△)





1. SI157 穹穴住居跡 火山灰検出状況 (東▷)



2. SI157 穹穴住居跡 火山灰検出状況 (東▷)



3. SI157 穹穴住居跡 炭化材出土状況 (東▷)



1. SI158 穹穴住居跡 遺物出土状況 (南東△)



2. SI158 穹穴住居跡 火山灰検出状況 (南西△)



1. SI158 穫穴住居跡 土層断面—A~B—（南西▷）



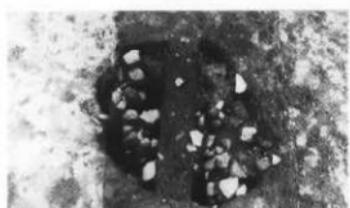
2. SI150・SI157・SI158 穫穴住居跡 完掘後（南▷）



1. SK174 土坑 検出状況 (北西▷)



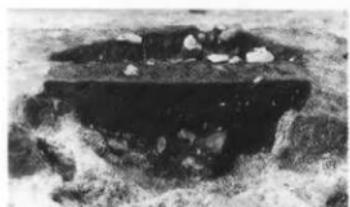
4. SX176 その他の遺構 検出状況 (北東▷)



2. SK174 土坑 精査状況 (南西▷)



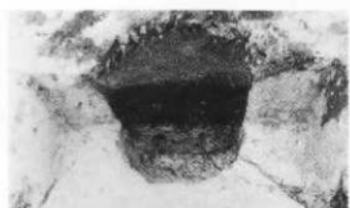
5. SX176 その他の遺構 土層断面 (南▷)



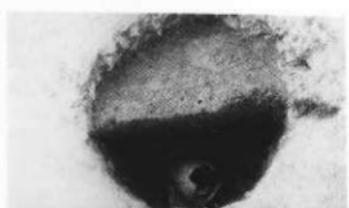
3. SK174 土坑 土層断面 (北東▷)



6. SX176 その他の遺構 遺物出土状況 (南▷)



7. 柱穴様ピット5 土層断面 (北東▷)



8. 柱穴様ピット5 把手付土器出土状況 (北東▷)



1. SD 102 空堀跡 LRライン土層断面—C～D—（北東▷）



2. SD 102 空堀跡 MAライン完掘後（南東▷）



3. SD 102 空堀跡 調査後（南西▷）



|



底面のヘラ書き号



|



外面一ヘラケズリー



底部一砂底一

SI150 積穴住居跡出土遺物(1)



46



39



50



44



48



内面—ハラナダー



底部—ハラナダー



49



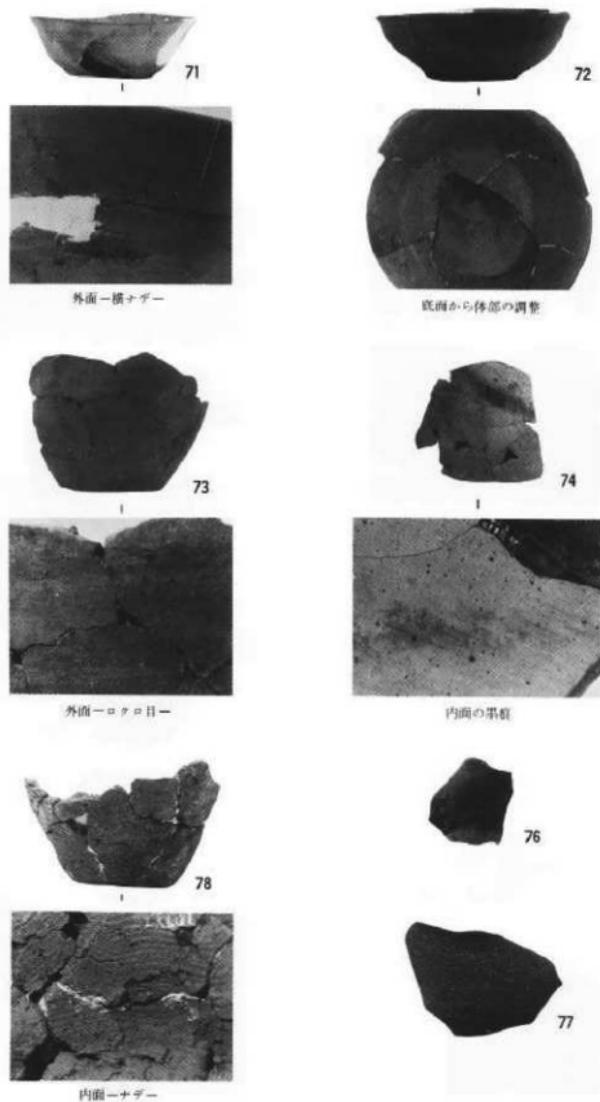
45

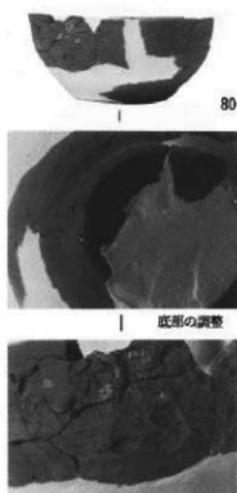


外面—ハラナダー



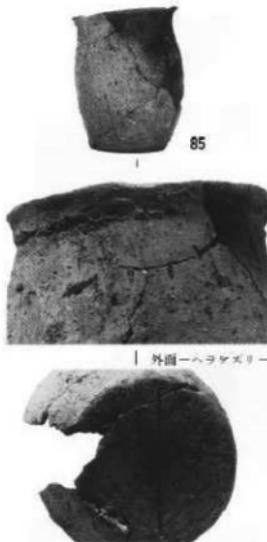
内面—ハラナダー





80

底部の調整



85

外面一ハラケズリ一

底部一木薙根一



81

214

215



把手部と本体の調整一下から一 ピット3出土

把手部と本体の調整 ピット5出土

SI 158 穂穴住居跡・柱穴様ピット3・5 出土遺物